超電磁砲のとある妹

始まりの勇者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも御坂美琴に妹（？）がいたら御坂美琴は？上条当麻は？一方通行は？と言うお話です。

とあるとｆａｔｅのクロスオーバー？

主人公はチート！

とあるの物語が一人の少女の介入によって変化する！

両方とも独自解釈のオリジナル設定

色々と指摘されていましたので今更ですが、述べていこうと思います。

見るたびに変わっているかもしれませんが許してください。

ド素人なので。

目次

序章
プロローグ：出会い ―― 1
第1章
001：私達の日常 ―― 6
002：その日の放課後 ―― 23
003：事件発生！そして～ ―― 39
004：あの人に不幸！私にも不幸!? ―― 55
005：虚空爆破事件 ―― 70
006：え？誰の妹ですか？・・・・・・美琴の妹です。 ―― 95
007：どうしてこうなった？ ―― 118
008：逮捕されました ―― 139
009：犯人が分かりました？ ―― 168
010：何故、貴方が存在している!? ―― 179
011：サーヴァントとの闘い ―真名判明― ―― 186
012・・・・・・殺す!! ―― 192
013：一つの戦いが終わり、他の所では？ ―― 198
014：黒い●● ―― 206

序章
プロローグ：出会い

――――１０年前――――

「美琴(みこと)ちゃんスゴーイ！」

「えへへ、ありがとう！」

支えなしでもう逆上がり出来るなんて、さすがだよ！」

ここはとあるどこにでもある普通の幼稚園。そのグラウンドの鉄棒がある場所で一人の少女を中心に多くの生徒が集まっている。

「運動も出来て頭も良い。本当にスゴイよ」

「そんな事ないよ。ただ、私は出来るように頑張っただけだもん。」

「頑張れる所がスゴイんだって！」

そうやって、皆は笑顔で笑っていた。

「・・・・・」

その集団を離れた所。校門の側の木の枝に座っている少女が一人。

少女はその光景を暫く見つめていたが

「くだらない」

誰に言っているわけでもないのに、少女は声に出して言った。

そして、木から降り、校門を出た。

「はあ～～～」

いったい何時までこんな生活を送らないといけないのだろうか？

後、三カ月で私は幼稚園を卒業して小学生になる。

小学生になったら少しは自由になれると思ったが、両親のせいで今の生活より厳しく制限されてしまうだろう。

確か学園都市と言ったっけ？金持ちの偉い人達がお金を出し合って東京の３分の２を買い取り、一つの都市を作りだした。

そこに、学校等の施設を作りお偉いさん達は子供達を招き入れ、ある実験を行うらしい。

実験と言われたら聞こえは悪いが、学園都市が出来て数年過ぎているがそう言った文句は一つも無い。

学園に入る時に最初の実験で脳を少しいじるらしいが、対して害はないらしく。以降の実験も問題が無いらしい。
それに加え、都市内の子供たちのお金全てはお偉いさん達が負担してくれるのが親達からしたらこれ以上無い有難い話なのだろう。
此処まで話したら分かると思うが、私もその学園都市に入る事となっている。
幼稚園の卒業と同時に入る事となっているらしい。本当に嫌になってくる。
私はただ自由に行きたいだけなのに・・・
少女は一人俯き考え歩いていると
「え、え～と、ここがここになるから」
「おいおい、本当に大丈夫かい？」
男の呻き声と老人の心配している声が聞こえた。顔を上げ、周りを見渡すと前方の少し先で男が紙を見ながら周りを確認しておりその傍で老人がその様子を心配そうに見ていた。
見た目から判断するに男の方は中学生位で、老人は４，５０代だと思う。
様子から判断するに男が老人の案内をしようとしたが、男も場所が分からず迷っているという状況だろう。
「はぁ～～～」
少し二人を見た後、私は溜息を吐き、私さっきから溜息ばかりしてるな。
「何処に行きたいんですか？」
呆れながらも、二人に話しかけた。
「「え!?」」
「ですから、何処に行きたいんですか？」
「あ、え～と○○デパートなんじゃが」
「○○デパートですね？・・・それじゃ、付いて来てください。」
そこなら、よく家族に連れていかれているので場所は分かる。何の問題も無い。
「え！案内してくれるのか？」

「・・・そうですが、何か問題でも？」
男の質問に少し怒りを覚えてしまう。確かに私は幼稚園児の子供だ。だが、場所は覚えているので案内位出来る。
苛立った私は男を睨む。
「え、えっと、ごめん！怒らせたなら謝る。ただ、案内してくれるなんて思わなくてさ」
「・・・・・・は？」
何で怒らないんですか？絶対とは言えないですが貴方は中学生ぐらいの筈、私よりも年上なのに自分よりも年下の子に生意気な態度をされて苛立たないんですか？
私はとても驚いていた。何か言い返されると思っていたので、その返答を考えていたのですが・・・
「と、とにかく、案内しますので。付いて来てください！」
色々言いたい事はあったが、今は老人の案内が優先です。
「ああ、よろしく頼むよ。さあ、じいさん行こう！」
「すまんのう」
男は返事をすると老人の荷物を片手で持ち、もう片方の手で老人の手を引いて私の後ろを付いて歩く。私はそれを確認すると目的の場所へと歩き出した。

～１０分後～
「おじいちゃ～ん！」
「おお、英治！久しぶりじゃのう、元気にしとったか？」
「うん！じいちゃんも元気だった？」
「ワシもこの通り元気いっぱいじゃ！」
老人と男の子は仲良く話し合っている。私はそれを様子を確認すると家へと歩き始めた。
「あ！ちょ、ちょっと待ってくれ」
だが、男に腕を掴まれ止められる。まだ何か用があるのだろうか？
「何か？」
「イヤ！たいした事じゃないんだけどさ。ありがとうな、手伝ってく

れて！本当に助かったよ！」
「!!」
お礼を言われたのは初めてな気がする。
それが、とても嬉しく感じられた。
「どうかしたのか？少し様子が変だぞ」
「い、いえ！何でも無いです！」
そう考えていると男が私の様子を心配してきた。私は反射的に顔を男から逸らす。そんなに顔に出ていただろうか？
あ！そういえば・・・・・・・
「あの、先程の事なのですが・・・・・・少し、聞きたい事があるのですが、良いですか？」
「ああ、構わないよ。何だ？」
「ありがとうございます。では・・・・・・」
私がこの人に聞きたい事。それは、当然
「何故、何も言い返さなかったんですか？」
会った時の行動についてだ。
「・・・・・・は？」
「だから、何故、私を怒らなかったんですか？」
どんなに考えても分からない。
「普通、自分よりも年下の子に生意気な行動や言動をされたら、イラついたりするじゃないですか！なのに、貴方は私に謝った。それは何でですか？」
「あぁ～、その事か」
私の言葉を聞いて漸く、私が言いたい事が理解できた様だ。けど、男の様子は変わらない。
「別に怒る事でもないだろう？」
「・・・・・・え？」
男は私の質問に答えた。
けど、何が言いたいのか理解できない。
「それに、君だって悪気があってあんな事をしたわけじゃないだろう？俺と同じ様に困っている老人が居たから助けたかった。」

男は語る。それが当たり前の様に！
そして、理解する。この男がどんな人物なのかを！
「そして、俺が助けてくれている君に失礼な事を言ってしまった。だから、謝った。それだけの事じゃないか？」
「!!!」
男の言葉に私は何も言えなくなった。けど、理解した！この男・・・・・・いや、この人は！
「後、しつこいかもしれないけど、手伝ってくれてありがとうな。俺だけじゃ無理だったよ」
どうしようもないくらいの善人なんだ。
「あ、そういえば、まだ名前を言ってなかったな。俺の名前は衛宮士郎（えみやしろう）。君は？」
「あ、はい！私の名前はです。」
それが私、御坂美雪と彼、衛宮士郎との出会いだった。

第1章
001：私達の日常

御坂　美雪ｓｉｄｅ

「ふんふふ～～～ん！」

時は朝の六時、場所は寮の部屋のキッチン

美雪は鼻歌を出して楽しそうに料理を作っていた。

「よし、これで今日の朝ごはんは大丈夫」

料理が出来たのを確認すると私は料理をリビングの机の上へと移し、寝室へと移動する。

寝室に入ると二つある内の片方のベットで一人の少女が寝ている。

少女の名前は音無奏（おとなしかなで）。私のルームメイトであり親友だ。

「奏、起きて！朝よ！」

奏の元に近づき声を掛け、体を揺する。

「・・・むにゅ・・・セツナ？・・・あぁ、おふぁよ～う」

奏は私の事を”セツナ”と呼ぶ。その理由について話すと、長くなるのでそれはまた後に話すとする。

「えぇ、おはよう奏。朝ごはん出来てるわよ」

「うん！分かった～」

暫く続けると奏は目を覚まし、起き上がる。

そして、寝ぼけながらも私に朝の挨拶をする。勿論私も挨拶を返す。

「食べる前に手洗い場で顔を洗いなさいよ」

「分かってるよ～」

少しは目が覚めているのだろう。奏は分かっていると返事をして洗面所に向かって行った。

私は奏が行った後、リビングの机の傍に座り奏を待つ。少しすると、奏が洗面所から戻って来た。先程と違ってスッキリとした表情をしている。

「ふ～！スッキリした～！あ、いい匂～～い」

美雪「ほら、とっとと座って。早く食べましょう」

奏がテーブルの前に座ると、互いに手を合わせ・・・・・・

「「いただきます（ま～す）！」」

朝ごはんを食べるあいさつを行う。うん！やっぱりあいさつは大事だよね？

「う～～～ん！やっぱりセツナの料理は最高だよ～～～」

「ふふふ！、ありがとう。奏。そう言ってくれると嬉しいわ！」

「はわ～～～。こんなに美味しい料理を毎日食べれるなんて私は世界一の幸せ者だよ～～～」

「い、いや、奏。流石にそれは言い過ぎ／／／」

「あ～～～！セツナ顔が赤～い、照れてるの～？」

「う・・・／／／」

奏の指摘に私は顔を逸らし沈黙。だってそうでしょう？あんな事言われたら恥ずかしいもの！

「うん・・・あ！もうこんな時間。奏、早く食べて！」

「え～～～！まだ時間に余裕あるのにどうして～～～？」

「奏・・・あなた、今日が何の日か忘れたの？」

「今日？・・・あ～、能力検査の日だ～～～」

奏は私の言葉を聞いて少し考えたらすぐに思い出した様に声を漏らす。

私はそれを見て溜息を吐いてしまう。

すぐに思い出してくれるのは嬉しいがそれなら忘れないでほしい。

「とにかく！早く食べて、準備を済まして行くわよ！」

「了解～～～」

奏は返事をすると私達は食事の速度を上げ、食事を済ませた。

食べ終えると、私は二人分の食器をもって台所に、奏は寝室へと向かう。私はご飯を作る前に着替えを済ましてあるので問題ないが、奏はまだパジャマなので着替える必要がある。

なので、私は奏が学校の支度をしている間に食器を洗っている。こ

れは私達の生活では当たり前である。私も特に苦でもないので問題なし！

「よし！これで終了っと。奏～～～、準備出来た？」

「ごめ～ん、もう少し待って～～～」

「分かったわ。玄関で待ってるから！」

私は奏に返事を返すとテーブルの横に置いてあったカバンを持ち玄関まで行き、奏が来るのを待つ。

これも私には当たり前である。私はその場で今日の夕食のメニューを考えながら待つ。

「お待たせ～～～」

少しの間考えていると奏が来た。

「ヨシ！それじゃあ行きますか！」

「シュッパーツ!!!」

私達は寮を出て自分たちの学校へと歩く。

今日も私達のこの町での学校生活が始まる。

学園都市・・・東京西部に位置する完全独立教育研究機関。あらゆる教育機関・研究組織の集合体であり、学生が人口の８割を占める学生の街にして、外部より数十年進んだ最先端科学技術が研究・運用されている科学の街。また、人為的な超能力開発が実用化され学生全員に実施されている。

そして現在学園都市に居る私達は

「ほら、奏。急ぐよ」

「分かってるよ～～～」

「だったら、もう少し速く走ってくれない？」

走って学校に向かっている。

朝ごはんを食べている時に奏が言った通り、今日は能力検査の日である。

学校が始まる時間はいつもと変わりはしないが、検査開始時間までに指定の部屋にそれぞれ着いていないといけないので、準備の必要も考えるといつもよりよりも早くに学校に着いておかなくてはならないのである。

「うわ～～～～ん！やっぱり、寮から学校までの距離が長すぎるよ～～～～！能力使ったら、楽なのに～！」

「文句言ったってしょうがないでしょ！ほら、急「チェイサーーーー!!!」”ドンッ”い・・・・・・は？」

奏の文句を返そうとしたが、途中で女のおたけびと硬いモノを殴った音が響き渡る。

「え、え、え！何？」

「奏、落ち着いて。大丈夫だから。」

「え！でも、スゴイ音したよ？」

「本当に大丈夫よ。ほら！」

私は慌てている奏を落ち着かせある方向を指さす。奏は私が指さした所を見る。その先には公園があり、この位置からだと自動販売機と・・・・・・・・・女子中学生二人が見える。

「いい加減にしてくださいまし！お姉さま！」

「別に良いじゃない！だいたいこの自販機が・・・」

何故か分からないが二人が自販機の前で口喧嘩をしている。
いや、二人とも私は知っている人物だ。
そうすると、さっきの音が何によるのかは想像出来る。

「・・・ねえ、セツナ。あれってさぁ～」

あの二人を見て奏は普段の穏やかな雰囲気と違い殺伐した状態に変わる。明らかに怒っている。
第三者から見たら、自販機に関しての事に怒っている様に見えるが違う。
奏が怒っているのは、自販機に損害を与えた彼女にではなく、御坂（みさか）美琴（みこと）に怒っている。
御坂　美琴。私、御坂　美雪の姉だ。

「落ち着きなさい、奏！」

怒りを露わにしている奏を落ち着かせ様とと宥める。
それでも奏が落ち着きそうにない

「でも！・・・あれ？」

すると、奏が急にふぬけた声を出し、雰囲気が元に戻る。
「どうしたの？」と聞きながら自販機の方を見ると先程居た二人はおらず、飲みかけの缶ジュースだけが地面に転がっていた。
ああ・・・・・・成程ね！
「消えちゃった！何で？」
「瞬間移動（テレポート）よ」
首を傾げている奏に言う。
「さっき居たツインテールの子。その子の能力が瞬間移動なのよ。消えたのはその子が能力を使用したから。」
私の説明を聞き、奏はなるほど～と納得した顔をしている。すると、遠くから何かが近づいてくる音が聞こえてくる。
「これは・・・・・マズ！奏！」
「ふぇ！セツナ、どうしたの～」
先程の音で何が近づいて来ているかが分かった私は直ぐに奏の手を掴み公園から離れる。すると・・・・・・
「”警告！警告！自動販売機ＮＯ７６５２８７６の機台の外部からの衝撃を確認・・・・・・・”」
複数の警備ロボットが自販機の元に集まって来た。
その様子を見てようやく、全てが理解できた。
「ね、ねえセツナ！私達捕まったりしないよね？」

「大丈夫よ！あれが来る前にはここに着いていたし、警備ロボット達の視野ではここに居る私達は視認出来ないから」

私達は今、公園の傍にある建物同士の間にある通路に居る。警備ロボットは自販機の周辺を索敵しているので私達が見つかる事は無い。

暫く待っていると、警備ロボット達は自販機から去って行った。

私達はそれを確認すると表へと出る。

「はぁ～、ビックリした～！でも、何で来たんだろう？」

「ああ、最初にスゴイ音がしたでしょう？あれが原因よ！」

「・・・・へぇ～～～！と言う事は～、結局原因はあいつらなんだ～～～？」

私が警備ロボット達が来た原因を言った途端に奏は先程見せた雰囲気を纏う。別にあの二人に被害が及んでも私は構わないが、それだと奏自身にが風紀委員（ジャッジメント）や警備員（アンチスキル）に捕まる事となってしまうので、絶対にそんな事はさせない。

「ふふふ・・・・・・あれ！そういえばあの二人は何処に消えたの？」

私がそう考えていると奏がある疑問を述べた。・・・・・・というか、最初に気づく疑問よね、これ？

「ああ、二人なら・・・・・・ほら、あそこ」

私はある場所を指さす。場所は私達の目の前にある建物の屋上。そこには先程、自販機の前に居た二人が居た。

「おお～、はっけ～～～ん！」

二人を視認した途端に奏はまた雰囲気が変わる。そして、勿論私がその奏（これからは黒奏と書く）を止める。

「はいはい、やらせないわよ！」

「む～～～止めないでよセツナって、あ～！消えちゃった～」

私が止める事に文句を言っていると屋上に居た二人は再び消えた。

「ほら、そのあいつらも消えたんだから。私達はとっとと学校に急ぐわよ」

二人があの場所に居た理由は直ぐに自販機から離れなければならなかった、後、警備員ロボットが自分達の事を察知されていないかの確認のためである。

先程見た通り、警備ロボットが駆けつけたが犯人が判明できずそのまま帰っていった。つまり、ばれなかった。だから、もうあの二人がここに残る理由は無い。

これらの理由で二人が瞬間移動でこの場周辺ではなく、学校へと移動したのだろう。だから、奏がこれ以上出来る事は無い。

「で、でも～～～」

それでも、奏は文句を言い続ける。一体何度これを繰り返すのか、私は呆れる。

はあ～、しょうがない！

「学校、遅刻するわよ！」

「・・・・・・あぁ～～～!!!」

美雪の指摘で奏は思い出し叫ぶ。
そう。今、私達は学校に登校中なのである。
「で、でも出始めた頃で少し余裕があった筈だから。今なら丁度良いんじゃないかな？」
「奏・・・・・・丁度どころか余裕でアウトよ。残念ながら！」
「いやあぁぁぁ～～～！」
先程にも増しての絶叫を上げる奏であった。

木之子（このし）中学校・・・・・たいした長所もない何処にでもある様な平凡な学校。
これを命名した理由は誰も知らない。
「はぁ～～～、毎月思うけど、この日だけは本当に暇ね」
とある教室に美雪一人居た。
「奏の能力値（レベル）。上がったかしら？」
一応出来る限りのアドバイスはしたし、大丈夫よね？
自分ではなく、奏の事を心配している。私である。
「誰だそこに居るのは？・・・・・あぁ、御坂か」
「どうも、沙菅さすが先生。検査は終了したんですか？」

今、私が話している人は沙菅先生。この学園の教師の一人だ。担当教科は数学だ。

「あぁ、私の担当も含めて全て終わったよ。」

「そうですか・・・・・・それで、結果はどうでしたか?」

能力検査が終わった事を確認すると生徒の結果はどうだったかを聞いてみた。

すると先生は・・・

「あ、あぁ!まあな・・・」

私から目を逸らし、表情を曇らせる。

「え、え〜〜〜と」

「すまない!御坂が考えている通りだと思うが・・・・・・」

「それじゃあ、やっぱり」

「あぁ、誰も能力値上昇（レベルアップ）していなかったよ」

沙菅先生は残念そうに言った。

言い終わると、先生は私の隣の席に着き・・・・・・

「はぁ〜〜〜〜〜〜」

大きな溜息を吐いた。

「せ、先生!大丈夫ですか?」

「・・・大丈夫だ、問題無い！」

「まあ、大丈夫ですよ。皆だって頑張ってるんですから。いつか必ず結果が出ますよ」

「・・・・・・それは何時だ？」

「・・・・・・・さ、さあ？」

「「・・・・・・・・・・・」」

教室が沈黙で満たされる。そして・・・・・・・

「クソオオオオオオ!!!」

沙菅先生の絶叫が教室に響き渡る。

「何故だ！俺の教え方が駄目なのか？」

「せ、先生！落ち着いてください」

「更にその生徒に慰められた！」

すると、沙菅先生は暴れまわる。

「きゃぁぁぁ！まさかの逆効果！」

戸惑いながらも美雪は暴れる沙菅先生を宥める

～～～１０分後～～～

「はぁ、はぁ、はぁ～・・・・・・・落ち着きましたか、先生？」

「・・・・・・あぁ。何というか色々とすまない。」

長い時間を掛け、漸く沙菅先生を落ち着かせる事に成功した。というか、何故私がこんな事を・・・・・・・

「先生、何度も言いますが・・・・・・・」

「いや、もう大丈夫さ！」

「先生・・・・・・」

「御坂の言う通り、生徒皆頑張っている。なのに教師の俺がへこんでいたらダメだ！」

「そうですよ、これからも頑張っていけば大丈夫です。」

「あぁ！これからも頑張るぞ」

そう言い、私達は笑い合った。すると・・・・・・

”ガラッ！”

「セッツナーーー!!!」

教室のドアが開き、そこから奏が入ってきた。そして・・・・・・

”ズドンッ”

「げ、ゲフッ！」

私の胸へと突撃してきた。

「か、奏・・・痛い」

「私の能力のレベル、上がってたよ！」

おお！奏のレベルは上がっていた。良かった～！

でも、痛い。

「えぇ、それはおめでとう！これで強能力者（レベル３）ね！」

「うん！これもセツナのおかげだよ～～～」

「いやいや、私は少しあなたに助言しただけ。結果を出したのはあなたの実力よ」

「それでも、ありがとう～～～」

奏は再びお礼を言う。

その顔は喜びに満ち溢れていた。

そんな奏の頭を私は撫でた。

「ふふふ！どういたしまして」

「エへへへへ！」

私達は奏の結果に喜び笑い合った。そして・・・・・・

「Ｖｅｒｄａｍｍｔ！」

「「ヒアァッ！」」

急に沙菅先生が叫んで地面に跪いた。

というか、何で日本語じゃなくて外来語！

「ええ～～と、美雪。あれ何て言ってるの？」

「え！あ、うん。え～と、確か・・・使っている言葉はドイツ語で、意味は”畜生”ね」

先生の発した言葉が解らない奏は私に聞いてきたのでそれに答える。というか、何でドイツ語なんでしょうか？

「Ｗａｒｕｍ　ｉｓｔ　ｄａｓ　ｉｎ　Ｍｉｓａｋａ　ｓｅｉｎ，ｄｉｅ　ｍｉｃｈ　ｎｉｃｈｔ　ｓｅｉｎ　ｋａｎｎ！」

「セツナ」

「どうして私に出来ない事が生徒に出来るのだ！・・・・・・だって」

再び奏は私に翻訳を頼む。そして、私は先生の言葉を翻訳する。

そろそろ翻訳をするのは面倒になってきたわね。

「ｕｕｕｕｕｕ・・・・・・・」

「ねえ、セツナ・・・・・・・沙菅先生。大丈夫かな？」

「た、多分！」

ナーバス状態の先生を見て、私達は小言で話し合う。本当に大丈夫よね？

”バッ!”

すると先生は急に立ち上がる。

「わっ!」

「せ、先生、大丈夫ですか?」

私は先生に声を掛けるが返事が返ってこない。あれ?せ、先生〜〜〜?

「もうやってられるか!!!」

「そこだけ日本語!?」

「おぉ〜〜〜!日本語に戻った〜〜〜」

先生の言葉に私はツッコミ、奏は納得?していた。

「もう教師なんてやめてやる〜〜〜〜」

その言葉を最後に先生は教室を走り去って行った。

私達は暫くポカンとしていたが・・・・・・

「ハッ!せ、先生。ダメです!待ってください!!」

「あ!待ってよ〜〜〜セツナ〜〜〜」

私達は数秒遅れてから先生を追いかけ始めた。

「止めないでくれ！俺は今から校長に辞職表を出しに行くんだ。」

「だから、ダメですって！」

「待ってよ～～～、セツナ～～～～！」

「奏も止めてよ!!!」

これはこの学校で起こる物語の一つ。

全く、この学校も含めて本当に退屈しないわね・・・・・・この町は！

００２：その日の放課後

御坂　美雪ｓｉｄｅ

現在の時刻は午後三時。学校の授業を終えた私と奏の二人は朝通った道を逆に歩いていた。

普段の私達なら寄り道でもして遊ぶところなのだが・・・・・・・

「・・・・・・はぁ」

私達は疲れ果てた表情をして歩く。そのうえ溜息を吐いてしまう。

「ねぇ～～、セツナ～～～」

「・・・・・・何、奏？」

「今日はとても疲れたね」

「えぇ、とっっっっても疲れたわ!!!」

「「・・・・・・はぁ～～～～！」」

奏と少し話し合い、目を合わせ再び溜息を吐く。さっきの溜息よりも長く吐いた気がする。

「まさか、あんな事になるなんて・・・」

「本当にね～～～」

「何で奏は他人事みたいに言ってるの!?」

さて、何故私達がこんなに疲れているかと言うと沙菅先生の暴走（前話）が原因だ。

あの後、私達は先生に追いつき確保、そして説得をして何とか納得させた。だが、狙ったかの様なタイミングで一人の生徒が私の元に駆け寄ってきてお礼を言った。

内容は奏でと同じように自分の能力のレベルが上がった事だった。

ここまで言ったら、もう分かるだろう。

そう！私が能力の指導をしたのは奏だけでは無い。学年関係なしに多くの生徒に教えていたのだ。

まあ、とりあえず私自身のせい？で余計に沙菅先生のプライドを傷付けてしまったのだ。

結果的に言えば沙菅先生を落ち着かせる事には成功したのだが、そうするのに約一時間も時間が掛かり本当に疲れた。

美雪「・・・・・・まあ、溜息を付くのもこれくらいにして寮に帰りましょう？もう何もする気が起きないわ」

奏「そうだね～～～・・・・・・・あ！セツナ！あれ見て！」

美雪「どうしたの奏？そんなに、はしゃいで・・・ああ、あれね」

奏が見ている方を見る。そこには、クレープ屋があった。だが、ここからはかなり距離がある公園みあり、更にその奥にあるのが見える。というか・・・・・・

美雪「あのさ、奏・・・・・・どうやって、あれを見つけたの？」

奏「フフフ！分かってないな～、セツナは！」

美雪「え～と、何となく理解できる出来るけど一応聞くわ。私が分

かってない事って何？」

奏「フフフ！それはね～」

奏はとても自慢げに笑った。

奏「甘いものは私に不可能を可能に「しないわよ」するの！て、即否定！」

自信満々に言った言葉を否定された奏は少しショックを受けている。いや、そんな表情をされても困るんだけど。

奏「え～！絶対あるよ～！」

美雪「あったとしても、それは奏を含めた極少数の女の子に限られるわね」

奏「え～、そうかな～？・・・・・・うん、まあ、今はそれよりもクレープ屋にレッツゴー！」

美雪「行くことはもう確定なのね？」

私は呆れながら呟く。掛け声と同時に私の腕を引いてるし・・・・・

奏「勿論！ほら、早く！急がないと、クレープが無くなっちゃうよ～！」

美雪「いや、無くならないから」

まったく、奏も疲れている筈なのに何で今日に行こうとするのかしら？

まあ、私も嫌じゃないから良いか。
そう結論付けて私も奏の後を追いかけた。

奏「セツナは何食べる？」

美雪「う～ん、じゃあ、チョコバナナクリームで！」

奏「分かった！それじゃあ、買ってくるから、セツナは席を取っといて！」

美雪「分かったわ。クレープよろしくね？」

奏「うん！それじゃあ、行ってきま～す！」

返事を返すと奏はクレープ屋に走って行った。
さて、私は席を確保しないと。

美雪「え～と・・・・・あそこが空いてるわね」

周りを見渡していると少し離れた所に空いたベンチを見つけた。
私はベンチまで歩き座る。

「ふぅ」

思わず一息ついてしまう。奏にいきなり連れてこられてやれやれと思ったけど、一休み出来たのは嬉しい事だ。今日の学校は本当に疲れたのだから。

「奏には感謝しないとね」

私は思った事を呟いた。

「何が～？」

「キャッ！」

突然の返答に軽く叫んでしまった。声のした方を見ると、そこには奏が居て両手にクレープを持っている。

「奏、脅かさないでよ！」

「え～！私は普通に近づいたし、特別大きな声も出してないよ？」

そうだったかしら？・・・・・・確かに、思い出してみればそうね。

「そうね、ごめんなさい。少し、呆けてたみたい。」

「も～、気をつけなきゃ駄目だよ！セツナ。で？何で私に感謝なの？」

奏は私に注意し、先ほどの私の言葉について聞いてきた。

「奏のおかげで一休み出来たことによ。思ったよりも疲れていたみたいでね」

「ええ！そうなの、セツナ！大丈夫なの？」

「ありがとう、心配してくれて。大丈夫だから！」

私が説明すると奏が慌てて心配する。

まあ、心配される程酷くはないので”大丈夫”と落ち着かせる。

「本当？なら良いんだけど・・・・・・はい、頼まれたクレープ！」

「ええ、ありがとう」

落ち着いた奏は買って来てくれたクレープを私に渡してくれた。
うん！ちゃんと頼んだ通り、チョコバナナクリームね・・・・・・あれ？そういえば

「奏、あなたは何・・・を！」

奏が何のクレープを注文したのか気になったので奏の方を見て聞いてみたのだが、奏の手にあるクレープに衝撃を受け絶句してしまった。

「か、奏。何それ？」

「うん？ああ、これ？」

私の言葉に奏は私に自身のクレープを近づける。
というか、本当に何これ？今私にはクレープから七色の生クリーム（？）に異常にに長く黒いバナナ（？）が見える。
本当に何なの？

「フフフ！これはね～、期間限定レインボーワールドだ～～～！」

「・・・・・・」

え、今奏は何と言ったの？レインボーワールド？何それ？

「七色の生クリームのそれぞれの色に果物の味！そして、焼いてブ

ラックチョコレートを塗った真っ黒のバナナ。もう、最高だよ～～～！」

私が考えている中、奏は凄い勢いでレインボーワールドを食べていた。

「奏。それ、おいいしいの？」

そんな奏に聞いてみた。だって、気になるし・・・・・・・

「うん！とってもおいいしいよ！セツナも食べてみなよ？」

「・・・・・・え？」

「本当に美味しいから、はい、どうぞ！」

そう言い、奏は私にクレープを近づけた。

え、マジで？

「はい、あ～ん！」

更に奏は笑顔で私にクレープを近づけた。

わぁ～凄い笑顔！まあ、奏も美味しそうに食べてるし、大丈夫よね？

「じゃ、じゃあ・・・いただきます。」

そして、私は奏のクレープを一口食べた。そして・・・・・・私の意識は途絶えた。

「・・・・・・・・・・・は！」

私は意識を取り戻した・・・・・・・て、あれ？

「あ、起きた！セツナ、大丈夫？」

すると、上から声が聞こえる。声の主は奏だった。

「私は・・・・・・何で？」

何で私、ベンチに寝ているの？

「も～う、ビックリしたよ～！セツナったら、クレープを食べた途端に

気を失ったんだから～」

「・・・・・・え～～～」

私は驚愕した。いやいやいや、流石にクレープを食べて気を失うってのはないでしょう？

「う～ん、セツナが言いたい事も十分に分かるんだけどね～！」

私の表情を見て察し、うんうんと頷いているが、先程の言葉を訂正はしてくれていない

「・・・・・・本当なの？」

「本当だよ」

私が再び確認すると、奏からは同じ答えが返ってくる。

思わず溜息をついてしまう。

「本当に大丈夫？」

そんな私を見て、奏は私の事を心配してじっと見つめている。

「大丈夫よ、奏。心配してくれてありがとう！」

私はお礼を言い、奏の頭を撫でた。すると、奏は先程の暗い表情から笑顔へと変わり、笑った。

うん！やっぱり、奏は笑顔が一番！

あ！そういえば・・・・・・

「奏、私のクレープは？意識を失う前までに食べ終えてなかったと思

うのだけど」

「ああ、それはね。ははははは」

クレープの事について聞くと奏は何かをごまかそうと必死だ。

ああ、成程ね。

「食べたのね？」

”ビクッ”

「・・・・・・」

その言葉に奏は大きく反応した。

「やっぱり、か」

「ご、ごめ～ん！」

奏は慌てて私に謝る。が・・・・・・

「別に良いわよ」

「・・・・・・へ？」

奏は呆けた声を出した。

「別に食べた事に怒ってなんかないわよ？ただ、どうなったのかが気になっただけよ」

「な～んだ！私はてっきり怒られると思ったよ～」

「そんな事で怒らないわよ」

「良かった～～～！」

私が怒ってない事が分かった奏は安心した様に呟いた。全く！私はそんな事程度で、怒ったりしないわよ！

「それにしても・・・・・・私が眠っている間に随分と子供達が来た様ね」

周りを見てみると、公園は多くの子供達がおり、遊んだり、先程、私達が利用したクレープ屋のクレープを食べたりしている。

「うん、そうなんだよ～！私もいきなり大人数で来たからビックリしたよ～！」

「え？どういう事？」

「ほら、あれ！」

奏に尋ねると、ある方向を指さした。その方を見ると観光バスがあり、そのドア付近で

「休憩は三十分です！あまり遠くまで行かずにこの公園内でいてくださいね！」

と、バスガイドの女性が子供達に言っている。

「成程、学園都市の観光というわけね」

「うん、そうみたい！」

学園都市に入る事が許されているのは学園都市内の学校の入学者か学園都市の上層部等のお偉いさんが認めた大人達に限られている。だが、そんな所に行かせるのが不安な親も居るので子供達のみになるが入学する前の体験の様な感じで学園都市の観光が可能となっているのだ。

「今回も多くの子供達が来てるね～」

「そうね、でも・・・・・・」

私はこの世界の裏を知っている。だから・・・・・・

「(どうしても、良い様には思えないのよね)」

「？奏、何か言った？」

「ううん、何も言って「ちょ！御坂さん、大丈夫ですか！」!!!

会話の途中、誰かの声で私の声が消された。それよりも御坂って、まさか！

慌てて声のする方を見るとそこには・・・・・・

「・・・・・・は？」

地面に跪く常盤台中学の超電磁砲とそれを心配して慌てている女子中学生が居た。しかも、クレープ屋の前に！

何、あれ？バカなの？店の迷惑とか考えなさいよ！

欲しかったクレープが売り切れたのかは知らないけど大げさ過ぎよ！

あ！マズイ！

「奏！落ちつ・・・・・・て、あれ？」

奏はいつもあの人を見つける度に襲い掛かろうとする。だから、今回も襲おうとすると思ったのだが

「うん？どうかしたの、セツナ？」

奏は特に変わる事無く普通だった。あれ、おかしいな？いや、それで良いんだけどね！

「え～と、奏？あいつが居るのに落ち着いているけど、どうしたの？」

「う～ん、まあ、あいつは気に食わないけどさ～。今は、苦しんでいるから良いかな～って！」

言って、奏は笑った。

「あぁ～、成程！」

私は納得した。まあ、普通は納得してはいけないでしょうが、私にとって

奏が暴れる〉御坂美琴が苦しむ

だから、問題ない！

「あ！そういえば、セツナにこれあげる！」

その表情のまま、奏は私にあるモノを渡した。こ、これは・・・・・

「カエル？いや、それにしては・・・・・・ああ、ゲコ太ね！」

ゲコ太・・・両生類のカエルをモチーフとした、キャラクター。

「これ、どうしたの？」

「クレープを買った時に貰ったの！」

成程ね、クレープを買ったら特典として貰えるわけね。

周りの子供達もクレープと一緒にゲコ太ストラップを持っている。

うん？待てよ、確か・・・・・・

「そういう事ね！」

これで全て理解できた。思わず溜息をついてしまう。

「うん！どうしたの、セツナ？」

「あの人の落ち込みの原因が分かったのよ」

「おぉ！流石、セツナ！で、何々？」

奏が生き生きとした表情で迫ってくる。そんなに凄い事じゃないいんだけど。

「これよ」

「・・・・・・へ？」

「これよ」

私は奏に原因のモノを見せる。

それは・・・・・・ゲコ太ストラップ

「えと～、セツナ～。冗談キツイよ～～～」

「いいえ、私は本気よ」

「・・・・・・えぇぇーーー」

奏は信じられないと言う顔をしている。

うん！まあ、奏の気持ちも分からないわけじゃないけどね。

「あいつは、ゲコ太が好きなのよ。もう引いてしまうレベルでね」

「へ～！だから、あんなに落ち込んでるんだ～」

もう一度、彼女を見る。どうやら、ゲコ太は諦めてそのままクレープを注文した様だ。だが、遠くから見ても分かる位スンゴイ落ち込んでいる。

「一応聞くけどさ～、それあげないの？」

「あげないわよ！これは、私が奏から貰ったモノだしね」

迷いなく即答する。

「そっか～、ありがとう。セツナ！」

「それは、私のセリフだと思うのだけど・・・・・・まあ、良いわ。ど

ういたしまして」

奏は微笑んだ。そして、私も

私達にあいつは関係ない！だから、これからも私とあいつが関わる事など無い様にしたい！

私とあいつに繋がりなんて存在しないのだから

００３：事件発生！そして～

御坂　美雪ｓｉｄｅ

「ふう～、結構長居したわね」

公園の時計を見ると、時刻は四時半。ここに来たのは三時頃だったのでおよそ一時間半ここに居た事になる。

「そろそろ、帰る？」

「そうね、それじゃあ、帰りましょう」

私達は寮へ帰ろうとベンチから公園の外へと歩きだした。

「いえ、あそこの銀行なんですけど・・・・・何で昼間から防犯シャッター下してるんでしょうか？」

が、公園内で聞こえた声で私達は立ち止まり、その銀行を見る。確かに銀行のシャッターが下りている。

「ねえ、セツナ！これって・・・・・・」

”ドーーーン”

周辺に爆発音が響き渡る。先程まで存在していたシャッターは木っ端微塵に吹き飛び中から煙が出ている。

恐らく、銀行の中から爆弾か能力を使用して破壊したのでしょうね。

「ええ、銀行強盗ね！」

見ていると、煙の中から三人の男達が飛び出し走りだした。男達は全員布で顔を隠し、腕には大きなカバンを背負っている。
まず、やつらが犯人と見て間違いないだろう。
まあ、取り敢えずは・・・・・・・

「はい、ストップ！」

私は今にも男達を捕まえ様と動き出す奏の腕を掴んで止めた。

「え！な、何で？セツナ！」

奏は意味が分からないと言う感じで私の顔を見ている。はあ、あのねえ・・・・・・

「忘れたの？こういう事件は風紀委員の仕事！奏は勝手に手を出しちゃダメなの！」

「え～！でも～」

私が注意しても奏は納得していない様だった。あのねぇ・・・・・・

「それに、見てみなさい」

銀行を指す。そこでは・・・・・・

「ジャッジメントですの！器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します。」

朝の自販機の前で見たツインテールのテレポーターが男達の前に立ち捕まえ様としている。

「ほら、あっちも」

そして、私はもう一つの場所を指す。

「はい！第七学区ふれあい公園前の銀行で強盗が発生！アンチスキルの出動を要請します。」

頭に花飾りを付けた女の子がアンチスキルの出動する様に連絡している。

「ほら、分かったでしょ？ここには、ジャッジメントが二人も居て、直にアンチスキルもやってくる！」

「で、でも～」

まだ、納得出来ない様だ。

「はあ～、奏！強盗はあいつらに任せて、あなたは子供達の非難を手伝って！」

「！　うん、分かった」

「バスガイドさんに声を掛けて、子供達の事を聞いてからよ。分かったわね？」

「分かった！じゃあ、行ってくる！」

奏はバスガイドの元へ走り出した。奏、お願いね。

「さてと、奏もやってるわけだし・・・・・私もやるべき事をしましょうか！」

私は鞄の中から通信機を、ポケットからデバイスを取り出す。

「コード　ＪＱＳＥＧＫ３Ｈ７６ＫＧＹ９５ＫＯ」

”ピピッ、コード認証”

「何だ、カグラ？」

通信機の認証の次に聞こえてきたのは男の声。

「はい、第七学区のふれあい公園前で強盗が発生しました。」

私は淡々と用件だけを伝える。

「ふむ！それで、ジャッジメントは居るのか？」

「はい、現在二人。一人が犯人の確保、もう一人がアンチスキルの出動要請、市民の非難の手伝いをしています。」

私は男の質問に周りをよく見て、正確に伝える。

「成程・・・では、今回も監視を行え」

「分かりました。それでは、事件の全ての記録を始めます。終了次第に再び連絡します。」

「頼んだぞ！」

”ブチッ”

通信機から途切れた音が出る。無理やり通信を切られたのだ。これもいつもの事だ。必要最低限の会話をしたら、それで終わり。

「ふう～、さて、始めますか」

一度深呼吸をしてから、気合を入れ直し、デバイスを操作する。

”記録モード　起動!”

デバイスの機能の一つを起動させ、事件の記録をする。と、忘れてた!

オプション　≫　データ追加　≫　ＥＭ００１→Ｎｏ０００１

これで、全ての準備は整った。

私はデバイスの記録を開始する。

「舐めんなよ、このクソガキ!」

犯人Ａが怒り右手から炎を出現させる。（これから、犯人達をＡ，Ｂ，Ｃとします）

成程、先程の爆発は彼の能力の仕業ですか。確かに、あのレベルの能力なら可能でしょう。

「喰らいやがれ!」

男Ａは叫びながらツインテールに炎を投げつけるが・・・・・・

「何!何処に行きやがった?」

炎はツインテールにではなく、地面に当たり爆発した。そして、ツ

インテールは・・・・・・・

「何処を見ていますの？」

犯人Ａの男の目の前に居た。犯人Ａは理解できていないだろうが、ツインテールは炎が直撃する直前に自分の能力（瞬間移動）を使い、犯人Ａの前に移動して避けたのだ。

「な！いつの間に！」

気づいた犯人Ａは直ぐに殴りかかる。あの人、ツインテールの能力を先程見た筈なのに。避けられるのが分からないのかしら？

「いい加減に諦めなさいな！」

「ガハッ!!!」

ほら、見なさい。ツインテールは再び瞬間移動して、相手の一撃を避けた。

そして、今回は犯人Ａの後頭部に移動して蹴りを与えて犯人Ａを倒した。

次に、犯人Ｂの後ろに移動して地面に打ち付け鉄子を犯人Ｂの衣服と道路に瞬間移動させて犯人Ｂの動きを封じる。

「これ以上抵抗するのでしたら、これをあなたの内部にプレゼントいたしますわよ？」

ツインテールは犯人Ｂにこれ以上抵抗しない様に脅迫する。というか、本当にしたりしないでしょうね？したら、あなたが捕まるわよ？

とにかく、これで三人の内二人を捕らえた。これで残りは一人。

「クソ！こんな筈じゃ！」

犯人Ｃはこの場から逃げ出した。まあ、この現状を見たら仕方がないわね。

まあ、直ぐにツインテールが捕まえて終わりね。

私はそう考え、デバイスの操作を終える準備を始め様かと思ったが・・・・・・・

「黒子!!!」

「・・・・・・え？」

突然あいつ（御坂美琴）の叫び声が響き渡る。

あれ？とて～も嫌な予感がする？

「こっからは私の個人的な喧嘩だから、手を出させてもらうわよ？」

あいつの方を見ると怒り顔で犯人Ｃの方を睨んでいた。後、服には彼女が食べていたであろうクレープが付いている。

うわ～！もう殺る気満々ですね！はぁ～、面倒事が増えるわ～

「は、はいですの！」

ツインテールなんか、ただ返事して後は固まってるし、止めなさいよ！

「セツナ～！非難の手伝い終わったよ～！」

嫌な事ばかり起きて、へこんでいると奏が帰ってきた。

「怪我人は居る？」

「ううん！全員無事だよ！」

「そう、ありがとうね。奏」

非難も完了し怪我人も０！良かった、良かった・・・・・・いや、これから怪我人が出るのか？

そう考えるとへこむわね

「???セツナ、どうしたの～？」

私を見て、奏は私に大丈夫かと聞いてきた。やっぱり、分かるよね。

「・・・・・・あれ」

私は奏にあいつの方を見る様に指さす。

「うん？・・・！あいつ～また余計な事を～”バシン”痛！」

再び黒奏になろうとしていたので悪いと思うがしばく。

「何するのさ～、セツナ～・・・・・・て、どうしたの!?」

私に文句を言おうと私の方を見るが、見た途端驚きの声を出す。

それも仕方が無い。何故なら私はとても悲しみに満ちた顔をしており、今にも泣きそうなのだ。

「これ以上はもう耐えられないのよ（涙）」

「・・・・・・ごめん！セツナ、私が悪かったよ」

「分かってくれたなら良いのよ」

「・・・・・・はぁ～～～」

今の現状を察し、私達は大きな溜息を吐いた。そして！

”ドッガーーーン！”

道路から轟音が響き渡る。あぁ、やっぱり

道路全体を見てみると、左の方には何かの衝撃で吹き飛ばされた車、右側にはあいつが居た。

もう理解できるだろう？そう！御坂美琴がこの現状を造りだしたのです！

恐らく自分の異名の超電磁砲を撃ったのでしょうね？じゃなきゃ、こんな風になる筈がない！

「セツナ～、大丈夫？」

奏はとても不安な顔をして、私を見る。

「・・・・・・あのね、奏」

奏に私は笑顔を見せ、答える。

「大丈夫なわけないでしょう？」

あいつが事件に関わって穏便に済んだ事など試しが一度も無い！

「もう、最悪よ・・・・・・・・・けど、結果はどうあれこれで今回の件は解決ね」

私はデバイスを操作する。

”記録モード　終了”

記憶モードを終了し事件の記録を終える。次に通信機に事件前に連絡を入れた時と同様にコードを言い認証させ、再び上層部に連絡を入れる。

「カグラ、監視は終わった様だな？」

「はい、事件は無事解決しました。」

「ふむ、それなら良い。では、早速データを送ってくれるかな？」

「分かりました。」

データ送信　≫　Ｎｏ００１→ＧＺ００７

デバイスを操作しデータを送信する。

ほんの数秒で画面には送信完了の文字が現れる。

「データを送りました。」

「ああ、データの送信を確認した。ご苦労だったな、カグラ。これからも、頼んだぞ」

”ブチッ”

通信が切られた。毎回思うけど、上層部の人はそっけないわね。

「さて、事件も終了したし監視も終了。奏、帰りましょう。」

「うん～、そだね～」

私達は寮へと帰るために公園を出てい行った。

え！あいつらや犯人達はどうしたか？

犯人達は事件が解決した後に来たアンチスキルに連行。あいつらはなんやかんやで騒いでいたので放置です。

”ピピピ”

「ん？」

寮へと帰っている途中、私の携帯から着信音が鳴る。

「どうしたの、奏？」

「うん、メールみたい・・・・・・げ！」

私は携帯を取り出し、内容を読む。と、上層部からだった。

「上層部からよ・・・・・内容はさっきの事件で破壊された道路の修復と今回担当したジャッジメントに注意をしておけだってさ」

「うわあ～、また面倒なの頼まれたね～」

本当よ！パシリみたいに扱って！

「はぁ～、私はとっとと終わらせてくるから。奏は先に帰ってて」

「うん、分かった。気を付けてね」

奏は寮へと帰り、私は事件があった銀行へと向かった。

「うわぁ～、やっぱり凄い被害よね、これは！」

銀行へと着いた私はその壊された道路を見る。道は一本の直線の様に真っすぐ抉られ、その周りもひび割れていて、本当に酷い!!!

「これが、自分の姉がやったと思うと頭が痛くなってくるわ」

思わず頭を抱える。だが、こうやっていても何も変わったりしない。

一度、深呼吸を行い、頭を切り替える・・・・・ヨシ、もう大丈夫！

「さて、始めますか！」

私はしゃがみ込み地面に片手触れる。

目を瞑り集中する。

「”劇場の始まり（オン・ステージ）”」

魔術を発動するキーを発言する。

そして、魔術を起動

「”解析開始（サーチ・スタート）”」

腕に血管のように流れている光の線が手から地面へと続き広がっていく。

そして、私の頭に様々な情報が流れてくる。

それは、この地面の情報。

「”解析完了(サーチ・エンド)”」

目を開き魔術を止める。光の線は散って消えた。

さて、次は・・・・・・

「”この領域(ルー・オー・ル・バー・ド・メ・イ・ン)を我が支配下とする”」

両手を広げ先程とは違う魔術を発動する。先程と同じ様に腕に光の線が浮き出るがここからは違う。

私の体から光の膜が現れる。その膜は次第に広がって行き、遂には道路の事件の被害にあった範囲全てを包み込んだ。

「”還(ケ・ア)れ”」

私は呟く。

すると、アスファルトの破片が宙に浮き抉れた場所へと移動していく。そして、アスファルトの抉られた部分と破片が一つになり、元の綺麗な道へと戻っていく。

「ふう、これで元通りね」

ほんの数秒で道路は事件前の状態へと戻った。

全く、こう言う仕事を私に押し付けるのは止めてくれないのかしら？

「さて、帰りますか」

現在の時刻は六時、とっとと帰って夕食を作らないとね。

「と、その前に・・・・・・」

ポケットからデバイスを取り出す。命令にあった、ジャッジメントへの注意をしとかないと。
デバイスのメモを使って文章を書いていく。
「ヨシ、送信！」
データ送信　>>　Ｎｏ００２→風紀委員管理局１７７支部
「ふう・・・・・これで、仕事は終了！さあ、帰ろう！」
私は寮へ帰るために元の道へ歩いた。

「それにしても、少し妙よね？」
寮への帰路を歩いている中、一人呟く。妙と言うのは今回の事件の事だ。事件の内容ではないく、事件を起こした男達の事が、だ。
風紀委員管理局の記録（バンク）に登録されている学園都市に存在している学生及びその能力を記憶している。うん？そんなの異常？それは自分が一番分かっている！
まあ、それは置いといてだ。
犯人の男達の事も知っていたのだが、あの炎を操る能力を使った男は発火能力者（パイロキネシスト）の低能力者（レベル１）とバンクにあった筈なのだ。
だが、今回の事件での男が使っていた時の能力のレベルは明らかに強能力者（レベル３）だった。
「おかしいのよね、私が覚え間違えた？」
デバイスを操作し、男のデータを確認する。

「・・・・・・やっぱり、間違ってないわね」

だが、データは私が記憶していた通りだった。

どういう事なの？私の知らない所で何かが動いているの？

「今の内に調べてお「不幸だーーーー！」くべき・・・・・・うん？」

後ろの方から絶叫に近い叫び声が聞こえた。

あれ～、今の声とっても聞き覚えがあるな～？

後ろを振り返ると

「う～、何で俺がこんな目に本当に不幸だ！」

地面に膝まづいている皆さんご存知のあの人（メタ発言ヤメイイイ！　Ｂｙ始まりの勇者）が居た。

「・・・・・・」

少し考えた後、

「今回はどうしたんですか、当麻さん？」

に話しかけた。

声を聞いて当麻さんは私を見る。そして・・・・・・

「セツナ様ーーーー！」

私に抱き付いてきた。え、何これ？

「どうか、どうか、私にお恵みをーーーーー!!!」

「え～と、取り敢えず落ち着いてください。当麻さん！」

私にお恵みをくださいと懇願し続ける当麻さんに、それを宥める私。

マジで何この状況？

００４：あの人に不幸！私にも不幸!?

御坂　美雪ｓｉｄｅ

「・・・・・・成程！そういう事でしたか」

「むぉ、ふぉういぐぅぉとです（そ、そういう事です）！」

「口の中のモノを飲み込んでから喋ってください！」

「むぐ！ああ、すまん！」

現在、私と当麻さんの二人は近くにあったレストランで食事をしている。私は寮で奏と食べるので食べていないが、当麻さんはこれでもかと言う位の量を食べている。

当麻さんも本来は私と同じよ様に寮で食事をする予定だったらしい。それが、何故こんな事になってしまったのか？それは私と当麻さんが会った三十分前へと遡る。

――――三十分前――――

「で？どうしたんですか？急に抱き付いたりして？」

「う！・・・・・・・あれ」

「あれ？・・・・・・・あぁ」

涙を流しながらある方向に指さす。指した方向にあるのは道沿いにある川。その中をよく見てみると川のあちこちに様々な物が浮かんでいる。

それらの名称を言うと玉ねぎ・人参・ピーマン・牛肉・もやし等々食べ物ばかりだ。

「あれらの、食べ物は当麻さんのですか？」

私が訪ねると当麻さんが頷く。どうやったら、こうなっちゃうんでしょう？

私が考えていると、顔を見て察したのか。こう言う状況に至った経緯を話してくれた。

簡単に説明すると

買い物をした

←

寮へと帰る

←

そこの階段を下っている途中に躓き、転ぶ。

←

手に持っていたレジ袋が川へボチャン　↑今ここ！

「相変わらずの不幸っぷりですね、当麻さんは」

「し、仕方が無いんですよ！」

何が？

「で、どうするんですか？また、スーパーに戻って買い物するんですか？」

「そんな余裕は無い！」

ドンと胸を張って言う当麻さん。反省しているのかしら？

”イラ”

「帰っていいですか？」

「すみませんでした!!!」

一瞬で土下座を決める当麻さん。慣れ過ぎてる、普段からしているのかしら？

「どうか、私にお恵みを頂けないでしょうか？」

「・・・・・・成程、抱き付いてきた時に言っていた言葉はそう言う意味ですか」

「はい、その通りです！」

土下座したまま答える。全く、この人は

「はぁ～」

「本当にすみません！」

更に深く頭を下げている。

「・・・・・・ファミレスで構いませんか？」

「・・・・・・え？」

「ファミレスでも構いませんかと聞いているんです！夕食を食べたいんでしょう？」

当麻さんはゆっくりと顔を上げ、私の顔を見る。

別に私は怒っていないので、表情は普通だ・・・・・・少し呆れているかもしれないけどね。

「セツナーーー!」

当麻さんは私の行為に感激し立ち上がる。が、

”ズルッ”

「あ!」

立ち上がると同時に右足が滑り私の方に突っ込んで来た。

「へ?」

そんな当麻さんの突然の行為に私は当然判断する事が出来るわけも無く。

「キャ!」

”ドサッ”

私は当麻さんに圧し倒れた。

「あ痛たた・・・・・・て!」

そして・・・・・・

「痛ってー!悪い、大丈夫かセツ・・・・・・ナ!?」

”フニョン”

ここで当麻さんのラッキースケベが発動！
私の胸を盛大に揉んでいた。

「当麻さん（黒笑）」

「は、はい！」

大きな声で返事をする当麻さん

「私は当麻さんの事を信頼しています」

「はい」

再び返事をする当麻さん。しかし、その顔は絶望に満ち溢れている。

「ですから、大抵の事は大目に見ます」

「はい」

再び返事をする当麻さん。しかし、その顔は絶望に満ち溢れている。

「ですが、すみません。一撃だけ入れさせて頂きます。」

「・・・・・・はい」

自分がこの後どうなるのかを理解し、諦めて弱く返事をする当麻さん。
そして！

「では！」

”バキッ”

「グペッ!!!」

私は当麻さんの顔面を殴った。

――――再び現在――――

・・・・・・・・とまあ、こう言う経緯で今に至るわけです。後者の話は不要だと思うかもしれないでしょうが、本当にあった事なので話しました。

「んむ、あんぐ！」

私は溜息を吐き、一口水を飲む。ちなみに当麻さんはハンバーグ・スパゲティ・ステーキの三つを食べている。と言うか食べ過ぎでしょう？

あ！もしかして？

「あの～、当麻さん」

「ん？」

「当然の事の様な事を聞いて申し訳ないんですが・・・・・・朝と昼はちゃんと食べましたか？」

「・・・・・・」

私から顔を逸らす。やっぱりか！

「食べてないんですね？」

「・・・・・・はい」

「はぁ～～～」

「すみません！」

食べるのを中断し頭を下げる。謝るんだったら、ちゃんと食べてくださいよ。

「あのですね、当麻さん！」

「はい」

「私は別に怒っているわけでは無く、心配してるんです。」

「・・・・・・」

私の言葉に表情が暗くなる。

「そんな食生活をしていると体を壊してしまいます。そんな事になったら、私も含めていろんな人が悲しむんですよ？」

「ごめん！」

この人は自分が本当に悪いと思っていると直ぐに謝る。それが分かっているのならしないで欲しいと思うのは私の我儘でしょうか？

「反省してますか？」

反省をしているのは既に分かっている事だが、念のために聞いておく。

「ああ」

真剣な表情で答える。・・・・・・ちゃんと反省している様ですね

「なら、これで許します。」

「良いのか？」

「はい！ほら、とっとと食べちゃってください！」

「あぁ・・・・・・セツナ」

「何ですか？」

「ありがとうな！」

幸せに満ちた顔でお礼を言った。

「ふふふ、どういたしまして！」

私は同じように笑って答えた。

「それじゃあ、またな！」

「はい、今度は気を付けてくださいよ？」

「分かってますって！上条さんは同じ過ちを起こしたりしませんよ？」

そうやって、自分から不幸フラグを作り上げる。本当に懲りない人ですね？

「・・・・・そうやって自分でフラグを自ら作り、その自ら作ったフラグに苦しむと当麻さんであった！しかし、そうなる事はまだ誰も知る由も無かったのでした！」

そんな当麻さんに自分の状況を分かりやすく説明してあげた。

「ちょ！何を言うんですかセツナさん！そんな事を言ってたら本当に起きちゃいそうじゃないですか？」

「それを起こそうとしているのが自分自身だと言う事を自覚してください。」

「く・・・・・・・畜生!!!」

何も言い返せなくなった当麻さんは一目散に走り出し逃げた・・・・・・・・帰りに転んだり、不良に絡まれたりしないと良いのだけど、流石に考えすぎですね？

「さて、私も帰りましょう！現在の時刻は・・・げ！」

現在の時刻は六時四十五分。夕食の時間は七時。そして、ここから寮までにかかる時間は普通は二十五分かかる。つまり、夕食に遅れる事になる。

「まずいわね」

私と奏は寮の食事では無く、私が部屋で作って食べている。私は少し遅れても問題ないのだが、問題は奏だ。

奏は一定時間以上ご飯を食べないと駄目らしく、少し前に遅れて帰るともう大変な状態になっていた。

一応、お腹が空いたら他の物を食べたら?と聞いてみたのだが

「セツナの料理じゃなきゃヤダ!!!」

と嬉しいのだが、少し困ってしまう事を言われたので可能な限り時間を守って作っている。

「はぁ〜、しょうがない、か!」

普通に帰ったら間に合わないなら普通じゃない方法を行えば良い!

「”この領域(ルール・オーバー・ドメイン)を我が支配下とする”」

魔力を使い魔術を発動する。

「”風(ウインド)よ”!」

風が私の周りに集まる。

「さて、行きますか!」

私は一歩踏み出す

”ドーン”

その一歩だけで数キロ先までの移動を可能にした。
今私が行っているのは私の魔力を空気に浸透させ操った結果だ。
一歩踏み出すと同時に纏っていた風を地面にぶつけて吹っ飛んだという事だ。
これが私だけの魔術”この領域を我が支配下とする”。自分の魔力をあらゆる物質に浸透させそれを操る魔術だ。
範囲は自分の体に触れているモノから、自分が魔力で展開した結界の範囲内に限られるがとても、便利な魔術だ。今行っている様に移動手段にもなるし戦闘にも使える。そして、少し負担は掛かるが、やろうと思えば相手の能力や魔術を操る事も可能。これが一番の利点だ！
まあ、この事についてはまたいずれ説明するとしましょうか？
そして、私は再び風を操り空中移動を行う。昼間なら注目の的だが、今は夜で結構な高さで移動しているので誰も気付かない。
「これなら、少しギリギリになるけど間に合うわね」
と、言っている間に私は寮に辿り着いた。自分の部屋の前に到着してドアを開ける。
「ただいま。奏、だいｚｙ「ぜつな～～～」・・・・・・」
すると、あら不思議？この世の終わりを体験したかの様に泣き乱れた奏が玄関に居た。
「おながずいたよ～～～!!!」
予想通りの状態だったので少し呆れてしまう。というか・・・・・・
「まだ、ご飯の時間まで十分あるんだけど？」

「それでも、お腹が減ったんだもん！それに後十分で作れるの？」
奏の言う通りだ。どんなに頑張っても十分で夕食を作るのは無理だ。だが！
「まあ、任しなさい！」
私はキッチン入る。
～～～三十分後～～～
「う～～～ん！やっぱり、セツナのご飯サイコー！」
「朝も同じ事を言って無かったかしら？」
「何度も同じことを言っちゃう位美味しいの！」
「はい、はい」
奏は私の料理を完食し、私はもうすぐ食べ終えると言うところだ。これを見ると分かると思うが、私は奏の我慢の限界を超えるのを防ぐ事に成功した。いや、本当にキレた時の奏は危険だからね！
因みに、どうやって料理を間に合わせたかと言うと、やり方は単純！
時間の短い料理から作ってそのまま出す。それだけだ。普通は全部の料理が出来てから食べるものだが、奏はそういうのは気にしないので問題なかったのだ。
「それにしても、昼と夜は恐ろしい程に食べるわね～。しかも、速いし！朝はそれほどでもないのに。」

「朝は寝ぼけてるからね～。だから、何となくそうなっちゃうんだよ～」

朝の少なさは何となくなのね。私としては週に2，3日位、昼と夜も朝の時みたいに少量の日があったらありがたいんだけど。

「それにしても、今日は大変な一日だったわね！」

「そうだね～！」

先生の暴走に銀行強盗。後、私個人だが道路の修復と当麻さんの不幸、そして奏の空腹。本当に大変でしたわ！

「明日も、こんな事が起きるのかな～？」

「いや、毎日起きたら私の身が持たないから。冗談でもそんな事を言わないで、奏」

「は～い、でもねセツナ！」

「ん？」

「こんな、大変だけど楽しい日常がずっと続いたら良いなって思うんだ」

答えた奏の顔は笑顔だった。どれだけ思っているかが分かった。

「ええ、ずっと続くわ」

そして、これからはもっと楽しい事もあるだろう。だから！

「(絶対に守る!)」

そう心の中で奏に聞こえない様に呟く私だった。

「うん?どうかしたの、セツナ?」

表情に出てたのかしら?奏に感付かれるなんて・・・・・・

「ううん、何でも無いわ!さあ、お風呂沸かしてあるから入りなさい」

これ以上悟られない様に話題を切り替える。

「うん、分かった・・・・・・・・・・あ、そうだ!セツナも一緒に入ろう!」

「ええ、じゃあ、先に行ってて私も食器を洗い終えたら行くから。」

「じゃあ、私も手伝う~」

・・・・・・・・・・え!!!奏が私にとっての衝撃的な言葉を言った!

「一体どうしたの?家事を一切しないあなたが!」

「ひ、ヒドイ!私だって偶にはするよ~?」

「じゃあ、聞くけど・・・・・・私とルームメイトになってからあなたが一度でも家事をしたことがあったかしら?」

「・・・・・・・・・・てへ!」

ご・ま・か・す・な!

「まあ、良いか?それじゃあ、奏は洗い終わった食器を拭いてもらえる?」

「!うん、分かった。まかして~」

短い会話を終え、私と奏は台所で食器を洗った。奏はずっと笑っていて、私もそれにつられて笑った。

「はい、これでおしま~い!セツナ、早くお風呂に行こ!」

「はいはい、それじゃ、行きますか!」

食器洗いを済ませた私達は仲良くお風呂に入った。その後すぐ、ベッドに入り、今日を終えた。

この当たり前の様な日常が本当に幸せに感じる。だから、もう一度心の中で誓うように呟く。

「(絶対に守る)!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・不幸だ~~~~~~!!!」

・・・・・・・・・意識が飛ぶ直前に当麻さんの叫び声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

００５：虚空爆破事件

「あの、美雪さん！」
「はい？」

学校の廊下、私は一人の女子生徒に話しかけられた。あれ？確かこの子は

「あら、木下さん。何か用かしら？」

彼女は木下楓（きのしたかえで）。私と同学年の生徒でこの前の能力検査のアドバイスをした子の一人だ。

「あ、あの。これ！」

彼女は私の前に小包みを出す。

「これ、この前のアドバイスのお礼です。どうぞ！」
「ありがとう、嬉しいわ！」

笑顔でその小包みを受け取る。中身は何なのかしら？

「今ここで開けても構わないかしら？」
「は、はい、どうぞ！」

許可をもらったのでその包みを開けて中身を見る。
中身はクッキーだ。

「わぁ～、クッキーだ！」
「頑張って作ったのですが、お嫌いでしたか？」
「いいえ、好きよ」

「そうですか、良かった～。あ、どうぞ、食べてみてください！」
「それじゃあ、頂くわね」

包みからクッキーを一枚取り出し口に入れる。
あ、美味しい！

「ど、どうですか？」
不安な表情で私に詰め寄る。あれ？私、そんなに変な顔をしてたかしら？

「ううん、美味しいわよ。料理上手なのね」
「あ、ありがとうございます。／／／」

先程の不安そうな顔から一変して笑顔になった。

「では、私はこれで失礼します／／／」

とても幸せそうに去って行った。最後は妙に笑顔だったけど、何だったのかしら？

「セツナ～は人気者だね～」

不思議そうな顔をしている私に隣に居た奏が言う。そう言えば、木下さんと話している時はほとんど黙っていたわね。

「私が人気者？そんな筈ないでしょ？」
「謙遜しなくても良いのに～！」

ニヤニヤしている奏・・・・・はぁ～、忘れているのかしら？

「私は超電磁砲の劣化品よ？人気なわけ無いでしょ？」

「「違う（よ）（います）!!」」
「へ？」

廊下に居る複数の生徒達と奏が否定の声を上げた。え？奏はともかく、何で周りの人達も？

「セツナはあいつの劣化品なんかじゃないよ！」
「そうですよ！」
「え、え、え？」

次に、皆が私を囲んで詰め寄ってくる。え？

「確かに、美雪さんは能力ではお姉さんに劣っているかもしれません！けど、美雪さんには他の人の能力を鍛えると言う、お姉さんには無い才能があります。それでどれだけの人が救われているか分かっていますか？」
「そうだ！俺だって能力のレベルに伸び悩んでいる時、美雪さんのおかげでレベルを上げる事が出来たんだ。」
「私だって！」
「俺だって！」
「・・・・・・」

あら～？私、地雷踏んじゃった？

「セツナ～（黒笑）」

あ、あれ？奏が黒奏になってる！どうして？

「これでも、セツナは皆に人気が無いって言える？」

私は周りの皆を見る。皆、真剣な表情をしていた。さっき言ってい

た言葉が嘘ではない事ぐらい分かる。

「ごめんなさい。さっきの言葉は訂正するわ。私は皆に親しまれてるのね、ありがとう、皆！」

私は笑う。最高の笑顔で！

「「親しんでいるなんてレベルじゃない（です）！」」

「・・・・・・・え？」

「私は美雪さんの事を心の底から愛しています！」

「私もです！」

「私も！」

「俺もだ！」

「美雪さん！俺と付き合ってください！」

あ、あれ？先程の感動のシーンは何処に行ったのかしら？

”ゾッ”

「「「っ!!!!」」」

殺気が私達に降り注ぐ。一体誰が？

「おかしいな～？今、可笑しな言葉が聞こえたな～？」

殺気の元は奏からだった。何で？

「ねえ～君達～今、セツナに何て言ったのか教えてくれない～？」

「「す」」

「す？」

「「すみませんでした!!!」」

私達の周りに居た生徒達は一目散に去って行った。まあ、あんな奏を見たらそうなるわよね？さて・・・・・・

「奏、急にどうしたの？あなたがあんなに怒るなんてあの二人を除いたら珍しいじゃない？」

奏はいつも美琴さんとツインテールを見たらすぐに暴走する。それは、もう慣れた事だが今回は登校の生徒だ。どうして？

「別に～～～」

ジト目で私を睨んでいる。うん。これは私にも怒ってるわね

「何？私、奏に何かしたかしら？」

「セツナは何も悪い事してない」

「ならどうして？」

「だって、皆がセツナに好きだって告白したから」

先程と弱く小さな声で答えている。

「もしかして、あれが本気だと勘違いしてるの？安心しなさい、あんなの冗談に決まってるじゃない」

「・・・・・・だから、不安なんだよ」

益々声が小さくなってしまい、私にも聞こえなくなってしまった。

「え？ごめんなさい。何て言ったの？」

「とにかく、またあんな風に告白されても絶対に断って！分かった？」

目の前まで迫って言ってくる奏。な、何？急に迫られたから驚く。

それにしても、やはり奏の様子がおかしい・・・・・・・あ！

「ねえ、奏。もしかしてあなた・・・・・・・・・嫉妬してる？」

「・・・・・・・・・／／／」

奏は私の方を向かない。だが、耳が真っ赤になっているのが見えるので顔が真っ赤だと分かる。

「そう。そういう事ね」

「う／／／」

顔が更に真っ赤になった。あら、カワイイ！

「あらあら、図星みたいね？」

「うぅぅ／／／」

どんどん赤くなり可愛くなる奏。そして、俯いた。

もうそろそろ限界かしら？

「奏」

「何・・・・・・・て、キャ!?」

奏に抱き付く私、それに驚く奏。

「ありがとうね、奏。私の事を心配してくれて！でも、大丈夫だから、私は

ちゃんと奏の傍にいるから。ね！」

「・・・・・・・うん、ありがとうセツナ／／／」

ふう、やっと落ち着いたようね。

「さあ、もうすぐ授業も始まるし、教室に帰りましょう」
「うん!」

＊＊＊

「幻想御手(レベルアッパー)?」
「そう!最近、色んな所で噂になってるよ〜」

学校の帰り道、私と奏は最近噂になっている事を話していた。

「その内容はね〜、なんと!」
「使用した能力者のレベルを上げてくれる、かしら?」
「え!知ってたの?」
「名前からでもそう判断できるでしょう?」

まあ、奏の言う通り知っていたんだけどね。

「それもそうだね〜。けど、本当なのかな〜?」
「正直信じたくないけれど・・・・・・本当でしょうね」

実際にそれに近いケースを見たのだから確率は高いだろう。
いや、色んな情報サイトで幻想御子の使用した感想・購入の手続き等のコメントも多く見られた。まず間違いないだろう。

「出来る限り早く処分しないとマズいわね?」

思わず溜め息を吐いてしまう。

「せ、セツナ〜!溜息を吐いて疲れてる感じで恐ろしい事を言わないでよ〜!」

「え、そうかしら？」
「当たり前みたいな感じで言うセツナは本当にスゴイよ」
あれ？奏少し引いてる。
「ま、まあ、とっとと終わらせる！それだけよ！」
無理やり締める。だって、これ以上続けたら益々引かれそうだもん。奏には嫌われたくないし！
「まあ・・・・・・そんなセツナも大好きだけど！」
「・・・・・ありがとう／／／」
「あ！真っ赤になった～／／／」
「そう言う奏も赤いわよ？」
「私は良いの～～～！」
抱き付いてくる奏。私はこの笑顔に救われてきたか・・・・・・本当にありがとうね。
”ビィン”
「!!!」
「？・・・どうしたの、セツナ？」
自分が常に展開している察知であるモノに気づき、振り向く。これって!?
奏が私の様子に気にしているが、それ所ではない！
「奏、手伝って！」

「え？急にどうしたの？」

「あのデパートに爆弾があるみたい」

「え、えぇ!!!」

「静かに」

　驚きの声を上げる奏に自分の口に人差し指を立てる。
　この事が周りに知れたら、デパートから少し離れたこの場所もパニック状態になってしまう。

「取り敢えず、説明するわよ。今、私が展開している空間が能力を察知したわ。種類は重力子（グラビトン）。それをあのデパートで多数感じられたわ。」

「そんな、じゃあ」

「ええ、このままじゃデパートは完全に崩壊。そして、建物内の人達にヒドイ被害に及ぶわ」

　顔を青ざめている。まあ、そうなっちゃうわよね？

「強制はしない。でも、手伝ってくれた方が助かるわ。」

　戸惑っている。だけど・・・・・・

「ごめんね、奏。時間が無いから、五秒で決めて！」

「え!?」

「五・・・四」

「行く！」

　奏は決断してくれた。
「ヨシ、それじゃぁ行くわよ！」
「うん！」

　さて、それじゃぁ始めますか！
　絶対に誰も気づ付けさせない!!!

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
　ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美琴ｓｉｄｅ

「ここでグラビトンが！」
「はい、そうなんです。だから、御坂さんと佐天さんは早く非難してください！」

　私と初春さんと佐天さんの三人はデパートに買い物をしていた。途中であのバカに会ってイライラしたりしたが楽しく過ごしていた。
　だけどそれも束の間、突然初春さんの携帯にここで重力子の変化がここで察知されたと連絡が入ったのだ。
「いえ、初春さん。私達も手伝うわ」
「・・・・・・分かりました。それじゃあ、デパート内の皆さんの避難誘導を手伝ってください」
　少し悩んでいたが納得してくれた様だ。
「分かった。佐天さん行きましょう！」

「はい」

私達は避難誘導を始めた。

～～～１０分後～～～

「これで、全員ですね」

「ええ、これで一先ず被害は最小限に出来る筈」

少し時間が掛かってしまったが、何とかデパート内の客の避難を終えた。

しかし、何故犯人はここを狙ったのだろうか？

過去の事件の被害を見るに上位能力者の筈だ。そんな人物がこんな事を行うのだろうか？

「おい、ビリビリ！」

「あん？て、あんたか？」

考えていると途中で声を掛けられて中断する。声の主はあのバカだった。

「俺と一緒に居たあの女の子見なかったか？」

「はあ！あんたずっと一緒に居たんじゃなかったの？」

「避難している時にはぐれちまったんだ」

何やってんのよ。このバカは！

任されたからにはちゃんと一緒に居なさいよ!!!

私は周りを見渡すが、あの子は見つからない。

「避難させた人達の中には見つからない。と言う事はあの子はまだ、

デパート内に？」
「な！クソッ！」
私の言葉を聞いた途端にあのバカは走り出した。
ちょ、何やってんの。あのバカ！

「待ちなさいよ」

そんなのを放っておけるはずも無く私もあいつの後を追うように走って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
初春　飾ｓｉｄｅ
「ここで最後、避難出来ていない人は・・・・・・居ないですね」
私は「ふう」と息を付く。突然白井さんから重力子（グラビトン）の事を聞かされた時には驚いたがこうして民間人の避難を完了出来た。これで、被害者は出ない。後は・・・

「その爆弾だけど・・・・・・一体何処に？」
「ジャッジメントのお姉ちゃーん！」

声のする方に向くと女の子がカエルの人形を抱えて走ってきていた。
まだ、避難出来ていない子が？

「どうしたの？ここは危険だから早く非難しないと！」
「うん！でもね、メガネのお兄ちゃんがこれをジャッジメントのお姉

ちゃんに渡してくれって。」

「え？」

女の子の言葉に私はその人形を受け取る。一体何故私にこれを？

「初春さん逃げて！それが爆弾なの!!」

「え？」

突然の御坂さん声に驚きながらも再び人形を見る。

すると、その人形はどんどん凝縮していく。

「!!」

直ぐに放り投げ、女の子を守るために抱きしめた。こんなんじゃ、この子を守れない事は分かっている。それでも！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

side change

御坂 美琴side

「この！」

私は初春さん達の前に立ちポケットからゲームセンターのコインを取り出す。

レールガンを使ってあの人形を吹き飛ばせばこの状況をどうにか出来る。が、

「！ マズ」

焦りのせいか、持っていたコインを滑らせて落としてしまった。マズイ、これじゃあ間に合わない！
次の瞬間、グラビトンの爆発が起きた。その爆発は私達にも被害を与える・・・・・・・・・筈だった。

「な！」

私の前に立っているこいつのおかげで私達に爆発の被害は防がれた。

「ふぅ～、どうにかなったな！」
「あ、あんた何したのよ？」
「え？何ってこの右手であの爆弾を打ち消しただけだよ。いや～、本当に良かった。ちゃんと消せて」

当たり前に言う言葉に驚く。確かに私の電撃をいつも消していたけど、こいつは何でも消せるっていうの？

「ちょっと、あんた・・・」

真実を知るために声を掛けようとしたが

「どうやら、当麻さんのおかげで無事に済んだようですね？」

この場に居ない筈の人物の声で遮られてしまう。
いや、この声は！
皆がその声の主の方に振り向く。そこには私が知る人物が居た。

「あんたは！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美雪ｓｉｄｅ

私は今、セブンミストから少し離れた路地裏に居る。何故か？

それは・・・・・・

「僕のこの能力を使って今までバカにして来やがったクソ共や無能のジャッジメントに目にモノを「それは不可能ですよ?・」な！」

これまでのグラビトン事件を起こした犯人を捕まえるためだ。
やはり、事件の狙いはジャッジメントでしたか。毎回被害者の中にジャッジメントが居たので、これは直ぐに分かった事だ。
しかし、腑に落ちない事が一つある。この男が先程言った事だとこの男は周りの人に暴行をされていたのだろう?・だが、この男の能力のレベルはさっきの爆発でも確認したが強能力者位のモノだった。
それ程の実力があったら、まずそいつらの撃退等簡単な筈。だが、それをしなかった。いや、出来なかった。だとすると、この男が今のレベルに至ったのは最近と言う事になる。
この時期に急激なレベルアップ・・・・・・となるとあれしかないわね。

「まあ、取り敢えず・・・・・ジャッジメントです！・貴方をグラビトン事件の犯人として逮捕します。」
「な、何を証拠に「先程貴方が言っていた事は貴方が言っていた事は録音しています」ぐっ！・」
言い逃れしようとする男に決定的な証拠を見せ付けてトドメを指す。

「さて一つ聞きたい事があるのですが・・・・・・・・・貴方はレベルアッパーを何処で入手しましたか？」
「ッ!!!」

一つの質問に男の表情は驚きへと変わる。当たりですね。

「な、何のことだ？」
「誤魔化さないでください！」

別にこいつから情報を入手しないと困るわけでは無いが、手に入るのならばそうしておきたい。

私は男の様子を観察していて気づく。ポケットを気を配り守ろうとしている事に

「失礼します。」

気づいてからの私の行動はほんの一瞬だった。男に更に近づいて気にしている方のポケットの中のモノを奪う。
それは音楽プレイヤーだった。

「な！か、返せ!!」

奪われた事に気付いた男は私に襲い掛かるが私は腕を掴んで捻って捕らえる。

「グゥ～！」

痛みに耐えている声が響き渡る。が、私はそんなのを気にしない。
男の反応を見るにこれがレベルアッパーである事は間違いない。

音楽プレイヤー・・・音楽?・・・・聴覚?・・・・・・・・・!!!

「成程ね!そう言うこ「そこまでですの!」と・・・ん?」

突然私達の声が路地裏に響き渡る。周りを確認すると入り口の所にあのツインテールが居た。

「はあ~、これで私の役目も終わりね?」

ツインテールがこちらの方に歩いてくる。

腕を離して男を開放し、少し離れる。男は逃げられない事が分かっているのか、その場を動かない。

そいて・・・・・・

”ガチャン”

私の両手に手錠を嵌めた。

「・・・・・・は?」

余りにも意味が分からなかったので変な声を出してしまう。

「何を驚いていますの?貴方のした事を考えたら当然の処置でしょうに。分かっていたからそこの人を開放したのでしょう?」

ああ、成程。全て理解した。今の私はとても呆れた表情をしているだろう。

つまりこういう事だ。彼女はグラビトン事件の犯人を捕まえに向かっている途中に、私が男に暴行をしているのを発見し、逮捕。

実に下らない。因みに、私は一応ジャッジメントの腕章を付けてい

る。だから、一応聞いてみた。

「あの～、一応確認したいんですけど。これ見て何か思う事はありますか？」

自分の服の袖に付けている腕章を指さす。ツインテールもそれを見るが、「はん」とバカにした様な声を出し

「どう見たって偽物ではありませんの？それにしても、貴方もバカですはね。何ですの？わざわざ色を変えて黒色にするなんて貴方の趣味ですの？」

「バカは貴方です。」と心の中で呟く。

「さて・・・・・・て、あら？あの男は何処に行きましたの？」

「とっくに逃げましたよ」

ツインテールが周りを見渡していたので男を探している事が分かったので教えた。

「な！何故、言わなかったんですの？」

「聞かれませんでしたから？」

私の言葉にイライラしているツインテール。そんな理不尽な苛立ちをされても困るのですが？

「まあ、良いでしょう！とにかく、貴方を支部まで連行させていただきますの！」

「はいはい」

やれやれ！

取り敢えずは・・・・・・

胸ポケットに触れる。

『奏、聞こえる？』

『うん？何～、セツナ～？』

『ちょっと、用事が出来たから先に帰っといて。』

『うん～、分かった～！』

『それじゃあ、ヨロシク』

会話を終える。

今どうやって奏と会話したのか？

それは私が作った魔術を施した札のおかげ。これは念話の札で、これを持っている二人はどんなに離れていても頭で会話できると言うモノ。

これを私はいつも胸ポケットに入れていたのだ。

「ふう」と一息する。

「どうかしましたの？」

その動作が不思議だったのか私に話しかけてくる。

「いえ、別に何も？」

何でもないと答える。

ツインテールは納得していない様だったが諦めて連行を続ける。

この後、どうなるかも知らずに。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「このおバカ！」

〝ゴツン〟

「あ痛っ!!!」

今の現状を説明しよう。私は現在ジャッジメント１７７支部に居る。ツインテールに連れて来られたのだ。

だが、そのツインテールは私を逮捕した告げた瞬間、ジャッジメントの先輩に拳骨を喰らっていた。

「き、急に何をするんですの？固法先輩！」

涙ながら睨み返すツインテール。どうやら、彼女は固法と言うらしい。

「貴方ねぇ！じゃあ、聞くけど彼女が付けている腕章の意味は？」
「意味はって？あんなのただの偽物でしょうに？」
「本当に知らなかったんですね。ツインテールさん？」
「誰がツインテールですの!?」

当たり前の様に言っているツインテールに呆れて文句を言うが、私の名称に文句を言ってくる。あら、だって

「ツインテールじゃないですか？その髪」

そう言い、彼女の髪に触れる。

「勝手に触らないでくださいですの！」

私の手を弾く。

「え～と、取り敢えず固法さん。説明をお願いします！」

面倒だったので固法先輩に説明を押し付けた。

「貴方も貴方ですよ「敬語の必要はありません」・・・分かったわ」

敬語で答えているの止める様に言う。

多少嫌そうな顔をしたが、納得をしてくれた様だ。

「あのね、白井さん。彼女はね・・・・・・監視者（アンサー）なのよ」

「・・・アンサー？何ですの、それは？」

固法さんの言葉に疑問を持つツインテール。

「「はぁ～～～」」

私と固法さんは溜息を吐いた。あら、この人とは少し気が合いそうですね。

「な、何で二人してそんな大きな溜息を吐きますの!?」

私達の行動に驚いている。いや、こちらの方が驚きですよ？

「アンサーと言うのはね、私達ジャッジメントの上の位で学園都市上層部の情報伝達者の事よ。」

「な！」

驚いた顔で私を見る。

「本当に知らなかったんですんね？一応、ジャッジメントになった時の指導で教えられた筈なのですけど？」

私の言葉を聞いて”はっ”とし目を逸らす。やっと、思い出したのですか？

「で？貴方は何故白井さんに捕まったんですか？」

「あ、はい。先程の話のグラビトン事件の犯人を捕らえていたんですが・・・・・・」

クルリとツインテールの方に体を回し、

「そこのツインテールさんに邪魔されて逃がした挙句、この状況です」

「はあ～」と言い終えた後に私は溜息を吐いた。まあそりゃ、吐きたくもなりますよね？

「白井さん？」

「・・・はいですの」

「何か弁解はあるかしら？」

「無いですの」

「「はあ～～～」」

再び溜息を吐いた。あら？また重なった。

「すみませんですの」

頭を下げた。この子、結構プライドが高いと思ってたんだけど？

「この子も反省している見たいなのでどうか、許していただけないでしょうか？」

固法さんまで頭を下げてるし

「あの～、誤解している様なので言っておきますが・・・・・別に私は怒っていませんよ？」

「「え!?」」

二人は声を出し顔を上げる。その顔は驚いた表情。

何をそんなに驚いているのかしら？

「私はただ、そこのツインテールに捕まって此処に連れて来られた。それだけでしょう？」

「し、しかし、私は勘違いで「しつこい！」うっ」

いい加減にしてくれないかしら？もう用は済んだでしょう？

「私がもう良いと言ってるんです。それで良いじゃないですか！」

「確かにそうですが・・・・・・・」

何納得出来ない様な顔してるんですか？本当にムカつく！

「では、私はこれで！失礼します」

「あ、ちょ！」

二人が何か言おうとするがそれは無視！私は早くこの場から去りたいんだ!!!

”ガチャ”

「ただいま帰りました。あれ？お客さんですか？」

・・・・・・遅かった！お花畑が帰ってきてしまった!!!

と言うか、どれだけタイミングが悪いんだ。偶然にもほどがるでしょう！私は当麻さんの様な不幸体質は持って居ない筈よ？

そして、私の不幸はまだまだ続き・・・・・・

「あー、美雪！何であんたが此処に居るのよ？」

こいつまで来た。何なの？私が何をしたと言うの？

「別に・・・・・・では、失礼します。」

私は無視してこの場を去ろうとするが腕を掴まれて止められてしまう。

「何ですか？」

「何ですか？じゃないわよ！良いから、私の質問に答えなさい。美雪！」

ああ、ダメだ。本当にイライラする。あんたが私の事をその名前で呼ぶな！

「あ、あの！」

「何（何ですか）？」

私達に話しかけるお花畑。私達の雰囲気をどうにかしようと考えて行動したのかもしれないが余計なお世話だ。

お花畑を睨みつけると”ビクッ”と体を震わせた。
しかし、彼女は怯えながらも言葉を続ける。

「お二人は知り合い何ですか?お互いの名前も知っている様ですし・・・・・・少し仲は悪そうですけど何処か親しげな雰囲気も」

「いいえ、違います”バシン”っっ」

否定をしようとしたら、突然の頭への衝撃に中断されてしまう。
また、あんたか!!!

「あんたは何否定してんのよ!全く・・・・・・この際だから、皆に紹介するわ」

何を勝手に!て、ちょ!
私は無理やり三人の前に立たされた。

「この娘は御坂　美雪。私の妹よ」

・・・・・・・・姉の言葉を聞いたジャッジメントの三人は”ポカン”と固まり、”はっ”と意識が戻ると

「「「えええええええええ!」」」

驚きの声を上げたのだった。

００６：え？誰の妹ですか？・・・・・・・美琴の妹です。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美雪ｓｉｄｅ

「御坂さんの妹（お姉さまの妹）!!」

「はぁ～～～」

溜息を漏らす。本当に面倒くさい。どうしよう？・・・・・・・とっとと帰えろう

そうやって、さりげなく去ろうとする。

「ちょっと美雪！何逃げようとしてんのよ？」

だが残念ながら姉に捕まった。はぁ～、最悪！諦めて立ち止まる。

他の人達もギャーギャー騒いでいる。お～い！私はのけ者ですか？

ん？ツインテールがこっちに歩いてきた。何の様かしら？

「あ、あの！先程は本当に申し訳ありませんでしたの」

「あの・・・・・貴方、先程も謝ったじゃないですか？する必要はこれ以上する必要は無いでしょう？」

と言うかしつこい。いいからもう帰らせてください。

「いいえ。改めて謝罪させていただきますわ！そして・・・・・・」

”すう”と息を吸って

「これからは私の事は黒子と呼んでくださいな！私はこれから貴方様

の事を妹様と呼ばせて「呼ぶな!そして呼ばせるな!」”バシン”あ痛っ!」

おお!美琴さんがツインテールをしばいた。今回はナイスです!

まあ、取り敢えずは姉を美琴さん、ツインテールを黒子さん、お花畑を飾さん、佐天涙子を涙子さん、固法先輩はそのまま。と言う感じで呼ぶようにしよう。

「え~と、取り敢えず美琴さんに黒子さん。落ち着いてください。」

驚いた表情でで私を見る美琴さん。何、私変な事言った?

「あんた・・・・・・家族以外と会話出来たのね?」

「・・・・・・」

何言ってるんでしょうかこの人は?

「え!美雪さんは人と話すのが苦手なんですか?」

ちょっとまちなさい。私はコミュニケーション障害じゃないです。そして、何故もう名前で呼んでるのかしら?

「そうなのよ。こいつったら家に住んでいた頃は本当に誰とも話さなくてね。私達家族とも滅多に喋らないし。」

それは貴方達と喋りたくなかっただけです!と叫びたいが言ってしまったら美琴さんは怒るに決まっている。だから、心の中で叫ぶだけで抑える。

「へぇ~、御坂さんの妹なのに意外ですね?」

「本当にビックリですわ」

おい、そこの二人！何を勘違いしてるんですか？
もう嫌だ。帰りたい！
「もう帰って良「さて美雪。そろそろ説明してもらうわよ？」」・・・・・
これで何度目だろうか？帰るのを妨げられるのは。もうキレて良いかしら？
「説明って何の説明ですか？」
分かっているが取り敢えず聞いてみる。
「さっきあったグラビトン事件に決まっているでしょう！」
どうやら私の態度が気に食わなかったらしい。相当ご立腹だ。
「わ、私もです。詳しく教えてください。」
飾さんまで・・・・・・まあ、その場に居たのだから当然か。
黒子さんと固法先輩も同じ感じだ。
しょうがない。説明しますか。
「分かりました。それでは・・・・・・・・」
＊＊＊
～～～一時間前～～～
場所はセブンスミストの爆発が起きた場所。
「何で此処に居んのよ。美雪！」
「それは私のセリフですよ。」

何で美琴さんが居るんですか？
当麻さんが居る事は分かっていましたが・・・・・・まあ、いいでしょう。

「え！せ、セツナ！お前、ビリビリと知り合いなのか？」

当の当麻さん本人は何やら私と美琴さんが知り合いだと言う事に驚いている様ですが・・・ああ、そう言えば言ってなかったですね？

「私と美琴さんは姉妹なんですよ。当麻さん」
「は、はぁーーーーー！」
「ちょ！何でそんなに驚くのよ？」

私の言葉に驚きの声を上げる当麻さん。当麻さんの反応に突っ込む美琴さん。
いや、美琴さん。当然の反応だと思いますよ？

「いや、だってさ～。ビリビリ見たいな暴力女の妹がお淑やかで優しいセツナだぞ。信じられねえよ！」

・・・・・当麻さん。思っているからと言って良い事と悪い事がありますよ？

「誰が・・・」

あ、美琴さんが怒ってしまいましたね。
プルプル震えて頭から静電気がパチパチ出ています。
そして、ガタガタ震えている当麻さん。
彼には幻想殺しがあるから問題ないでしょうが・・・・・・助けるには越したことがないですしね。

「暴力女だコラーーーーー!」

私は怒声と同時に放たれた電撃を

「”我が支配する(ルール・オブ・ドミネート)”　”消え(ミスト)ろ”」

自身の魔術を発動し打ち消した。

「なっ!」

「美琴さん。当麻さんに電撃を撃たないでください」

本当にこの人はいい加減にしてくれないかしら?防ぐこちらの身にもなって欲しいですよ。

「せ、セツナ。サンキュウ」

「いえいえ、気にしないでください」

「美雪!あんたどうやったのよ!?」

は~、美琴さんはまだ騒でるし、本当にうるさい。

「別にあなたに言う必要はありません」

「あんたね~」

再び頭から電撃を”パチパチ”と出している。さっきのを見て無駄だと分からないんでしょうか?

「お、おい。落ち着けってビリビリ。」

「あんたは黙ってて!」

ああ、これは時間が掛かりそうだな・・・・・・仕方が無い。

「”風(ウィンド)よ”」

「「!!!」」

二人が驚き、動きを止める。

「え、どうして・・・・・・・」

「か、体が・・・・・・・」

「「動かない!」」

「取り敢えず、用件だけ言わせて頂きます。」

二人が顔だけを動かしてこちらを見る。当麻さんは動揺、美琴さんは怒りの表情が見える。

すいませんね。

「二人共御存知かと思いますが、今回の事件は最近続いているグラビトン事件のモノです。普通はジャッジメントのメンバーだけで解決する筈でしたが・・・・・・」

言葉を一度切り

「今回はいつもと違い複数のグラビトンを検知しました。」

「「な!」」

二人は驚いている。まあ、当然ですよね。

「ちょっと、待ちなさいよ!それじゃあ、その残りの爆弾はどうなったのよ?」

「それが私が此処に居る理由です。」

「はあ?どう意味よ?」

「私が此処にあった以外のグラビトンの爆弾を処分しました。」

「・・・・・・は?」

さっきから驚き過ぎでしょう?反応が大袈裟ですよ。

「とにかく今回の事件はこれで解決し、説明も終えました。私はこれで失礼します。」

私は二人の拘束を解き、自分の周りに風を纏い

「あ!後ろの気絶しているジャッジメントの子と女の子の保護も忘れないでくださいね。」

その場から移動して去る。

「え!ちょ、セツナ!」

「待ちなさい。美雪!」

二人が何か言っているが無視です。

〜〜〜そして現在〜〜〜

「と言う感じで貴方達を置いて行った後に犯人を捕まえようとしたのですが・・・」

一度言葉を飲み、黒子さんの方を見ながら

「そこの黒子さんに勘違いで逮捕されてしまって逃してしまったわけです。」

「う!その事については本当に申し訳ありませんでしたの」

「一応美琴さんに説明しただけなので責めているわけでは無いので気にしないでください。もう気にしていないので」

訂正をしたが未だに申し訳ない顔をしている。やっぱり不安なのですね。

「でもやっぱり例のグラビトンの犯人を逃したのは問題ね。」

あ！言ってはいけない事を！

〝ズーン〟

「し、白井さん！大丈夫ですか？」

固法先輩が言った言葉に落ち込む黒子さん。ああ、やっぱりそうなるわよね。

先程から私も分かってて言っていなかったのに・・・・・・・

「え！ちょ、何！どうしたの？」

物凄く戸惑っている。分かってないんですね？この人・・・・・・・超鈍感だ。

「固法先輩。少し空気を読みましょうね」

「えぇ！」

今度は固法先輩がショックを受けて落ち込みだした。もうめんどくさい。

「え～と、取り敢えず「犯人についての心配は不要です」・・・え？」

全員の視線が私に集まる。

「犯人の情報はもう既に掴んでいます。なのでいつでも捕まえる事が

可能です。」
「「「はぁ！」」」
驚きすぎです。もう慣れて、むしろ鬱陶しくなってきました。
「はい、これがデータです。」
私はポケットに入れていたメモ用紙を固法先輩に渡す。
「な、何で分かるのよ。美雪」
「何でって、ただ学園都市に在学している全校生徒の情報を記憶しているからですけど「「「はぁっ!!!」」」!!!」
ちょ！人が喋っている時に大きな声を出さないでよ。さすがに驚きますよ！
そう考えていると固法先輩が手を上げて
「え、え～と、美雪さん？確認なのだけど学園都市の全校生徒って事は要するに約二百三十万人の生徒の事を記憶していると言う事かしら？」
と、確認を取ってくる。あれ？ちゃんと説明したよね？
「そうですけど・・・・・・何か理解できない事を言いましたか？」
「あ、アンタね～～～」
「へ？」
「何当たり前見たいな感じで言ってんのよ！」
言葉と同時に私をしばこうと出した手を掴む。
「美琴さん・・・・・・あなたは短気な所と暴力的な所を直した方が良いですよ？」

「う、五月蠅いわね。アンタに言われる筋合いは無いわよ!」
「いや、妹の私だからこそ言わせてもらっているのですが・・・・・」

まあ、この人に何を言っても無駄なのは昔から分かっているけど。

「御坂さん。美雪さん!」
「お、お姉さま。妹様。落ち着いてくださいな」
「二人共落ち着きなさい。」

美琴さんは私の手を振り解こうと、私はその手離さない様に抑えて暴れているのを見て固法先輩が私達を離し、黒子さんが美琴さんを飾さんが私を抑えた。
ふう~。この人の相手は本当に疲れるわ。
直ぐに私は飾さんの抑えを振り解く。

「犯人の捕獲は貴方達にお任せします。ですが、美琴さんは手を出さない様にしてください。」
「な、何でよ?」

いや、それは貴方自身が分かっている事でしょう?

「だって、貴方が関わると絶対に犯人に被害が及ぶじゃないですか?」

ジャッジメントの三人は犯人を無傷で抑える技術を持っている。だが、彼女はジャッジメントではない。
それに先程の行動を見ても分かる通り犯人が抵抗した場合、絶対に実力行使に出るだろう。

「あ、アンタね~~~」

再び怒りだし電撃を散らし始める美琴さん。あ~も~本当

に・・・・・・・・・・いい加減にしろよ？

「黙れよ」

「「「「!!!!」」」」

四人は驚き固まった。今回は魔術を使って体を止めたからではない。ただ自分の出せる限りの殺気を放っているだけだ。

私が反抗しないからと言って調子に乗るなよ？

「此処での私の用件は終わりました。ですので私はこれで失礼します。」

私はそのまま支部を去った。それを止める人は誰も居なかった。

 ****

『セツナ!』

支部を出て数分後通信の札による念話が届いた。

相手は勿論、奏。

『奏。どうしたの？』

『うん。私と別れてから結構な時間が経ってるから大丈夫かな～って？』

うわ～、本当だ。もうあれから一時間半も経ってるよ。

『ごめんね。でも、私の心配は無用よ。』

『分かってるよ～。それでも心配なの～。』

本当に奏には敵わないわね。彼女のお蔭で私がどれだけ救われている事か。

『ええ。本当にありがとう。』

『・・・・・・・セツナ。何かあった？』

・・・・・・何で分かったのかしら？まあ、取り敢えず誤魔化しましょう。

『いいえ、何でもないわ『は～い、嘘ついた～～～』・・・・・・・・・』

即答！と言うか、何で？

『私が一番長くセツナと一緒に居るんだよ。他の人が分からなくても私は分かるよ。ほんの少しの会話でも。ね？』

・・・・・・・・本当に敵わないわね。奏には。いつか私が下に敷かれるんじゃないかしら？

『ありがとうね。奏。何があったかについては寮に着いたら話すわ。奏も寮に居るんでしょう？』

『うん、居るよ。待ってるね！』

『それじゃあ、また後で。』

私と奏の念話を終える。さ～て帰りますか。

別に魔術で移動しても良いのですが・・・・・・まあ、偶には歩いて帰ろうかな？

どうせ、歩いてでもほんの十数分で辿り着くしね。

それにしても、今回の事件の解決に奏が協力してくれて本当に助

かった。
複数のグラビトンの処分は私だけでやったらギリギリとなり危なかっただろう。
私と奏が行った事は単純だ。
〜〜〜実行時〜〜〜
「じゃあ、行くよ！・セツナ！」
私は奏にしっかりと捕まり
「ええ、お願い！」
「ヨシ！・じゃあゴー！」
「”この領域（ルー・オー・バー・ド・メ・イ・ン）を我が支配下とする”」
奏は能力を使って走り出した。
私達の視界が変わる。
「あったよ。奏！」
そして、ほんの数秒でグラビトン爆弾の元に辿り着く。
そこには変な姿をしたぬいぐるみが床に置かれている。しかし、その中には爆弾が入っている。しかも、傍には柱があり爆発が起これば建物が壊れてしまう。
「ええ。　　”重力（グラビティ）よ”」
重力を操り圧縮しそのぬいぐるみを潰す。
「奏。次の場所にお願い！」

「りょうか～い」

そして次の場所に移動し、その場所のぬいぐるみを潰して行く。
本来、この動いている速度だと私達の体は耐えられない。何しろ今は奏の能力の全力で移動していて速度は音速だ。
だが、それは私の魔術で身体にかかる負荷を操作して最低限に抑えている。私と奏だから出来る事だ。

「これで大体片付いたわね。残りは・・・・・・・」

建物全体を再び索敵して残りの爆弾探す・・・・・・・一階なし。二階なし。三階・・・・・・あった！けど、周りに人が居る？

「見つけたわ。三階に一つこれで最後。ただし、周りに人が四人居る。」

急がないとその人達が危険だってあれ？
四人の内一人に違和感が・・・・・・これは！

「・・・・・・ごめん奏、これで終わりよ。お疲れ様。」
「え！でもセツナ。まだ一つ残ってるんじゃないの？それに近くに人も居るんでしょ。急がないと！」
「ええ、普通は助けに行くんだけどね。その一人が当麻さんなのよ。」
「・・・あぁ～～～成程～！」

その言葉に凄く納得する奏。まあ、そうなるわよね？

「とにかく奏はこの場から離れていて。私はその爆弾の所に向かうから。」
「分かった～。でも、大丈夫？他にも人が居るんでしょう？」

奏の言う事も最もだ。当麻さんが居るんだ。恐らく美琴さんも居るだろう。でも・・・

「問題ないわ。後は私に任せていなさい」

「うん。でも無理はしないでね？」

「ええ！」

笑顔で答える。大丈夫。私は大丈夫だから。

「じゃあ、行ってくるわ」

そして、私はあの四人が居る場に向かった。

～～～そして現在～～～

「・・・・・・」

世の中、上手くいかないものね。

私もあの人を憎むべきでは無い事は分かっている。でも・・・私は彼女の事を許すことが出来るのだろうか？

私がこうなってしまったのは彼女いや彼女達”御坂”が原因だ。だが、それを行ったのは彼女達ではない。

でも、だけど、それでも！

「セツナ～～～！」

「!!!」

考えの渦の中に居る中、聞こえた声で我に返る。声の主は奏だ。

周りを見ると、もう既に寮の側まで来ていた様だ。寮の私達の部屋のドアの前で手を大きく振っていた。

「・・・・・・奏」

いつもの私なら笑って手を振り返すだろう。だけど、今の私はそれをするきにはなれなかった。だけど・・・

「お腹空いた～～～」

「・・・・・・・・・」

頭が真っ白になった。自分の悩んでいた事がバカらしくなる程に。改めて思えば、もうそろそろ奏のお腹を空かせる時間だ。

「ええ、わかったわ。出来る限り早くね！」

そして、私は笑い返して答えた。

「わ～い！」

そして、奏はあり得ない行動に出る。

「へ？」

私達の部屋は寮の四階。奏は勿論そこに居た。が、

「えええええええ!!!」

奏はそこから私の所へと飛び出した・・・・・柵を飛び越えて。奏の能力では宙を浮かぶ事は出来ない。だから、このままではケガを負ってしまう。

なのに、奏はそのまま何の抵抗も無く落下して行く。

「・・・・・・・・・・は！ちょ、ちょっと～～～！」

「”この領域（ルール）を我（オー）が支配下（バード・メイン）とする”　”風（ウインド）よ”」

風を操り、奏の体を支えてゆっくりと降ろして行き、ゆっくりと抱きしめた。

「えへへへ！ありがとう～。セふぬぁ～～～???」

途中で奏の言葉が奇妙になる。それは何故かって？

「セふぬあ～～～、どうひてふひをひっはるの～（どうして、口を引っ張るの～）？」

私が奏の口を引っ張ているからだ。

「え？だって、奏があんな事をするからでしょう～～～（黒笑）？」

そのまま、口を思いっきり引いて離した。

「痛っ！だ、だって、余りにも嬉しかったから～」

「だからと言って、限度があるでしょ～う（黒笑）？」

ガタガタと震えながら言い訳をする。それでも、私は何も言わせない。

「う～～～」

「はあ～、奏」

「・・・・・・はい」

小さく返事をする。しょうがない子ね、奏は？

「もうしてはダメよ?」
「・・・・・うん」
「ヨシ!さあ、部屋に戻りましょう。ご飯を作ってあげるから。」

そう言うと奏はさっきの表情から一転し、笑顔へと変わった。

「うん!」

「はぁ~~~、やれやれ。もうしょうがないわね?」
取り敢えず、もうあの事を考えるのは止めよう。
今は・・・・・この私達の日常を大切に過ごしていける様に頑張ろう。

****

side change
木山　晴美side
場所はとある研究所の一室。そこには一人の女性が何時間もパソコンとにらめっこしていた。
「ふう、これでやっと八割か・・・・・・もうすぐだ。」
もうすぐで、あの子達を救う事が!
「ふう、研究の進行度はどうですか?」
子供達の事を考えていたが、急に話しかけられた事に我に返る。だ

が、驚きはしない。
彼も私の協力者なのだから。
「ああ、八割は完了した所だ。後、四、五日といった所だな。」
私が彼に現状を説明すると彼は顎に手を当てて、「ふむ」と頷く。
「それは凄いですね！当初の予定だったら後、数週間は掛かる予定だったのに？」
男は微笑みながら私を褒める。あまり、褒めらるのは好きではないのだが・・・・・・まあ、偶には悪くないな。
”ピーーーーー”
「な！」
パソコンから鳴り響く警告音に驚く。何故？余りにも早すぎる！
「どうしたんですか？」
「誰かが私の情報を調べている。」
「な！」
彼も驚いている様だ。まあ、無理も無い。
「クソ！このままでは、間に合わない！」
このままでは三日？いや、最悪、明日には確信されるかもしれない。
どうすれば良い？
「私に任せてくれないでしょうか？」
「え？」
「私がどうにかします。」

「・・・・・出来るのか？」
「少し強引な手になりますが、可能です」
「・・・・・分かった。頼む。」

私は彼にお願いした。

「ありがとうございます。では！」

その言葉を最後に男は霧の様に散って消え去った。
さて、取り敢えずはその調べている人物について調べておくか？
警告の画面をクリックする。これは私が組み込んだソフトで、私に関する情報をこのパソコン以外が調べたりしたら、そのパソコンの情報を入手して私に警告してくれるモノだ。
さて、その人物は・・・・・ほう？
「これは！」

『木之子中学校　一年　御坂美雪』

＊＊＊

次の日の朝、私達はいつも通り学校へと歩いていた。今日も日常の楽しい一日が始まる。私も奏もそう思っていた。

「あれ?どうしたんだろう?」
「うん?」

学校の校門前。そこには多くのアンチスキルが居た。どうしたのだろうか?・・・・・・・・まさか?
「この学校にもレベルアッパーの被害者が?」
「え!」

それなら、この状況も考えられる。

「取り敢えず、事情を聞かないとね。」
「そうだね〜」

私達は一人のアンチスキル元に向かい話しかけた。

「あの、どうかしたんですか?」
「うん!お、お前は!!!」

その行動が間違っているとも知らずに。

「おい、居たぞ!こっちだ!」
「え?」

男が声を出し、他のアンチスキルも集め、私達を囲む。

”ガチャ”

そして、アンチスキル達は銃を向ける。

「え？」
「・・・・・・これは何の真似ですか？」
奏が驚いている中、私は周りに警戒を配りながら問いかける。
もし、私達に危害を出すと言うならば容赦はしない！
「とぼけても無駄じゃん！」
アンチスキルの囲いから一人の女性が私達の元へと歩いてくる。
この人は・・・・・・・
「黄泉川先生。どういう事ですか？」
この人は黄泉川（よみかわ）　哀穂（あいほ）。当麻さんの所属している学校の教師をしている私達の知り合いだ。
「それはお前自身が一番理解している筈じゃん？」
「それが分からないから聞いてるんです！」
言いたい事があるなら早く言ってほしい。その怒りで私は少し荒く言葉を返す。
「・・・・・ここまで言ってもまだ恍けると言うなら、言ってやるじゃん！」
黄泉川先生は一枚の紙を私達、いや、私に向ける。
「御坂美雪。お前をレベルアッパーの開発及び流通。そして、多くの学生への精神的障害を与えた罪によって逮捕する!!」

「・・・・・・え？」

一体どういう事？

００７：どうしてこうなった？

「ふざけないで！何でセツナがレベルアッパーの犯人になるの？」

奏が怒りの表情でアンチスキルに向けて叫ぶが何の変化も示さない。

どうやら何かの間違いではない様だ。

「取り敢えず、犯人が私と決定した経緯を教えてくれませんか？」

「お前！「待つじゃん！ちゃんと説明するじゃん」分かりました」

一人が私達に掴みかかろうとするが、黄泉川先生がそれを止めて、説明を始める。

「今朝、ある学生の一人が寮の部屋で意識不明で倒れていたのをルームメイトが発見し、病院に搬送されたと連絡が入った」

「そして、症状は他のレベルアッパー使用者と同様に外傷なしの意識不明だ」

成程、レベルアッパーの副作用によって倒れた様のね。でも、それが何故私が犯人と決まるの？

「まあ、この時点では最近のレベルアッパーの使用者と変わらないんだが、問題はその人物だ。」

???その人物て、誰なの？」

「・・・・・・」

奏は分かっていない様だが、私はだいたいの予想が付いた。多分その人は

「その学生の名前は木下　楓。その名前に聞き覚えが無いとは言わせ

ないぞ？」
「え！」
「・・・・・・」

やっぱり。
これは私が今予想していた内の一人だ。何故なら彼女は以前に私の能力開発の講習を受けたメンバーの一人だからだ。

「お前は彼女に能力の特訓を手伝ったらしいな？」

まあ、彼女に教えたのはつい先日の事ですし。昨日、そのお礼を受け取ったばかりなので忘れる筈が無い。

「はい」

はぁ～～～、これは誰かに嵌められたわね？

「そ、そんなのウソに”スッ”セツナ？」

反抗する奏を手を前に出して抑える。

「で・・・私を逮捕するんですか？」
「セツナ！」

奏を含め、周りの生徒達が驚いている。まあ、そうなるのも分かるけど・・・・・しょうがないでしょ？これは。

「ああ、そうなる」
「では、どうぞ」

私は自分の両手を差出した。

「な！」
「「セツナ（美雪さん）!!!」」
皆が再び驚きの声を上げる。
皆、落ち着いてよ。
「良いんだな？」
「拒否しても良いんですか？」
「お前！「落ち着くじゃん！おい、こいつに手錠を！」・・・・・・分かりました」
”ガチャン”
男は私の両手に手錠を掛ける。
それにしてもこの人さっきから異様に私を睨みつけているけど、私何かしたかしら？
記憶にないのだけど。
「行くぞ」
そして、他の男達が私の両肩を掴んで連行する・・・が
「待ってよ！」
大きな声を出して私達を止める。声の主は奏だった。
「奏！落ちつ「セツナは黙っててて！」んなっ!!!」
これはマズイわね？止める様に言おうとしたが更に大きな声で黙らされる。

ヤバ・・・・・・マジギレだ。

「そんな理由でセツナを捕まえるのは間違ってる!!!」

「そうだ！そんなのおかしいだろ！」

奏の声に乗って他の生徒も声を出す。

「俺だって御坂さんの講習を受けたぞ」

「私もです。」

「な!!!」

それに驚くアンチスキル達。と言うか、私も驚いている。

確かに今声を挙げた生徒達は私が教えた者達だ。だからと言って、今言っちゃダメでしょ！

このままでは私どころか、皆まで逮捕されてしまう。

「俺達も受けたのに何の影響も無いんだぞ。だったらおかしいじゃないか？」

「そ、それは、まだそんなに時間が経ってないからで・・・・・・」

「私が受けたのは半年前。レベルアッパーが流れる遥かに前です。」

「な!!!」

どんどん追い込まれていくアンチスキル。ああ、私が捕まれば終わる筈だったのに・・・・・・何でこうなるのよ？

「とにかく！そんな理由でセツナを逮捕するのは間違ってる!!!」

「そうだそうだ！」

奏の言葉に便乗して他の生徒達も騒ぎ出す。

「ク！五月蠅い。これ以上、反抗するならお前達も逮捕するぞ！」

「やれるもんなら、やってみな！」
「そう簡単にやれると思わないでくださいね」

生徒達が能力を発動し、アンチスキルは銃を構える。
このまま戦闘が始まったら、本当に皆捕まってしまう。
仕方が無い！”この領域を我が支配下とする”でどうにか！

「こら！やめなさい。」
「「!!!」」

その考えに至り、使用しようとした時後ろからの声で私を含めた皆の動きが止まる。

「月詠先生？」

この人は月詠（つくよみ）巴（ともえ）。この学校に所属して、更に言うと私のクラスの担任だ。

「皆さん！何してるんですか？」
「い、いや！だって」
「え、え～と」

固萌先生の言葉に戸惑い始める皆。
怒られて自分が悪いと理解しだしたのだろう。

「言い訳は結構です！皆さんは後でオシオキです！」
「!!!」
!!!

先生の「オシオキ」。その言葉に生徒達は顔を真っ青にしてガタガタ震えだす。

「いや、先生。それは流石に・・・・・・・」
「美雪ちゃんは黙ってなさい！」
「はい・・・・・」

どうにかしようと話しかけるが即刻黙されてしまう。
何で、皆怒ってばかりなの？もうこれ以上、ややこしくしないでよ。

「それに、黄泉川先生！貴方も貴方です！」
「え！ここで私に振るじゃん？」

急に怒りの方が自分に振り向くとは思わなかったのだろう・・・黄泉川先生は驚きの声を出す。

「教師と言う立場でありながら何で確かな証拠がないのに一人の生徒を疑うんですか？」
「え、え～とそれは・・・・・・」
「はっきりしなさい!!!」
「す、すみません」

理由をはっきりと言うのではなく思いっきり頭を下げて謝る。黄泉川先生・・・・・その気持ち分かります。
でも、このままでは話が余計に違う方向に行ってしまうので・・・・・・・

「正気に戻ってください！」

”パシン”

「あ痛っ」

先生の頭をしばく。普通はおかしい事だが許してもらおう。

「・・・・・・は！」
「正気に戻りましたか？」
月詠先生に話しかけると先生は”ハッ”と何かに気付いた様な顔をして落ち込む。
「「「・・・・・・・・・・」」」
この場に沈黙が続く。どうしよう？ただ、私が捕まるだけだった筈なのに、何でこうなった？
「え～と、黄泉川先生。どうしますか？」
「・・・・・・とりあえず、一度帰って証拠を確認してからにするじゃん。」
おお！まさかの月詠先生の怒りで黄泉川先生のアンチスキル達を送り返した。
「じゃあ、これで失礼するじゃん！」
これで私の逮捕の件は終わった。
「良かったね。セツナ！」
安心した奏は抱き付こうと走り出したが・・・・・・
”ガシッ”
「ふぇ？」
「は～い。感動のシーン置いといて・・・・・・皆さんにはこれからオ

シオキタイムですよ～」

”ピシッ”

再び皆の顔が真っ青になった。あ～、終わったね。奏は苦笑いしてる。まあ、私と奏は平気だけど・・・・・・

「い、いやだーーー!」

「せ、先生。どうか、お慈悲を!!」

生徒達が次々と叫びだした。辛いよね、私も奏も初めて受けた時は危うく泣きそうになったものよ。

「はははは・・・・・許すわけ無いでしょう?」

生徒達は必死に抵抗したがその願いはあっけなく散った。

「「そんな～～～～～～!!!」」

先生は皆を生徒指導室に連行されていった。

え?私達はどうなったのか?そんなの決まってるじゃない。

「あ!二人は鬼塚先生の特別指導を受けて貰いますから・・・・・逃げ出さないでくださいね?」

鬼塚先生。この学校に所属している先生。担当は生徒指導で趣味は筋トレ等の運動系に偏っている。この学校では滅多に居ないが問題を起こした生徒はどんなに危険な能力者でも素手で叩き潰す。

本当に恐ろしい先生だ。奏もガタガタ震えている。とりあえず頭を撫でているが、あまり効果はない様だ。

「セツナ・・・・・私、生きて帰れるかな？」
「私も一緒だから大丈夫よ。」
「・・・・・・・・はぁ～～～」

結局補修を受けるのは嬉しくないので、溜息を吐いて落ち込む私達だった。

＊＊＊

何か呟いたようだが声が小さくて聞き取れなかった。顔が赤くなってるから恥ずかしい事でも言ったのかしら？

「べ、べ、べ、別に何でもないよ／／／」

だったら何でそんなに顔を赤くして焦っているのかしら？

そう聞こうと思ったのだけど・・・・・・

「まあ、聞かれたくない事は誰にだってあるし、気にしない事にしておくわ」

これ以上は聞かない事にした。

「う、うん／／／」

さて、じゃあ次に私が考えないといけない事・・・それは

「私を嵌めた人について考えないといけないわね？」

「あ！そ、そうだね」

焦って頷いている。忘れていたのかしら？

「まず、考えないといけない事は木下さんの事ね。」

確かに私は木下さんに能力開発の手伝いを行った。だけど、それをしたのは彼女だけでは無い。

この数カ月で何十人の生徒にもやった事だ。

「とりあえずは他の生徒達の状態を確認しましょうか？」

「そうだね。他の生徒達も同じ様になっていたら大変だもんね！」

「それじゃあ・・・・・・行きますか」

私達は席を立ち、教室を出た。

～～～放課後～～～

「問題無かったね～～～」

「ええ。どうやらこの学校の生徒の中で被害に会ったのは木下さんだけの様ね？」

多くの生徒に同じやり方をしてきたのに彼女だけ意識不明になっている。そんなのは変だ。

「これでセツナが犯人と言える証拠も無くなったね」

「いえ、これだけじゃ私が犯人じゃないと言う証拠にはならないわ」

それだったらアンチスキルはこう考えるだろう。”木下さんだけにレベルアッパーを使用した”と。

「セツナの逮捕の件を消すにはもっと確かな証拠を得ないといけないね？」

奏の言う通りだ。だけど

「ごめんね、奏。」

「・・・どういう事？」

「もし今度、アンチスキルが来たら、私は同行するつもりよ」

「え!!!」

その言葉を聞いて驚いた顔をしている。

「な、何でセツナ？」

当然奏はそれに反対だろう。

けど、これが最善だ。

「きっとまたアンチスキルはやってくるわ。確かな証拠も持たずにね」

「だったらまた追い返せば「それが問題なの」・・・え？」

きっと他の生徒達も奏と同じ事を言うだろう。だけど、それじゃあダメなの。

「さっきの生徒達のアンチスキルへの反抗・・・もし月詠先生が止めてくれなかったら、貴方達も捕まっていたのよ？」

「・・・・・・」

何も言わない奏。もう分かっている様ね。

「また反抗的な態度を見せたら、今度こそ皆逮捕されることになるわ」

「だけど！それでも・・・・」

「それに、これ以上抵抗するとアンチスキルが更に強引な手段を使ってくる可能性だってあるわ」

「え、強引な手段？」

奏は不思議そうな顔で私が言った言葉を呟いた。ここまでは考えつかなかったのね。

「忘れたの？私がアンチスキルにとってどんな存在なのか？」

「どんなって言われても・・・・・・・あ」

暫く頭を唸らせていたが、直ぐに思い出した様だ。

「思い出した？つまりはそういう事よ」

「うん、ごめん」

謝り、顔を俯かせている。奏・・・・・・私はそういう事をして欲しいわけじゃないわ。

奏の頭を撫でる。そして、笑って

「奏が謝る事は何もないわ」

大丈夫だと安心させる。これが今、私に出来る事だ。

「本当？」

「ええ」

再びの疑問に間なく返す。何度だって答えてあげるわ。大丈夫、心配ない。と！

「うん、信じるよセツナ！」

そして、漸く笑ってくれた。ありがとう

「さあ、とりあえず帰りましょう？」

「え、あれ？アンチスキルの所に行かないの？」

私はその場でズッコケた。奏・・・・・・・・・それはないでしょうに

「奏～～～、貴方は私に捕まってほしいのかしら？」

「い、いや、そんな事は無いよ？」

何故に疑問形???

「じゃあ、何でそんな事を言うのよ！」

「だって、捕まろうと思うって言ったから」

おどおどし始めたてるし！あのね～～～

「私が言ったのは”迎えが来たら同行する”と言ったの！誰も、自分から自首する何て言ってないわよ！」

「ま、まあ～、落ち着いてよ～、セツナ～～～～」

こうさせた原因は貴方でしょ!!!!

「はぁ～～～、ともかく私は自首はしない！ほら、帰るわよ」

それだけ言うと、速足で歩き始める。

「あ！待って～、セツナ～～～」

待ちません！精一杯、急いで歩きなさい。

こうして、私は早歩きで先を歩き、私を追いかける奏と言う構図で寮へと帰る事となった。

この構図を見た者は思うだろう……能力を使ったらすぐに追いつけるのでは？（奏が）

「・・・・・・・・・・・・・・」

さて、場所は変わって私達の学生寮。さっきの構図の状態のまま、寮まで帰ってきた私達は普通に玄関のドアを開け、中に入りました。

そう！何もしていません。なのに・・・・・・玄関のの先には大量の死骸（多分死んでない←ここ大事！）の山が出来ていました。

それを見た私達は何が起きたのか全く理解できず呆然となっていた。

「く、クソ！」

「フフフ！ハイ、マタヒトリ」

「ひぃっ！待っ”バキンッ”・・・・・・・」

”ドサ”

そんな中、ある方向から戦闘？の音が聞こえる。声の方を向くと山

の頂上に人が落下し更に死骸が追加された。その先の光景は多くの死骸で出来たこれのせいで見えない。
あれ?よく見てみるとこの死骸達全員・・・・・・アンチスキル?
・・・まさか!
「え?何が起きてるの?」

奏はまだ頭が追いついていない様だ。まあ、寮に帰ってきたと思った矢先にこんな現状を見てしまったら普通こうなるわよね?
というか!
「これはマズいわね」

すぐにそのアンチスキルが飛んできた場所へと走り出した。

「え!セ、セツナ!?」

ごめん。奏!今は構っている余裕がないの!早く止めないと取り返しがつかない事になる。
場所はこれの裏側なのですぐに辿り着いた。
その場には何とか生き残っていた三人のアンチスキルと

「止めてください、月詠先生!!!」

私達のクラス担任兼この学生寮の寮長。月詠巴が木刀を片手に持ってアンチスキルと対面していた。

「ウン・・・アラアラ!ミユキチャンジャナイデスカー?」

・・・・・うん、私には気づいてくれたけど、片言でしゃべってるし、目に光が灯ってない、顔が笑っている筈なのに物凄く怖い。月詠先生がマジギレです!
何でこんな事に?

「キイテクダサイヨー、ミユキチャン？」
「!!!」

そう考えると月詠先生はいきなり私の目の前に現れしゃべりだした。え、嘘！いつの間に移動したの？

「ヨミカワセンセイタラ、マタナンノショウコモナイノニ、ミユキチャンヲタイホシヨウトシタンデスヨ？」

な、成程。だけど、それは朝でもあった事だ。それなのに、先生がこんな状況になっていると言う事はアンチスキル達は更に何かをやらかしたのだろう？

「モチロン、アサノヨウニオイカエソウトシマシタヨ？デモネ」

あ、あれ？更に先生が恐ろしく見えてきた気がする。

「ダッタラタシカナショウコヲミユキチャンタチノヘヤデミツケルカラヘヤヲアケロトイウンデスヨ？シカモ、ダレノキョカモトッテナイノニデスヨ！」

はい。分かりました。何で先生がそんなにお怒りなのかよ～～～くご理解出来ました。

「お、おい！お前、御坂　美雪だろ？その女をどうにかし”バキン”ガハッ」

また一人山の頂上へと追加されました。いや、もう何なんでしょうか？

：さっきしゃべっていた男の末路

先生が一瞬で男の目の前に移動　↓　木刀で一撃を喰らい吹っ飛ばされ意識が飛ばされる　↓　山の頂上へ

→

今ここ！

さて、アンチスキルは残り二人。あ、そう言えば黄泉川先生は？そう考え

「ヨミカワセンセイナラ、アノヤマノイチバンシタデオヤスミチュウデスヨ？」

始めたと同時に先生が教えてくれました。何で分かったの「センセイニフカノウハナイノデスヨ？」・・・・・・・・・・・・・・・

私はそこで両手を地面に付け

「（もうダメ！皆に迷惑が掛からない様にと考えていたのに～～～～～～～～～～～～～～）」

心の中で叫んだ。

あれ、そう言えば奏は？私が先に動いたからってもうとっくに来ていてもおかしくないの「カナデチャンナラ、アソコニイマスヨー？」再び何かを考えた瞬間に心を読まれた・・・・・・・・・・・もう気にしない事にしよう。

先生が指した方に視線を移すとそこには言った通り、奏が居た。山に体を隠して顔だけを覗かせて。更に、その顔は青ざめてガタガタと震えていた。

奏・・・・・・”そんなに怖かったのね”と同情してしまった。

「アソコニイタラアブナイノデソロソロコチラニツレテキマショウカ？」

「え！・いや、先生ま「カナデチャン！・ソコハアブナイノデコチラニキマショウネ？」「フェェェッ!!!」・・・・・・・・・」

遅かった。そして、私の側へと連れて来られた。

「ハイ！・ココナラダイジョウブデスヨ？」

先生から解放された奏はそれに気づいた途端に私に抱き付いた。

「・・・・・・・・・奏、大丈夫？」

「ゼヅゥナ～～～～～～～～～～～～～！」

・・・・・・どうしよう？奏が今までにないレベルで泣いている。そんなに怖かったのね。

「アラアラ、カナデチャンヲコンナニナカセチャウナンテマスマスユルセマセンネーーー？・」

「それは貴方が原因です！」と言いたいと思っているだろうが、それを言うのは先生が許さない！

「ゼツナ～、これどうなっちゃうの？」

未だに泣き顔で私に話しかける奏。うん。これはね。

「奏！・能力で自分に聞こえてくる音を完全に消して、目を瞑りなさい！」

「え！・セツナ！」

「早く！・私が合図を出すまでそのままでいなさい！・分かった？」

「う、うん！・分かった！」

そして、奏は目を瞑り・・・・・・・・うん。奏のＡＩＭ拡散力場を確認。ちゃんと能力を使って音も消した様ね。

私は強く奏を抱きしめる。うっかり目を開いてあの現場を見合てしまわない様に

「エへへへ！／／／」

「うん？」

ふと、胸元で抱きしめている奏を見る。奏の様子は先程と変わっていなかった。

気のせいかしら？今、変な声が聞こえた様な・・・・・と、そんな事を考えている暇はないわね。あっちはどうなったのかしら？

先生の所に視線を戻す。え、私がやる事は何か？先生を止める？

無理です！

私が今出来る事それは奏にこの現状を見せない様にする事。それだけよ。

そして、残りの二人のアンチスキルは短い呻き声を漏らした後、宙を舞い・・・・・・・・・山の頂上へと落ちた。

「・・・・・・・・・・・・・」

全てのアンチスキルを始末した。月詠先生は

「ふぅ～～～、一丁上がりです。」

漸く元に戻ってくれました。

「大丈夫でしたか？美雪ちゃんに奏ちゃん！」

「はい、ありがとうございました月詠先生」

私は先程の事を無かったことにした。

「奏、もう良いわよ」

もう音を消す必要は無いので奏の肩を数回叩く。

「・・・・・・もう大丈夫なの？」

「ええ、終わったわ・・・・・・・・・色んな意味でね」

私は絶望した表情で言う。

そう。本当に色んな意味で終わってしまった。そして・・・・・・・

「あ！奏ちゃん、大丈夫でしたか？」

「え、あ、はい？」

この現状を作りだした本人はアンチスキルの心配ではなく、自分の生徒の奏を心配していた。

さて、私は黄泉川先生を起こしに行きましょうか？

００８：逮捕されました

「・・・・・・・・・」
「「・・・・・・・・・・」」
「え～～と？」
「「!!!!」」

私が声を出した途端にガタガタと身を震わせている。その状態を見た私は申し訳なくなり黙る。
はぁ～、先程からこの繰り返しだ。

「どうしたんでしょうか？あんなに怯えてしまって。何か恐ろしいモノでも見たんでしょうか？」

その恐ろしいモノは貴方ですよ。月詠先生。

「そ、そうかもしれませんね？」

奏も苦笑いで何とか答えている。
さて、このままでは話も進まないし・・・・・・

「黄泉川先生」
「な、な、ななな何じゃん？」

まだ先程のトラウマが消えていないのは分かりますが、怯え過ぎでしょうに。

「私を捕まえに来たんですよね？」
「・・・・・・・・・ああ、そうじゃん。」
「なら、どうして朝の様に校門前ではなく、寮にしたんですか？」

捕まえるのなら校門前で待っていて、出てきた所を捕まえた方が楽だ。
なのに、彼らはそれをせず場所をこの寮にした。それに月詠先生が言っていた
「タシカナショウコヲミユキチャンタチノヘヤデミツケルカラヘヤヲアケロトイウンデスヨ?シカモ、ダレノキョカモトッテナイノニデスヨ!」。
これが本当なら、彼らの本当の目的は私の逮捕以外にもあると言う事になる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も答えない。か?確定ね。

「成程。私の逮捕ではなく、私の部屋に侵入し情報を入手するのが目的でしたか?」
「ち、違「しかも、レベルアッパーの証拠でなく・・・・・・学園都市上層部のデータを。違いますか」・・・・」

何か言おうとしていたみたいですが、私がその内容を言うと再び黙った。
私は学園都市上層部に監視者と言う身分を付けられ、上層部からの命令の執行・この都市で起こる事件の把握・情報伝達等々、様々な事を行っている。
だから、私は多くの上層部の情報も持っていると言う事だ。大方、上層部の情報を掴んで悪いモノでも見つけたらそれを何かしらの交渉にでも使うつもりだったのでしょう。
「黙っていては何も分からないのですが?」
黄泉川先生に詰め寄る。私が怒っている事を理解しているのだろ

う。だが

「まあ、その貴方達が欲していたその情報のデータはこの寮にも存在しませんけどね」

「は？」

気の抜けた声を出して呆然とした表情をしている。それは、黄泉川先生以外の人達で当の本人は安心したような顔をしている。

良かった。どうやら貴方は賛成していなかったようですね。

それに比べて・・・・・・

「当然でしょう。何でわざわざそんな分かりやすい所に置いておかなければいけないんですか？」

「チィッ!!!」

「折角情報を入手できるチャンスだと思ったのに」

何ですか？その態度は

「ふざけないでくださいよ？」

殺気を放つ。

「「!!!」」

いい加減にしてくれないかしら？その侵入しようとした部屋は私の部屋じゃなくて私と奏の部屋だ。

私だけなら別に構わない。だけど、それに奏も含むのならば容赦はしない！

「別に私の権力を使って貴方達を潰したって良いんですよ？」

私だって長い間やっているんだ。上手く交渉すればそれ位の事は可能だ。

「な！ふ、ふざけるなよ。貴様！」

一人の男が私の胸倉を掴む。あれ、さっきの話を聞いていなかったのですか？

「上層部の連中に気にいられているからって調子に乗るなよ！お前なんかやろうと思えばいつでもやれるんだぞ！」

どんどんセリフを吐き続ける。そう言えばこの男。朝、私に悪い態度を示していた人ですね。成程、私が貴方よりも立場が上である事が許せない。と言った所でしょうか？

「何なら今すぐにぶっ飛ばしてやろうか！そこの連中も含めて全員な！」

・・・・・・・・・今、何と言った？

「おい、如月！それ以上は」

「うるさい、いいから黙って「黙るのは貴方ですよ。このクソ野郎」あ？ガハッ!?」

何か言っていたがそんなの関係なしに首を掴んで壁に叩き付けた。へぇ、こいつ如月って言うんですか。まあ、どうでも良いですけど。

「黙っていたらさっきから調子に乗って・・・・・・身の程を知れ!!!」

「「セツナ（美雪ちゃん）!!!!」」

後ろの二人が止めようと走り出したのが気配で分かる。無駄です。

”この領域(ルール・オーバー・ドメイン)を我が支配下とする――重力(グラビティ)よ――”

「!!!」

「二人共、邪魔しないでください」

二人が居る場の重力を強くして動きを封じる。地面に体を押し付けた。

「さて、じゃあ死んでみますか?」

「な!?ふざぐががぁぁぁぁ・・・・」

何を驚いているのかしら?さっき貴方がやろうとした事じゃないですか?

「もうしゃべらないでください・・・・・・すぐに楽にしてあげますから」

そして、少しずつ力を強くしていく。

「が、がぁじおぐがが――――――――」

あら、抵抗する力も弱くなってきたしもう終わりね。

「さようなら。きさ「駄目だよ。セツナ」・・・・・・奏?」

腕を後ろから誰かが触れた。それは私の魔術によって動けない筈の奏だった。

何で邪魔するの?こいつは私達を殺そうと考えたのよ。

「離して、奏。こいつは絶対に許せない!」

「うん、分かるよ。セツナの気持ち。でもね、それじゃあ、そいつと同じになっちゃうよ？」

奏の言っている事も最もだ。今、私がこいつを殺せばこいつと同じ位の存在となる。

それでも私は!!!”ギュッ”「セツナ、大丈夫だよ。」「・・・」

「私も月詠先生も大丈夫だから。ね？」

優しく抱きしめてくれた。それだけなのに、とても落ち着く。先程迄の怒りが鎮まっていく。

自身の魔術を解き、ゆっくり奏の腕を振り解く。

「セツナ？」

「安心して、奏。もう心配ないわ」

男の首を開放した。重力に従って地面に落ちる。

「が、ゲホゲホゲホ！」

やっと解放された男は思いっきり咳き込んでいたが、無視だ。それよりも・・・・・・

「奏。大丈夫？」

奏の心配だ。魔術を使って動けない様にしていた。

負担が掛からない様にしていたが、それに抵抗した奏は別だ。普通では動けないレベルで放っていたから、心配だ。

”解析開始（サーチ・オン）”

・・・身体への過大な負荷
・・・・体力の減少
を確認

”解析（サーチ・オフ）完了”

やっぱり。私が怒ってあんな事をしなかったら、奏に被害が及ばない様にしていたのに私が与えてしまったら元も子もないじゃない。

「奏。ごめむぐっ!?」

謝ろうとしたが指で口を塞がれてしまい、言い続ける事も出来ない上に変な声を出してしまった。

「謝るのはなしだよ？セツナ」
「だって、私のせいで！」
「私は大丈夫だから。ね？」

奏・・・・・・・・・・

「ありがとう」
「うん。どういたしまして～」

さて、それじゃあ最初にやろうとした事をしないとね。
アンチスキルの方へ振り向く。連中は先程の私の行いのせいか、怯えている。
まあ、そんなのを気にする私ではないので連中に近づき両手を差し出す。

「どうぞ。投降します。」

両手を差し出して告げた。

「「・・・・・は？」」

「だから、投降します。と言ってるんです」

何、呆然としているんですか？早くしなさいよ。もう一度私がキレたら、もう誰にも止められないわよ？

「い、良いのか？」

「はあ・・・・・・とっととしてくださいませんか？」

「は、はい！」

大丈夫かと問いかけてきた男を軽く脅すと即座に返事をして私の手に手錠を掛ける。

「い、行くぞ」

「ええ」

「「セツナ（美雪ちゃん）」

「ん？」

「「気を付けてね」」

奏、月詠先生。

笑って答えよう。それだけで十分だ。

「はい。行ってきます。」

こうして私は連行された。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

音無　奏ｓｉｄｅ

「セツナ・・・・・・」

セツナは言った通り、アンチスキルに投降した。分かっていたけどやっぱり見ていて辛くなるよ。

「大丈夫ですよ。奏ちゃん」

「先生」

「美雪ちゃんは笑ってたじゃないですか？」

「はい。そうですよね」

うん。それにここに来る前にも言ってたよね～～～。問題ないって。

「あ、あの～、良いでしょうか？」

「ん？あ、小島先生」

後ろを振り向くとそこにはおどおどした表情の人が立っていた。

この人の名前は小島　百合子（こじま　ゆりこ）。この寮の管理人。

この寮は小島先生と月詠先生の二人が担当しているのだ。

因みに小島先生が生活補助担当で月詠先生が事件等の問題処理担当だ。

「そ、そのすいませんでした。私、何も出来なくて・・・・・・・」

深々と頭を下げる小島先生。

「まあまあ、小島先生。大丈夫ですよ」

「そうそう～～～。月詠先生のおかげでどうにかなったし！」

この状況だったら、まあ仕方が無いだよね～～～。

「でも御坂さんが・・・・・・」

「あれ～、小島先生。もしかして最後の方の話聞いていなかったの～？」
「え・・・・・・あ、はい。すみません」
「あ～、そっか。」

道理でね～。まあ、知らないなら仕方がないよね～

「セツナは自分の意志で同行したから、問題ないよ～？」
「え・・・え、えーーーー！」
「騒がしいですよ。小島先生！」
「あ、すいません。じゃなくて、どうしてそういう事に？」
「え～とね～」

――――少女説明中――――

「と言うわけなの～～～」
「そうだったんですか。ビックリしたー」

ほっと息を撫で下ろしている。相当不安だったみたい。

「もう、小島先生は心配性ですね！」
「だ、だってー」
「「はははははは」」

あ～、おかしい。・・・・・・少し安心できたかな？

「それじゃあ、私は部屋に帰りますね～」
「はい。それでは気をつけるのですよ？」
「は～い」
「ほ、本当に気を付けてくださいね？まだ、レベルアッパー事件もまだ解決してないんですからね」

「それは大丈夫ですよ～。小島先生」
「え、何でそう言えるんですか？」

月詠先生も含めて児島先生も不思議そうな表情をしている。え？何でって、それは・・・・・・

「だって～、セツナはもう犯人の目星が付いているらしいし」
「・・・・・・・・・・」

あれ～、何で二人共黙ってるの？

「はいいいいい!?」
「え、何？どうしたの～？」

慌てていると月詠先生が私の両肩を掴んだ。

「奏ちゃん。どういう事なのですか？」

あ、あれ？掴まれている手がとても痛い～。

「せ、先生。肩が～、肩が痛い～～～」
「あ、ごめんなさい・・・じゃなくてですね！どういう事なんですか!?」
「え、え～とねぇ。昨日の夜なんだけど・・・・・・」

～～～昨夜～～～

時は夜の十時頃、食事と風呂を終えて着替えを終えた私達は寝室に居た。私はベッドに横になってゴロゴロ、セツナは椅子に座って何かを読んでいる。

「それにしても、レベルアップパーの開発者は何が目的なんだろうね～

？」
「大抵、能力者のデータ採取。又はＡＩＭ拡散力場の研究のどちらかが目的でしょうね」
「・・・・・・へ？」

あれ～？何かスゴイ重要な事をさりげなく言った気がする～？

「え～と、セツナ？今、何て言ったの？」

さっき聞いた言葉は幻聴だったと信じてもう一度聞いた。

「うん？聞こえなかったの？能力者のデータ採取。又はＡＩＭ拡散力場の研究のどちらかが目的。と言ったの」

幻聴ではなかった。え!?何で・・・・・・

「何時から分かってたの？」

「え？こんなのレベルアッパーの内容を聞いたら理解できるでじゃない」
「・・・・・・・・・・」
「奏？」

セツナが何も無言で呆然としている私に声を掛けてくる。

「（ニコッ）」

私はそれを笑顔で答え、ベッドから降りてセツナの元まで歩いた。

「え？」
「何で言ってくれないかな～～～？」

「だ、だって」
「だって？」
「・・・・・・・聞かれなかったし」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・あはははは」

沈黙する私。セツナはそれをみて乾いた笑いを出す。
私は更に笑みを濃くして・・・・・・”ギギギギィ”

「いたたたあっ!!!いふぁい！いふぁいふぉ!!!」
「セツナの～～～、バカ～～～～～～」

～～～三十分後～～～

「う～、痛いじゃないの」
「絶対に今のはセツナが悪い～～～」

それは絶対に間違いない!!!

「で、結局～何で分かったの？」
「いきなり話を戻すのね。まあ良いけど」

はあ。と溜息を吐いたセツナ。

「まあ、推定になるのだけど。まずレベルアッパーは音楽プレイヤーでこれを能力者が聴くと自身の能力のレベルが上がる。ここまでは良いわよね？」

一度頷く。その内容は以前にセツナが話してくれた。

「ヨシ！じゃあ、いきなりだけど・・・・・・・・・・結論から言って

しまうと音楽を聴いただけでレベルアップするなんて事はありえない！」
「・・・・・・・え？」
ちょ、ちょっと待って～～～
「混乱しているようだけど続けるわよ。音楽を聴くだけでレベルが上がる。そんな事を可能にするなら直接脳を改造しないといけなくなるわ。だけど、そんな事をしたらレベルアップする前に脳が駄目になってしまう」
「・・・・・・・・・・・」
駄目だ。理解が追い付かないよ～～～。無言で悶えている私だけど
「でね。それじゃあ、どうやってレベルアップが可能になるか？そんなのＡＩＭ拡散力場を利用すれば良い。」
「・・・・・・・ＡＩＭ（エーアイエム）拡散力場？」
何だっけ？確か授業で聞いたような、なかったような・・・・・・・
そう思考していると、私が何を考えているのかを察したのか
「もしかして奏。分からないとかじゃないわよね？先週の授業で出たわよ」
「え～、本当に～～～？」
全く記憶に無いんだけど？
「はぁ～、まあ良いわ。ここからは出来る限り分かりやすく説明するわ。ＡＩＭ拡散力場と言うのは正式名称はＡｎ｜Ｉｎｖｏｌｕｎｔａｒｙ｜Ｍｏｖｅｍｅｎｔ拡散力場。Ａｎ｜Ｉｎｖｏｌｕｎｔａｒ

ｙ｜Ｍｏｖｅｍｅｎｔは無自覚て言う意味で、能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールド全般を指すモノなの」

ほへ～。成程～。と言うか今の説明で理解できた。多分、授業で説明されていた時私はそれが分からなかったんだね～？だから、覚えてないんだ！うん、納得。と言うか、最初からそうしてよ～！

「で、そのＡＩＭ拡散力場をどう使えば良いのかと言うと能力者の脳にアンテナを建てるの！」

「・・・・・・・・・・」

あれ～？さっきまで理解出来ていたのに急に分からなくなっちゃった。人の脳にアンテナを建てる？意味が分からないよ～

私は人の頭に脳に建てられそのまま突き出ているアンテナがある状態を想像した。何これ～？超恐いよ～～～

「言っておくけど、別に直接人の脳に塔みたいなのを建てるわけじゃないからね」

「ふぇ？」

そうなの？良かった～～～

「人の脳波を特定の脳波に変更する。これだけでアンテナは出来るのよ」

人差し指をピンと立てる。恐らく今言ったアンテナを表してるんだろうね～。

「で、そのアンテナはレベルアッパー使用者全員にある。分かる？」

「うん」

「それじゃあ後は簡単よ。奏、自分の能力のレベルを上げるにはどう

したら良いと私は教えたかしら？」

え？急に何でそんな事聞くの～？え、え～～～～と、たしか・・・・・

「演算処理の幅を広げる、速度を速くだっけ？」

「そう！演算処理の向上。つまりはレベルアップパー使用者同士がその演算処理の手伝いをしていたのよ」

「え、えええええええ！」

「そんなに驚くことかしら？脳波は同じだからネットワークで繋がっている。そして、同系統の能力者同士で能力の演算処理をして、速度が速くなり、幅も広がる。ほら、単純！」

い、いやいやいや！驚くよ！うん？

「ちょっと待ってセツナ。何でそこまで分かったの？まだ、レベルアップパーは音楽プレイヤーて事ぐらいしか分かってないんだよね？」

「あら、今更そんな事を聞くの？」

セツナは当たり前の顔で答えた。いや、答えてしまった!!!

「学園都市の研究者が出す論文とかあるでしょ？あれの一つにこれに似た事が書いてあったのよ」

「・・・・・・・・・・」

「どうしたの？奏？急に黙り込んで」

私は黙り込んだ。いや、だってさ～～～～。いくら何でもそれは・・・・・・・・・・いや、まて！

「セツナ！その論文は最近読んだの？」

そうだよ～！これならまだ

「え？いや、確か去年か一昨年ぐらいじゃなかったかしら？」

駄目だった。やっぱりセツナはセツナだったよ～。

「普通は覚えてるわけないでしょおおおおおおおお!!!」

「え、ちょ、奏！落ち着いて・・・・・・・・・・・・・」

「落ち着けるかぁぁぁ

ね」
「あはははは。それにしても相変わらず凄いですね。御坂さんの記憶力は・・・・・・もし、彼女が能力が使えたらレベル5になれたんじゃないでしょうか？」
「そうかもしれませんね。けど、それは不可能なのですけどね」

その言葉に二人の表情が暗くなる。そっか、先生達はセツナの秘密を知らないもんね～？
「大丈夫ですよ～。セツナは強いもん」
「そうですよね。本当なら御坂さんがレベルアッパーに手を出してもおかしくないのに」
「それはありえませんよ。小島先生！」

うん。それは絶対にないね～～～。

「美雪ちゃんはそんなモノに頼らず自分の力でどうにかする子です！だから、あの子はそんな事は決してしないのです!!!」

胸を張って答えた。うん。月詠先生の言うとおりだよ～。
「・・・・・・そうですね。だから、御坂さんは学校の皆に信頼されているんでしょうね」
「はい！その通りなのです」
「そうですよ～。さて、じゃあ説明も済んだので、今度こそ帰りますね～～～」

そう言い、私は自分の部屋へと帰った。

「ふう～～～～」

場所は寮の寝室。ベッドの上で寝転がっている。

「・・・・・・・・・」

セツナは大丈夫と言っていた。だから信じるよ！無事に帰ってくると・・・・・・・・・て、あれ？

「うん？」

何かセツナがキレそうな予感がする。あれ？大丈夫と言っていたのにもうなの!?

「はあ～、しょうがないな～」

私はポケットの中から札を取り出した。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美雪ｓｉｄｅ

「おら、着いたぞ。とっとと降りろ」
「はいはい」

護送車に乗ってから約三十分。やっと、アンチスキルの組織へと辿り着いた。
あ～、長かった。
私は男に言われた通りに車を降りた。

「・・・・・本当にすまないな。こんな目に会わせてしまって」
「別に構いませんよ」

どうせ黄泉川先生が一人抵抗した所で何も変わりはしなかっただろう。

「それよりも良いんですか？」
「？　何の事じゃん？」

あら？分かってないのでしょうか？

「私が何の証拠もなしに逮捕された。そんな事が上層部に知れたら困るのは貴方達アンチスキルの方ですよ？」
「な!?」
「どんなに誤魔化そうと数日で知られるでしょうね。さて、どうします？」

うわ～、凄い悔しそうな表情だ。と言うか捕まる前に言っていた話を聞いていたら予想出来た筈だけど

「おい、何を話している。行くぞ！」
「は～い。それじゃ、黄泉川先生。ご武運を」

私は笑って男に付いて行った。さて、どうなるのかしら？

「ここだ。入れ」
「・・・・・・・・・」

私は何も言わず、言う通りに指された牢屋の中へと入った。
牢屋を見るのも入るのも初めてだけど、やっぱり汚いわね。あるのは、窓・トイレ・ベッド。正直に言って女の子にこのトイレの設置はどうかと思うのだろうけど？監視カメラもあるのに・・・・・・

ベッドに座り天井を見る。
そこには二つの監視カメラがあるのが分かる。喧嘩を売っているのかしら？
いっそのこと、私がここを潰してやろうかしら？

『ダメだよ、セツナ』
「!!!」

今、奏の声が・・・・・て！

『奏・・・貴方、私と別れてから一時間も経っていないのにどうしたの？』
『う～ん、何となくだけどセツナが暴れそうな気がして～』

本当に奏の能力て振幅操作だけなのかしら？本当は多重能力者で読心能力も持っているんじゃないの？

『う～ん、多分セツナ以外じゃ無理だよ～。セツナだから分かるが正しいかな？』
『心を読まないでよ！』
『ふふ～ん、どうしようかな～？』

何で、そこで迷うのよ!!!

『ふふふ、とりあえず怒りは収まったでしょ？』
『ええ、奏のおかげで落ち着いたわ』
『良かった～～～』

本当に奏には感謝しきれないわね。今度帰ったら豪華な料理でも振る舞ってあげないとね・・・・・・・・・・・うん？料理？は!!!

『奏・・・貴方、私が居ない間ご飯はどうするの？』
『・・・・・・・・・・』
『奏？』

沈黙が続く。お～い、どうしたの？

『あああああああああああああああああああ!!!』

ちょ！この念話は頭に直接聞こえるんだから急に大声を出したりしないでよ！ああ、頭がクラクラする。

『どど、どうしよう。セツナ！このままじゃ私、空腹で死んじゃうよ～』

さっきの喜々とした状態から慌ただしい感じになってる。

『はぁ～、奏。月詠先生か小島先生にお願いしなさい。あの二人なら喜んで作ってくれるわ』
『は！そうだね。じゃあ、お願いしてみるね～』
『ええ、絶対にインスタントや冷凍食品等の体に悪い物はを食べたりしない様にね』
『うん～。分かった』
『それじゃあ、奏。体に気を付けて』
『うん。じゃあね！』

念話が切れた。

「ふう」

さて、上層部が動き出すのは三日位掛かるるでしょうね。
今日か明日には尋問があるでしょうけど・・・・・・・・・

「始まるまで寝てましょうかね」

私はベッドに横になって寝た。さてさて、これからどうなるのかしら？

～～～十分後～～～

「起きろ、御坂美雪」

「うん？」

あら？まだ十分位しか経ってないのに、もしかしていきなり尋問ですか？

流石に無いわよね？

「付いてこい」

「はい」

とりあえず、付いてこいと言われたので言う通りに付いていく。

「・・・・・・・・・・」

道を通ると何人かのアンチスキル達を見かけたり通り過ぎたりする。その全員が私を見ている。その視線は怒りや悲しみ等々でまあ、その視線を貰って良い気分ではないのは確かだ。

「これは、お前がした事の結果だ。」

おや、案内してくれている人が気づいた様だ。けど、助ける気はないらしい。自業自得とでも言いたそうですね？

「そうですね」

まあ、とりあえずは返事を返す。

さて、目的の部屋には後どれくらいで着くかな～？

「おい」

そんな事を考えていると横から声を掛けられた。私は考えを中断して横を見る。あれ？この人は・・・・・・・・・・

「また貴方ですか？」

その人は私を逮捕する時に居た男だ。あの如月みたいに直接何かしてきたわけではないが、この男は男で私の事を凄く睨んでいた。本当に何のつもりなのかしら？学生を守る人がその学生を殺そうとするなんて

「何の用だ春日部？」

「すいません。けど、俺にはどうしてもやらなければいけない事があります！」

「何だ、それは？」

やらなければいけない事？嫌な予感しかしないわね。

「それは・・・・・・」

春日部と言う名の男・・・・・・・・・まあ、年上だから”さん”を付けよう。私は春日部さんをじっと見る。春日部さんは私の正面に立ち腕を思いっきり振りかぶり

「これです!!!」

私の顔面へと放った。しかし、私は拳が直撃する前に

”我が支配する(ルール・オブ・ドミネート)――風よ(エア)――形状変化　硬化(メタルクラッド)”

魔術を使用した。

”ゴキン”

と鈍い音が鳴り響き渡る。そして

「ぐ、ぐわぁぁぁぁぁぁ!?」

殴った手をもう片方の手で押さえながら叫びだした。一応言っておくが私には傷一つない。

”我が支配する”を使って自分の顔の前にある空気を操り鋼鉄以上の硬度の壁を生成し座標固定した。後は春日部さんがその壁を殴り今に至る。

彼の手は五本の内二本のの指が変な方向に曲がっているし、殴ったと思われる場所は真っ青に腫れている。

「か、春日部。大丈夫か?おい誰か、すぐにこいつを医務室に」

案内人はすぐに周りの人を呼んで彼を医務室へと連れて行く様に声を出した。

すぐに近くに居た二人がこの場に駆け寄り彼を連れて行こうとする。が、

「は、離せ!俺にはやらなくちゃいけないんだよ」

「駄目ですよ、春日部さん。早くその怪我を直さないと」

「ぐぅっ・・・御坂美雪ィ!」

彼は私を睨みながら私の名を叫ぶ。お～、怖い。殺気が籠ってるし。

「何ですか？」

「俺はお前を絶対に許さない！俺の生徒を騙し、苦しめているお前を」

成程ね。春日部さんも何処かの・・・・・・・・あぁ、確か

「貴方は三石中学校の教師でしたね？」

「っ！ああ、そうだ。そして、俺のクラスの生徒六人が倒れた。お前が作ったレベルアップパーのせいでなぁ!!!」

要するに理不尽な怒りを私にぶつけているわけね。だって、私レベルアップパーと関係ないですし。

「お前があんなモノを作りさえしなければあいつらはあんな目に合わなかっ「言いたい事は文句だけですか」何だと？」

「どうやら、そのようですね？さて、さっさと目的の場所への案内をお願いします。そちらの人も早く春日部さんを医

務室に運んだらどうなんですか？」

「え、あ、はい」

「ぐ、おい、待て。待てよ・・・・・・・御坂美雪いいいいいいい！」

私は案内人と一緒に廊下を進み、春日部さんは医務室に連れて行かされた。思いっきりに叫んでいたが無視だ。

「お前、春日部に何をした？」

「何の事ですか？」

歩いている途中に案内人さんが聞いてきた。まあ、当然ですね。普

通なら私が怪我を負っていた筈ですし。

「とぼけるな。あれはどう考えたっておかしいだろ？」

「・・・・・・・・・確かにおかしいですよね」

「だったら「アンチスキルが逮捕した無能力者の学生を自分の感情に任せて殴ってきたんですから」なんだと？」

「何かおかしなことを言いましたか？あんなの誰が見たってアンチスキルが学生を殴ったが自爆した。としか見えませんよね？」

相手が先に仕掛けてきて私はそれに抵抗した。つまり正当防衛だ。それに魔術の事を教える等論外だ。

「だから「もういいでしょ。ね？」分かった。ここだ」

無理やり黙らせた。

そして、部屋に入る。そこは・・・・・・やっぱり尋問室か。

「そこに座れ」

「はいは～い」

「さて、それでは質問させていただこうか？」

いや、そう言われて答える人は居ないと思いますよ。

「では、一つ目。どうやってレベルアッパーを作った？」

「・・・・・・・・・」

私が作ってないんだから知らないです。

なので、沈黙を通す。

「何が目的なんだ？」

これも知るわけがない。再び沈黙を通す。

「答えろ」

はあ、煩いなぁ。このまま沈黙を通しても良いですけど、絶対に面倒な事になりそうね。

しょうがない

「さあ？」

「・・・・・・・・・は？」

「だって、私が作ったわけでもないですし。構造なら大体理解できてますけど、目的なんか知るわけないじゃないですか」

おやおや、顔を俯きプルプル震わせている。これはかなり怒っているわね。まあ、別に嘘を言っているわけではないし、気にしないけどね。

「ふざけるなぁ！」

おお、怒鳴りつけてきましたね。

「ふざけていませんよ」

「どこがだ。お前が犯人じゃなかったら、誰だと言うんだ？」

「知りませんよ。第一、それを調べるのが貴方たちの仕事なのでは？」

悔しそうにして口を閉ざした。分かっているんなら、怒らないでほしいわね。

「だ、だが、お前には生徒に被害を与えただろう。それが、何よりの「それが証拠というんですか？だとしたら、くだらないですね。それでは私が犯人だとは言えませんよ？」ぐ・・・・・・だが、お前が犯人で

はないと言う証拠にもならないだろう？」
「ええ。ですが、先程にも言った通りに犯人だと言う証拠にもなりませんでしょう？」
また、黙ってしまいましたよ。呆れながら、ずっと見守っていると
「そうだ！――――――――」
と、また何かを思いついた様に呟き始めた。私は「はあ」とため息を吐き出した。
そうやって、尋問は繰り返された。
はてさて、これからどうなるのかしら？

００９：犯人が分かりました？

さて、どうも皆さん！セツナこと御坂美雪です。
私はというとアンチスキルに逮捕されてしまい、現在進行形で捕虜の生活を過ごしています。
全くいい加減にして欲しいものです。私は関係ないのに・・・・・・
「本当にどうなるのでしょうか？」
尋問に正直に答えたが嘘扱いするし、信用しろとは言いませんが、このままで良いんですかね？
今も犯人は自由に行動していると言うのに。けれど、ここに居る以上は何も出来ないし・・・・
「はあ、これだから人の事を信用しない人は・・・・・・・あ、そうだ」
私が駄目なら奏にお願いすれば良い。
服の中からいつものお約束魔術道具。奏との通話用のお札を取り出す。
『もしもし、奏。聞こえる？』
『・・・・・・はいは～い』
やっぱり返事が来るのが早いわね。
『で～、どうしたの～？』
おっと、どうでも良い事を考えてしまった。さて、本題に移りましょうか。
『奏、ちょっとお願いがあるんだけど良い？』
『セツナのお願いなら何でもお任せだよ～～～』
相変わらず、奏は優しいわね。
『ありがとうね。それじゃあ――――なんだけど大丈夫？』
「・・・・なんだけど大丈夫？」
『うん～？そんなので良いの～～？』
『ええ、お願い』
それだけ分かったらもう事件の詳細は理解できる筈だ。
それに、今回の事件は何か嫌な予感がする。
何故かは解らないけれど犯人は魔術サイドに関わっている気がす

る。
　出来る限り奏を頼りたいと思っているが、それと同じぐらいに危険な目には合わせたくないと思っている。
『そう～、セツナがそれで良いなら分かったよ～』
『ええ、任せたわ。お願いね』
　とりあえず、今回の事件には余り奏には関わらない様にしてもらおう。
『じゃあ、よろしくね』
『う～ん、私に任せてよ～。それよりも大丈夫なの？』
『全く問題ないわ。だから安心していなさい』
　問題が無いわけではない。むしろ危険だ。
『絶対に危なくなったら私を頼ってね。約束だよ』
『・・・・ええ。その時は頼りにさせてもらうわ』
　私は嘘を吐く。いつもなら奏には気づかれてしまう。だけど・・・・
『えへへへ。うん、任せて～～～』
　それに奏は気づかない。何故気づかないのか？それは私にも解らない。
　単に私の嘘が上手なのか。いや、奏ならすぐに気づく。
　本当は気づいて欲しいと思っている私に対して神様か何かが気づけない様にしているのかもしれない。
　恐らく私は後に奏に怒られるだろう。奏はキレたら手が着けれなくなるから、大変な事になりそう・・・・と言うよりもそっちの方が事件の解決よりも厳しい気がするわね。
『それじゃあ、切るわよ。さっきの件お願いね』
『は～い。それじゃあね』
　はてさて、どうなるかしらね？

～～～三日後～～～

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

御坂　美琴ｓｉｄｅ

「たく、入ってきていきなり何すんのよ？」

「それはお姉さまにも言える事ですわ。能力を使って勝手に電子ロックを解除して入るのは止

めてくださいと何度も言っているでしょうに!!」

「まあまあ、御坂さんも白井さんも落ち着いてください」

私は再びレベルアッパーの件について分かった事がないかを確認するためにジャッジメントの支部に行ったのだが、途端に黒子がテレポートで初春さんを私の真上に飛ばし私と初春さんの頭を打たせた。

確かに能力で電子ロックを解除したのは悪かったけどさあ、頭上に激突させるのはあんまりでしょ!!

「まあ、良いわ。それで、レベルアッパーについて何か分かった？」

「それが全くですの。複数のレベルアッパー使用者を捕まえて調べましたが全員ただ使っていただけで」

「どういう仕組みなのかは知らない。か？」
「ええ。全く困ったものですわ」
　さて、今分かっているのはレベルアッパーは音楽で能力者が聴けば能力のレベルが上がる。しかし、使用者は時間が経つと意識不明に陥ってしまう。それぐらいか？
「早く見つけないといけないわね。佐天さんのためにも」
「ええ、そうですわね」
「・・・・・・」
　この部屋に重苦しい雰囲気が漂う。特に初春さんが悲しそうな表情をしている。
　それも無理はない。ここには居ない佐天涙子さんはレベルアッパーの使用によって他の使用者と同様に意識不明の状態になってしまった。
　佐天さんは苦しんでいた。私達四人の中で自分だけが能力を使えない事に、何も出来ない自分に。だから、レベルアッパーと言う危険なモノに頼ってしまった。
「絶対に見つけて助けないとね・・・・・・けど、制作者も分からないし。本当に手詰まりなのよね」
「・・・・・・」
「どうしたの？」
　黒子は、制作者と言った途端に黙った。もしかして！
「分かったの!!製作者が？」
「ええと、それは・・・・・・」
　もう、はっきりとしなさいよ!!
「それは私が説明するわ」
「固法先輩、それは!!」
「白井さん。貴方が言いずらいのは分かるわ。でも、言わなくてはいけないのよ」
「・・・・はい」
「御坂さん。今日から三日前にレベルアッパーの作成及び流通を行った疑いで一人がアンチスキルに逮捕されたわ」

三日前から!!だったらレベルアッパーの事がもっと詳しく分かってる筈なのに
「犯人は何も言ってないんですか？」
「ええ、何度も尋問を行っているみたいだけど沈黙状態でね」
「一体、そいつは誰なんですか？」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
二人が黙る。何？私が知っている人なの？
「御坂さん。落ち着いて聞いてね・・・・・・その人物は御坂美雪。貴方の妹さんよ」
「・・・・・・・え？」
思考が止まる。え、どうして？何で美雪が
「逮捕された日の朝、一人の学生が意識不明で発見されましたの。その症状はレベルアッパーの副作用だと分かりました。」
「そして、その生徒は美雪さんに能力の練習の手伝いをして貰ていたらしいわ」
「・・・・・・・」
「御坂さん？」
「なにを・・・・・・」
「へ？」
「何をやってんのよ？あのバカ妹は！」
思わず大きな声を出してしまう。だってそうでしょう？久しぶりに会ったと思ったら生意気な態度ばかりで接してきて、そんでレベルアッパーの犯人？ふざけんじゃないわよ。
「で、美雪はアンチスキルの所に居るの？」
「あ、はい。今日、私達も行く予定「ちょ、ストップですの!!初春」へ？」
「ふ～ん、成程ね。私もそれに付いていくから」
「うええっ！」
「はぁ～、やっぱりこうなってしまいましたの」
当然でしょ。絶対に美雪から問い詰めたやるんだから!!

「これは何を言っても無駄みたいね」
「そうですわね。ですが、お姉さま!!」
「ん?」
真剣な眼差しで私を見る。
「絶っっっっっ対に妹様と喧嘩しないでくださいな」
「・・・・・・・・・」
思わず、絶句してしまった。何?私と美雪の仲てそんなに悪く見えるの?
周りを見ると、固法先輩と初春さんもうんうんと頷いている。
「いやいや、流石にしないわよ。それとも何?私と美雪ってそんなに仲が悪く見えるの?」
「「見えます(の)(るわね)」」
三人が視線を合わせて頷き、声を揃えて言われた。
「・・・・・・と、とにかく喧嘩しなかったら良いんでしょう?ほら、行くわよ!」
「「・・・・・・・・・・」」
三人が揃って心配そうに私を見つめている。もう!何なのよ?私ってそんなに信頼無いの!?
そんなこんな感じで四人は美雪が居るアンチスキルの支部へと向かった。

side　change

御坂　美雪side

さて、私がアンチスキルに捕まってから三日が経ちました。再び今私は何をしているかと言いますと・・・・・
「とっとと吐いたらどうなんだ」
「・・・・・・」
尋問室で尋問されています。これで十回目です。しかも、私は犯人ではないのに。
その上での十回目ですよ?いい加減に無駄と理解して欲しいですね。
それに三日もあればレベルアッパーについての新しい情報が手に

入るはずなのに・・・・・・・・・・まあ、私を釈放していないのだから進展が無いのだろう。
「(本当にどうしようかしら?)」
これまでに得た情報でレベルアッパーのシステムについては理解した。それに、奏のお陰で犯人は確定した。ですけど
それを言って、信用してくれるわけがないですよね?
私が捕まっているのはそのレベルアッパーの犯人だと疑われているからだ。もし、私がそれを話すと間違いなく犯人と判断されてそれでお終いだ。
せめて、誰か部外者でも来てくれたら良いのだけれど、奏や先生達には大丈夫と言ってあるから来ない。それにこんな場所にわざわざ誰かが来る筈も
「失礼します」
「何だ?」
「ジャッジメントの連中がそいつと面会をしたいと訪問に来ています。」
「何?」
・・・・・・・・・来たよ。わざわざこんな所に。物好きな人も居るものですね?
と、冗談はここまでにして、間違いなく訪問者の面子は白井達であろう。多分、美琴さんもいるんでしょうね?
まあ、この際文句を言ってられないし・・・・・・来たら、出来るだけ喧嘩等を起こさないようにしておきましょう。
「・・・・・・分かった。通せ」
「分かりました」
おお。許可してくれましたか。まあ、このまま尋問を続けても無駄だと判断したから。そして、彼女達との会話で確かな証拠を手に入れようとしていると言う所でしょうけどね。
「おい、御坂美雪。ジャッジメントからお呼びだ。」
「(言わなくても分かってますよ)はーい。分かりました」
そして、私は彼女達が待つ場所へと向かう。

「ここだ。時間は三十分だ。良いな？」
「分かりました」
　時間を言われた私はそのまま返事してそのドアを開け中へ入った。
「あらあらあら、何となく予想していましたけど・・・・・・まさか、的中するとはねぇ」
　出来れば美琴さんはいなくて欲しかったんですけどね。
「そんな言葉が聞きたいんじゃないわ。とっとと話して」
「はてさて？何をでしょうか？」
　面会室の中央にある座席に座る。
　相手の方を見ると、全員苦悶の表情をしている。
「ふざけないで！」
「・・・・・・・・・」
　はあ、やっぱり駄目ね。美琴さんが相手だとどうしてもこう言う態度を取ってしまう。
　でも、すぐに起こる美琴さんの方が悪い。だから、謝らない。絶対に！
「美雪さん、お願い。時間が無いから、手短に済ませたいの」
「・・・・・・・・・・」
　固法さんが言った。
「美雪さん、お願いです。早くしないともっと大変な事になっちゃうんですよ」
「・・・・・・・・・・」
　飾さんが言った。
「妹様。時間が経てば経つほど辛くなってしまいますわよ？」
「・・・・・・・・・・」
　黒子さんが言った。
　私が犯人だ。と！
　何で皆そんな事を言うのかな？
「美雪。聞いたわよ？何度も尋問されているのに何も答えていないそ

うね」
「・・・・・・・・・」
そして、貴方もですか？
「とっとと白状しなさいよ・・・・・・あんたがレベルアップパーの犯人なんでしょ？」
御坂美琴!!
「はぁ～、本当にいい加減にして下さい。このクソ野郎」
「な、何よ。急に偉そうな態度を取って」
「何で皆さん全員が、私が犯人だと決めつけた上で話を進めているんですか？」
まず、それがおかしいでしょ？
「だ、だって明らかな証拠があるんじゃないの？だから、逮捕されたんでしょう」
「残念ながら、まともな証拠はありません。不確定な逮捕です」
「う・・・」
言葉を詰まらせないでくれないかしら？
他の皆も何も言わないの？
「もう良いです。話はこれまでにしましょう」
私は立ち上がりドアへと向かう。もういい。こいつらに話そうと考えた私が間違いだった。
「な、ちょ、ちょっと待ちなさいよ」
「はぁ？何で待たなくてはいけないんですか？」
もう私がこいつらと話す事なんて無い。
それに、もうそろそろ来ても良い頃だろう？ねえ――――――。
「おい、まだ話は終わっていないぐわっぁは!!!」
部屋を去ろうとした私を止めようとした男の顔面を殴り飛ばす。

”邪魔”

「別に良いでしょう？それに貴方達はただ証拠が欲しいだけなんでしょう？」

「お、お前。何をしている」
　チィッ！また、来やがりましたか
「御坂美雪。お前更に自分の罪を重くする「その必要はありませんよ」
な、誰・・・・だ!?」
「・・・・・・・・・・」
　漸く来ましたか。遅いんですよ
「お久しぶりですね。親船さん」
「ええ、二ヵ月ぶりですね。セツ・・・・いえ、ここでは美雪さんと呼
ぶべきでしょうね」
「そうですね。そっちでお願いします」
　話が早くて有り難いわね。それにここに来たと言う事はもう私が
ここに居る理由は無くなったと言う事だ。
「では、親船さん。もう、行きますね」
「ええ、行ってきなさい。もう、目星は着いているのでしょう？さっさ
と解決してきなさい」
「は～い。それじゃあ、行ってきます。あ！これを渡しておきますね」
　ポケットからあるモノを取り出して親船さんにそれを渡す。それ
はボイスレコーダー。それだけ言って部屋を出た。
「さて、とっとと行きますかね・・・てあら？」
「たっく、相変わらずだな。お前さんはよ」
「あら、紅葉さん。お久しぶりですね」
「お久しぶりじゃねえよ。はあ～、お前ぐらいだぞ？親船さんに対し
てあんな態度をする奴な
　んて」
「そうでしょか？」
　あんまり意識していないのですけどね？
「そうだよ。てか、無意識なのかよ」
「？」
「はあ、もう良い。それよりもだ。」
「何でしょう？」
「ありがとうな。これからも頼むぞ」

「もちろんです」
　分かってます。これからも仲良くしていきますよ。
「では、急ぎますので」
「おうよ。頑張れよ」
「さて、覚悟してくださいね・・・・・・木山（きやま）　晴美（はるみ）さん？」

０１０：何故、貴方が存在している!?

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
木山　晴美ｓｉｄｅ
「・・・・これで完成だ」

操作していたＰＣの画面にはｃｏｍｐｌｅｔｅと表示されている。これであの子達を救う事が出来る。
私の望みのために多くの学生達に被害を与えてしまったがそれの対処も出来ている。だから、問題はない。だが

「彼女は・・・・・・」

自分が犯人だと気づかれる時間を遅らせるために冤罪を被せてしまった一人の女子中学生。いや二人か。彼女達はどうすれば良いのだろうか?
レベルアッパーによって昏睡状態になった人達には一度、自身の能力の高レベルを体験する事によってレベルアプのきっかけを与えたが彼女達は違う。
ただ被害を与えただけだ。
「彼女達には本当に申し訳ない事をしてしまったな」
しかし、今はあの子達を救う事が最善だ。

「マスター」

「どうした?」

後ろを見るとあの男が立っている。相変わらずいつも急に現れるから慣れないな。

「先程、彼女がアンチスキルから釈放されました」

何だと？
おかしい。彼女が捕まってからまだ三日しか経っていない。一体何故？
「どう言う事だ？」
「彼女が捕まっている所に統括理事会？と言うモノの一人が来まして」
「は？」
統括理事会？あの統括理事会か!!一体どう言う事なんだ？
「それで、その人の権限で彼女を釈放しました。どうやら彼女とは交友がある様です」
・・・・もう分けが解らない。何故一般の生徒が統括理事会と交友を持っているんだ？いや、それよりも!!
「彼女は今、何をしている？」
「ただ今移動中です。恐らくこちらに向かっていると思われます。やはり、マスターが犯人だと気づいていたかと思われます」
やはりか。もう例のプログラムは完成した。ならば、早く移動しなければ
「到着時間は？」
「恐らく一時間位かと」

ふむ、時間は十分にある。

「十分で用意する。それまで警戒を頼んだ」

「分かりました。では」

そうして男は霧の様になって消えた。毎回思うのだが、あれはどう言う理論で出来ているのだろうか？・・・・・・は!!いやいや、今は早く準備を行わければ。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

???ｓｉｄｅ

「今の所以上なし。か」

私は今、マスターの命令で周りの人達には見えない状態で外の監視をしている。

それにしてもマスターにも困ったものだ。十分で用意すると言っておいてもうに三十分が経過している。

私はおそらくと言ったのだ。もしかしたらもうそこまで来ているのかもしれない。

いや、あの場所からここまでにはかなりの距離がある。問題ない・・・・筈だ。

普通なら一般の学生等警戒する必要なんてないのだが何故だろうか？嫌な予感がしてならない。

早く来てもらえないだろうか？

「すまない、遅くなってしまった」

と。そう考えていたら来てくださった。さて、行きましょう・・・・!!

「マスター、早く移動しましょう」

「うん？どうしたん「みぃつけた」!!」

マスターも私も急な声に思わず声の元を見る。そこには先程マスターと私が考えていた彼女が居た。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

御坂　美雪ｓｉｄｅ

ふう、漸く着きましたか。魔術で身体強化して移動しましたから僅かな時間で済みましたが、結構な距離でしたから少し疲れました。

とは言え、既に逃げられていたら元も子もないので意味はありましたね。ちょうど逃げようとしていた所だったみたいですし。

さて・・・・

「初めまして、木山晴美さん」

私は笑顔でそして、きちんとした姿勢で挨拶をする。

「・・・・」

警戒していますね。まあ、私は貴方を捕まえるために来ましたし、貴方も分かっている様ですし当然でしょうね。

「さて、私が何故貴方の所に来ているのか。分かりますよね？」

「・・・・」

さっきと変わらず無言を通しますか。まあ良いわ。

「さて、取りあえず話を進めます・・・・・木山晴美、レベルアッパーの件で逮捕させていただきます」

「ふふふ。君に出来るかな?」

漸く喋ったかと思ったらそんな事ですか?

「出来る出来ないではなく、やるんです」

「そうか。では・・・・・・やってみろ!!」

木山晴美の上空に複数の氷塊が出現し、私へと降り注ぐ。
この領域(ルール・オーバー・ドメイン)を我が支配下とする

私の周りで高速回転させた風の壁と轟音が響き渡り、辺り周辺に煙が舞う。

「(やっぱり使えましたか)」

木山が能力を使ってくる事は予想の範囲内だ。レベルアッパーは使用者の脳波を木山の脳波と同じにする事で能力のレベルが上がる。
即ち木山が能力を使っても何の不自然もない。と言うか当たり前だ。

「恨んでくれて構わないよ」

いや、私まだ倒れるどころか一撃もくらってませんよ?煙で見えないからと言って油断しすぎでしょう。
おかしい。これが木山が持っていた隠し玉なの?もし、それだけなら私は何の問題もなく対処出来る。けど、それならずっと感じているこの嫌な予感は何なのかしら。

どんなに考えてもそれは解らない。それなら・・・・

「(それが実現する前に処理する)」

煙を風で吹き飛ばし木山の元へと駆ける。

「な!!」

向こうは驚いた声を出し慌ててこちらに体制を向け攻撃しようとしているが遅い。こちらの攻撃が先に届く。

右手を握り魔力強化を加える。相手は能力が使えるからと言ってもただの研究員だ。顎に一撃を加えたらそれで動けなくなり、それで終わりだ。

そして、私の右手が相手の顎に届く。

「・・・・え?」

筈だった。気が付いたら脇腹に衝撃があって横に吹き飛ばされていた。

宙から地面に落ちるのをどうにか体制を整えて着地する。

「痛っ!!一体どこから・・・・・・!!」

先程私が居た場所を見る。そこには木山晴美・・・・・・ともう一人居た。

「やれやれ、マスター何度も言っているではありませんか。くれぐれも油断はなされぬようにと」

「う・・・・すまない」

二人が何か話しているが耳に入らない。それよりも・・・・

「な、何で」

疑問ばかりが頭に浮かぶ。

どうして存在、いやここに居るの？

木山の側に居る男。その姿、雰囲気、全てにおいて異質だった。少なくともこの学園都市では。

「サーヴァント？」

私は呟いた、その男の存在名称を。

０１１：サーヴァントとの闘い　―真名判明―

「サーヴァント？」

「ほう。私の事をご存知の様だ」

「な!!こいつの事を知っているのか？」

”サーヴァント”その言葉に木山は驚き、サーヴァントは感心したような態度を見せている。

だが妙だ。何で木山が驚いている？サーヴァントが木山の事をマスターと呼ぶと言う事は木山がマスターで契約を結んでいる筈だ。

だったら彼の事は彼女が一番良く知っている筈では？

いや、彼女は科学サイドの人間だ。だったら本当に知らないのだろうか？

「どう言う事だランサー。何故あの娘がお前の事を知っている？」

「私に言われましても分かりませんよ」

それはそうでしょうね。だって、私と彼は初対面だもの。いや、それでも私が魔術に関わっている事は分かる筈だ。

何故誤魔化しているの。言う必要が無いから？

と言うか、ランサーと言いましたね。まあ、両手に槍を持っているし、ランサーである事は明らかなのだけど。

「さあ、そんなことよりも早く行ってください。ここは私がくい止めます」

「・・・・分かった。頼んだぞ」

そう言い、木山は側にある車に乗ってこの場を去った。
さて、まずはこいつをどうにかしないと。木山を捕まえるのはその後だ。

「取りあえずは・・・・お礼を言うべきかな?」

「別に好きで見逃したわけではないです。どうせあの時、私がに突っ込んだらまた貴方が邪魔するじゃないですか?」

「当然だ。マスターを守るのが私の役目なのだから」

「だったら、まずは貴方を倒してから木山を捕まえる。それだけの話です」

「ふん・・・・出来るものならやってみるといい」

サーヴァントいやランサーは小ばかにした様に笑う。が、全く隙がない。
は~、少しぐらい油断しでくれたら良いのに。まあ・・・・

「出来る、出来ないではありません。やるんです!!」

”この領域を我が支配下とする（ルール・オーバー・ドメイン） 雷よ（エレキ）”

魔術回路を通し空気に自身の魔力を浸透させ、電子を操作する。
周辺に雷の塊を出現させ相手に向けて放つ。雷であるからそのままの速度で相手に向かう。

「ふん。甘い!!」

軽々と避けられ、雷は暫く進んだ後に消えた
やはり、この程度では当たりませんね。サーヴァントのステータスは人間のレベル逸脱している。それを考えたら当然よね。
私は再び雷を作り、放つ。

「先程と同じ事をし・・・・何!!」

最初は放った時点で操作を止めていた。しかし、今回は少し違う。
それは・・・・

「ふふふ。それは貴方に当たるまで付いて行きますよ」

それは、永遠に操作を行い続けている事。どんなに避け続けようと貴方を追い続け、右へ左へと移動を逃がさない。
これだけやれば、時間は掛かるが必ず確かな一撃が与えられる筈だ。
けれど・・・・

「痛っ!!」

頭に軽い痛みが走る。私の魔術には脳に結構な負担が掛かるので、長時間使う事が出来ない。
だから、短時間でケリを付けなければならない。
一つを制御するだけでもかなり負担を掛けてしまうのに、それを複数操作し、相手に当たるまで続ける。
木山を捕まえるどころか、こいつを倒す事すら不可能に近い・・・・いや、不可能だ。
それでも、やるしかない。
更に雷の数を増やし、それもランサーに放ち操作する。
脳の負担が重なるが、ランサーの動きが悪くなる。この調子なら何とか・・・・

「このままではジリ貧か。ならば」

様々な方向へと避けていたランサーは回避を止め、私の方へと駆け出した。

だが、サーヴァントとはいえ宝具ならばともかく、一度の攻撃ならどうにか防げる。

”この領域（ルール・オーバー・ドメイン）を我が支配下とする　風よ（エア）”

先程木山の攻撃を防いだ様に風を自分の周りに纏い、風の壁を作る。

これでランサーの攻撃を弾き、後ろから雷を当てる。それで倒せるとは思わないが、少しは優勢になるだろう。

そう考え、ランサーを見据えるが・・・・その顔は不敵に笑っていた。そして、ランサーに大きな変化が現れる。

ランサーの持っていた片方の槍に包まれていた皮が捲れ、本来の姿が現れた。

「な!!」

槍の矛先が私へと迫る。

しまった。ここで宝具を使うとは思っていなかった。

気づいたのは良いが遅すぎた。体を捻らせて槍を避けるが、作り上げていた風の盾に当たる。本来なら弾く筈なのだが・・・・

切り裂かれた音と共に掻き消された。

「クッ」

紙一重で躱すが、更に槍の追撃がくる。先ほどと立場が変わり、今度は私が上へ、右へ、左へと避ける。て、ちょっと待て!!

「殺す気ですか!?」

「ふ、だが君はこうして生きているじゃないか」

「そ・れ・は結果論でしょうが!!」

どれも当たったら致命傷になりかねない一撃でしたよ。覚悟をしているとはいえ、死んだりしたらどうしてくれるんですか?

「まあ許してくれ。ここに現界して初めてのちゃんとした戦闘なんだ。それに、こちら側だろ?君は」

やはり分かりますか。学園都市に居る限りはそうそうばれないと思ってたんですけどね。

「恐らく君の魔術は自身の魔力を周囲に散らばせ、周りの物質全てを操作する支配すると言った所か。全くやっかいなモノだ」

しかも、私の魔術までバレてしまった。いや、やっかいなのはこっちのセリフだ。

「そう言うのは私の魔術に対応出来ない状態で言ってください」

あの宝具の槍は魔力を打ち消す効果を持っているのだろう。だから、私の風の盾が切り裂かれた。

だったら、明らかにこちらが不利だ。私の攻撃手段のほとんどは魔術によるモノだから、相手の宝具で無駄。そして、魔術なしで挑んだとしてもサーヴァントの身体能力に敵う筈がない。

「全く、何で貴方みたいな人がここに居るんですか?」

「ふむ。まあ、それについては私自身にも分からないな」

「どう言う事ですか・・・・これは聖杯戦争に近いモノではないのですか？」

この世界にサーヴァントが現界したそれは即ち聖杯が完成し、聖杯戦争が始まるのではないのですか？

「!!そこまで知っているとは驚きだ」

「貴方が私をそちら側と判断したじゃないですか。だったら、知っていてもおかしくないでしょ？」

「成程な・・・・これは益々近づけるわけにいかなくなったな」

何を今更言ってるのだか・・・・絶対に貴方を倒し、木山を捕まえる。それに、

「それは叶えさせませんよ・・・・ディルムッド＝オディナ。もう一つの宝具は使用しないんですか？」

「な!!」

「何を驚いているんですか？二槍使い、魔力を打ち消す宝具の槍、もう片方は永久に傷を残す呪いの槍ですね」

「・・・・」

サーヴァントの真名が分かり、相手もこちらの魔を理解している。

情報戦では両者並んだ。

さて、勝負はここからですね

012・・・・・・殺す!!

「私の真名を見破ったか・・・だが、それだけではこの状況は変わらんぞ」

「さあ、それはどうでしょう?ディルムット・オディナを知っているのと知らないでは全然違うと思いますよ」

”この領域(ルール・オーバー・ドメイン)を我が支配下とする　火(フレイム)よ”

自分の側に強大な火を形成、更に

”この領域(ルール・オーバー・ドメイン)を我が支配下とする　火(フレイム)よ姿(レイム)を変えろ――猪(ベラット)へと”

形を猪へと姿を変える。

「んな!!」

「どうかしましたか?ディルムッドさん」

驚愕いや、恐怖を見せるディルムッド・オディナ。

私は分かっている上で問いただす。

「貴様ぁ、分かっていやってるだろう!?」

「はてさて、何の事やら?」

とある二槍流の男の死んだ原因が魔猪だなんて私は知りませんよ。

さあ、行きなさい。

指令を与え、猪を突っ込ませる。

ディルムッドは先程とは違い、必死に回避に徹している。

それもしょうがないですね。自分の死んだ原因と戦うんですから。

「クッ!卑怯な」

卑怯?

「それがどうしました?勝つために、あらゆる手段を使う。当然の事でしょう」

「チィッ!!」

さあ、これでどうにか。

side change

ディルムッド・オディナｓｉｄｅ
私はこの世界に来て絶対と言える位に回避に全力を尽くしている。理由は単純で、彼女が魔術を使って作り出した火の猪に怯えているからだ。
私の過去を知っていて敢えてそうしたのだろう。
あの娘め!!
槍を使って打ち消そうと考えたが、殺されたトラウマか?どうにも突撃しようとする直前に停止してしまう。
「クソ!!」
「フフフ」
私の様子を彼女はただ見て笑うだけ。
ただ時間が過ぎていく。このままではマスターが危険だ。
だからと言って、彼女を殺す等・・・私もマスターも望んで等いない。
だが、このままではマスターが!!
先程から同じ考えが交差し続ける。どうすれば良いんだ!!
『わかってるんだろう?』
何だ!?何処から声が?周りを見渡すがこの場には私と彼女しか居ないし、どちらも声を発していない。一体何処から?
大きく後退して、周りを警戒するが・・・やはり私達二人以外、誰も居ない。
「どうかしましたか?」
彼女が不思議そうにこちらを見ているが、気にしている場合ではない。
「誰だ!何処に居る?姿を現せ!!」
『今、自分が何をするのが正解なのか?』
この声・・・まさか!!
『そう』
私の体の中から・・・だと!!
自身の体を見る・・・何だ、これは!?
私の体から黒い何かが流れ出て・・・

『迷いを捨てて、あいつを殺せ!!』
私の体を包み、私の意識はそこで途絶えた。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美雪ｓｉｄｅ
一体どうしたのだろうか？
いきなり声を出して周りを見渡したと思ったら、今は黙って呆然と立ち尽くしているだけ、大きく後退したので罠かと判断して火猪の動きを止めましたが、違ったようですね。だったら、攻撃を続ける。
そう思った一瞬で・・・・
ゲイ・ジャルグで猪が掻き消された。
「え？」
余りにも突然な事に呆然してしまう。
「君の言うとおりだ」
その間に背後からディルムッドの声が!!
いつの間に!?速く移動いや、防御を
「遅い!!」
バギンと鈍い音と共に吹き飛ばされる。
一回、二回、三回と地面にバウンドし壁に強く激突して漸く止まった。
「う・・・あぁ」
余りにも強い衝撃で頭が上手く働かないし肺の空気も全て吐いてしまって呼吸もままならない。
「先程まではマスターの命令で人は殺すなと言われていたが・・・・」
声が聞こえ、顔を上げ見つめる。視界の左半分が真っ赤だ。どうやら、頭から出血もしている様だ。
頭に触れて状態を確認しようと左腕を動かそうとしたが動かったので右腕を動かして触れる。
べちょりとかなりの量の血が手にへばり付いた。これはマズイですね。いつ死んでもおかしくない程の量だ。それに・・・・
「痛っ!!」

先程、確認のために動かそうと動かせなかった左腕を見る。
もう見るも無残な形に歪んでいた。
「勝つためならあらゆる手段を使う。だったら、わざわざ敵に殺さない様に手加減するのもおかしいものだからな」
先程とは違って、彼の表情に完全な殺意が満ち溢れている。
これはマズイ。最初に相手してた時から感じていた僅かな殺意のなさに安心していたが、このままでは本当に殺される。
何とか意識を集中させて体を動かそうとするが・・・・

”グシャ”

「がぁ!!」
「ほう、まだ動けるのか?」
動こうとしていた私の左肩をゲイ・ボウで貫く。
しかも、宝具としてだ。これで、この傷はあの槍を破壊するまで永遠に治らない。
「これでもう動くことは不可能だろう?」
「うぎ・・・こんの!!」
悔しいけど、その通りだ。もう私の体はボロボロ。魔術を使おうにも精神的にも限界で、更にこれだけの傷を負っていたら痛みで集中できない。
「さて、これで君からの私のマスターへの被害がなくなったわけだが、完全になくなったわけではないな」
おい、このまま他の人達まで殺す気ですか?
こうなったら多少無理をしてでもとめなけれ・・・・
「そうだな・・・・まずは、今マスターが戦っているであろう集団。その後に、君の親友の彼女を始末しようか?」
・・・・は?
今、こいつは何を言いました?
奏を殺す?
どうして?

奏は魔術とは関係ないのに？
それなのにどうして奏が殺されないといけないの？
・・・・そっか。こいつが存在しているからか。
ヨシ、こいつを殺そう!!
体がボロボロで動けない？精神が限界で魔術が使えない？
それがどうした!?
”我が支配する（ルール・オブ・ドミネート）　限界突破（リミットオーバー）――――対象自分自身”
私自身の能力値を全開放する。
ディルムッドを蹴り飛ばし、腕に刺さっていたゲイ・ボウを引き抜いてへし折る。
”肉体再生（リバースボディ）――――対象自分自身　≫　一時間前の肉体”
グシュリグシュリと自身の身体を再生させ、立ち上がる。
さて、これで準備は万端だ。
では・・・・
「殺す!!」
「アァァァァァァ!!」
吹き飛ばしたディルムッドはすぐに立ち上がり、突っ込んでくる。
最初に比べて様子が明らかにおかしいが、そんなのは関係ない。
”この領域（ルール・オブ・ドミネート）を我が支配下（バー・ドメイン）とする　風（ウィンド）よ”
”この領域（ルール・オブ・ドミネート）を我が支配下（バー・ドメイン）とする　光（フォトン）よ”
風を操作して遥か上空へと飛んで、槍の一撃を交わす。
高度は約百メートルの位置で浮遊し、ディルムッドを見下ろす。
光を操り、自分の足元の周りを移動させる。ただ、移動させているわけではない。描いているのだ。魔方陣を!!
「!!!!」
ディルムッドも気づいたようだが、無駄だ。光を使って光速で書いたのだ。後はこの魔術を
「喰らえ!!」
お前に放つだけだ!!
一”天より轟く雷よ、一条の光となりて、汝の裁きを今ここに《ル

ギスメンドウシエル・ディベイルミニエ・ジャッジメイテナント》
”神罰の爆雷（プロフォンディウル）”
魔方陣から巨大な爆雷がディルムッドに向って落下し、周辺に轟音が鳴り響き、爆散した。

013：一つの戦いが終わり、他の所では？

上空から見下ろす。
ディルムッドが居た周辺は瓦礫の山と化していた。
辺りには火と雷が散らついている。
「ディルムッドは・・・!!」
そこで脳の限界を迎え、風を操れなくなり私の身体は自由落下を始めた。
高さは約百メートル、この高さからで地面に落ちれば当然死んでしまう。
主な魔術の空間支配は勿論、身体強化も投影魔術も魔力も少なく、集中が出来ないのでほぼ使用できない。
考えろ
思考しろ
僅かな時間も無駄にするな
・・・・・・・
・・・・・
・・
五点接地だ。
五点接地。パラシュート着地や高い所から飛び降りる際に衝撃を和らげて着地する方法。着地と同時に身体を転がす際に足の爪先・脛脇・腿脇・背中・肩の順に地面に転がる。まあ自分をダンゴムシだと思いながらやれば良い。
問題は着地する地面が瓦礫だらけで水平じゃない事、私が頭から落ちている事だ。
着地が頭上からになる上に転がる途中で傷を負うだろうが、死ぬよりはマシだ。
大きく息を吸って、一度息を止めてから吐き出す。
地面に着地するまで三
二　最初地面に触れる両手に微力でもと魔力を流そうと試みる・・・
駄目

一　腕を頭の上に差し出す
零!!

力一杯腕を振り地面を弾き、身体を回転させる。そして、肩・脇・腰・足と地面に転がっていく。
「痛っ!!」
予想していた通りに瓦礫に身体が当たり、傷が生じていき呻き声を挙げてしまう。
そして、足が地面に着きその勢いで身体が浮いて離れた瓦礫の壁に激突して漸く体が静止した。
「ゲホッゴホッ!!」
多くの血を吐き出す。何本の骨が折れているだろう?直そうにも領域支配を行うにはもう少し脳を休ませる必要があるので今は我慢するしかない。
私は動けないが、木原の確保はアンチスキルが確保をしてくれるだろう。
そう考え、脳を休ませることに専念しようとした。
「Ｇｉｉｉａａａ

嫌だ。このまま死んでたまるか。
自分の存在を否定したまま死んでたまるか
相手の腕を掴み何とか引きはがそうとする。
だが、やはりサーヴァントの力には敵う筈がなくびくともしない。
ダメ。どんどん、意識が遠のいて、い、く。
ブジュウウゥ
「Ｇａａａａａａａａａ!!!」
ドサリと地面に落ちた衝撃で遠のいていた意識が再び目覚める。
「げほげほっ!!がは!!」
呼吸が出来なかった分の空気を一気に取り込み、咳き込む。それと同時に血を再び吐いてしまう。
まだ酸素が足りていないせいか意識が朦朧とする。
ぼやけた視界で相手を見つめる。
「・・・・・・・え？」
そこで見たモノ。それは自分の腕をゲイ・ボウで刺し貫いている姿だった。
「余計な真似を・・・するなあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
先程とは違い、瞳の色も言語も正常に元に戻っている。それに、黒い瘴気が剥がれてきている。
どういう事なの？
ディルムッドは槍を腕から抜いた後、自分の胸を刺した。
『Ｇｒｕｕａａａａａａａａａａａａａａａ』
ディルムッドの身体と黒い瘴気が剥がれて完全に分かれ
『ａａａａａａａａａａａａａａａ

まりが出来ている。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

ディルムッド・オディナｓｉｄｅ

「ははは・・・これで私のこの世界での戦いは終わりか。前回に比べ、短く儚いものだ」

自分の状態を確認して自分が死ぬと分かり、空笑いを出す。

今回の限界は聖杯戦争では無かった。この世界には聖杯と言うモノは存在しなかった。本来現界すれば聖杯からその世界の情報を与えられる。

即ち私は何も知らない赤子の様な状態だった。

だが、それはマスターによって救われた。

そして、驚く事となる。

彼女が言っていた通り私の眼の下にある泣き目ぼくろがある。それのせいで私と目が合った女性は私に好意を抱いてしまう。

今回のマスターが分かった途端私は絶望した。前回の第四次聖杯戦争でのソラウ様との悲劇を生んでしまうと思ったからだ。

ところがどうだ？マスターである彼女は最初に私を見た時には驚いていたが、それだけだった。

マスターは私に興味を示したが、それよりもやらなければいけないことがあるらしくそれに没頭していた。

私がすることはマスターの家事全般だ。まあ、掃除をしても部屋はぐちゃぐちゃ、食事はこの時代の知識がないので自分で作る事が出来ないのでマスターから与えられる紙切れを使ってコンビニ等で購入してくる始末。

私は何も出来ておらず、少しでもマスターのために頑張ろうと尽くした。

だが、もうその願いはもう叶わない。私の命はもうすぐ尽きる。

せめて、マスターの目的が果たされる事を祈る。

”我が支配する（ルール・オブドミネート）”

今回は異例の召喚のせいか、いつもと違い暖かい感じが・・・

それに何だろうか。声が聞こえる。
「まだ、死なせませんよ。あなたには聞かなければならないことがたくさんあるんですから」

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美雪ｓｉｄｅ
何勝手に消えようとしているんですか。あなたには聞かなければならない事がたくさんあるんですよ。
絶対に助けてみせる。
脳の限界？そんなのは超えてやる。
”我が支配する（ルール・オブ・ドミネート）　肉体再生（リバースボディ）”
瞬時にディルムッド・オディナの肉体を読み取り再生させる。
先程まで散っていった光の粒子が集まっていき、肉体が戻っていく。お願い、あと少しだから。

・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・
・・
・

「・・・・・・何故、私は生きているんだ？」
「やっ・・・・た」
肉体の再生が確認出来、安心した私は地面に倒れた。その際にバシャと音が聞こえ、体に何か液体が着いた。
あぁ、これ血ね。私のもあるでしょうけど、大半はディルムッドのよね。最悪。
どうにかしようにも、もう本当の本当に脳の限界である。声も出せないし、指一つ動かせそうにない。
「ｕｇａｋｆいこあｗｈ」
ああ、駄目だ。もう限界

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

ディルムッド・オディナｓｉｄｅ
「おい、どうした。大丈夫か？」
これ以上彼女を傷つけないために最後の力を振り絞り、ゲイ・ボウで自身の胸を貫き自害した筈なのだが次に意識を取り戻すと英霊の座ではなく未だに限界したままだった。
起き上がり、自身の状態を確認する。状態は万全。彼女と戦い、傷を負う前の状態となっていた。これは・・・彼女が何かしてくれたのか？
バシャリと何かが液体に落ちた音が聞こえた。音源は私の傍。視線を向けるとその彼女が血だまりの中に倒れていた。
すぐに状態を確認する。身体を揺する。目は開いている。呼吸は正常。だが、体はボロボロ、更に様子がどこかおかしい。意識はある筈なのに私に全く反応を示さない。
これは今すぐ、病院に搬送しなければ・・・・っっっ!!
「マスター!!」
彼女の身体を運ぼうとしようとしたが、急に訪れた信号によって中断される。それは聖杯戦争によりマスターと繋がった私とマスターのパスでの信号――――マスターの危険を示す信号。
「クッ!!すまない。許してくれ」
思い出すのは前回の聖杯戦争。私はこれ以上主を裏切る事は出来ない。
そう決断した私は彼女をその場に放置し、マスターの元へと駆け出した。
「・・・・・・」
最後まで彼女は一言も喋ることは無かった。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ
御坂　美琴ｓｉｄｅ
時は御坂　美雪がアンチスキルの刑務所を出た直後まで遡る。
「何余計なことをしてくれてんの!?」
せっかく犯人が美雪と分かりこの場に来たというのに、この女のせ

いで逃げられてしまった。
　漸くレベルアップパーの解除方法を聞き出して佐天さんを助けられると思っていたのに。
「余計な事？私はただ、美雪さんを解放しただけですよ」
「それが余計だって言ってんのよ!!」
「御坂さんの言う通りです。これでやっと佐天さんを助けられると・・・・・」
　私が心で思っていた事を初春さんが口に出している。その目には涙が。
　佐天さんと一番仲が良いのだから気持ちはよくわかる。
「親船さん。そろそろ」
「・・・・そうですね。他にも言いたいことはありますが、話を進めましょう」
　言いたい事？
　こっちに言う事はあってもそっちに言われる事なんてない筈だ。
　こっちの事情はほったらかしで話は進む。
　側に居る男がタブレットを渡している。
　女は受け取り、ＵＳＢメモリを挿した。
　暫く画面を見ていたが
「成程、そういう事ですか」
　成程て何よ。と言うか私達を放置してんじゃないわよ。
　この人達を無視して進もうとしたが出口はそいつらのせいで塞がれてるし、強硬手段にするとしても相手の年寄りの人はかなり偉い人だからそれはだめだし
「これを御覧なさい」
　私たちは向けられたタブレットの画面には二つのデータが表示されていた。
　一つ目は論文それは脳関係についてだ。
　二つ目は脳波のデータ。二つのデータが上下に表示されている。
「これが何だって言うのよ？」
「この二つのデータには両方とも一人の人物が関わっている様です

よ」
「この論文の著者及び、脳波のデータは木山晴美の様です」
画面を更にスライドさせると、脳波の検索結果で木山さんのデータが表示された。
嘘だと思った。だって、つい最近彼女と話したばかりなのに。
そう考えていると、相手からＵＳＢメモリが投げられてきた。
「私達はこれで帰ります。後はご自由に」
それだけ言うと二人は去っていった。
この状況どうしよう？
本来は美雪を捕まえようとしていたのだけれど美雪のデータが確かなら違う事になる。
私はどうしたら・・・・
「御坂さん!!早くそのデータをアンチスキルに渡しましょう」
「っ!!・・・初春さん？」
え？急に声を出してどうしたの？
「初春の言う通りですわ。お姉さま。この情報があれば、アンチスキルはすぐに動き出しますわ」
初春さんの発言に黒子も続く。
そ、そうよね。
この情報があれば、アンチスキルは動いて木山晴美を逮捕出来る。
そうしたら、佐天さんやレベルアッパーの被害者達を助ける事が出来る。
そうだ。
これで良い。
良い筈だ。
「・・・・そうね。黒子、初春さん、行きましょう」
「はい!!」
私はＵＳＢメモリを初春さんに渡し、急いでアンチスキルに渡しに向かった。
この時・・・・・・いや、これ以降も誰一人、美雪を助けようと等一切考えることは無かった。

０１４：黒い●●

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

御坂　美琴ｓｉｄｅ

「はぁ、はぁ、はぁ」

息が荒くなり、服はボロボロ。その状態で、相手睨みつける。

しかし、相手はどこ吹く風か。ほぼ無傷で涼しげな表情だ。

相手は木山　晴美。今回の幻想御手事件の黒幕だ。

美雪から受け取ったデータから、犯人が木山だと分かった。その情報を警備員に渡すとすぐさま行動に移った。

学園都市の監視カメラの情報から所在を掴み、武装して逮捕に向かった。

私と初春さんも同行した。一刻も早く、木山を捕まえて佐天さん達を救うためだ。

「木山　晴美!!幻想御手頒布の被疑者として勾留する。今すぐ、降車しろ!!」

車で移動中の木山の行き先に待ち構え　到着と同時に捕らえる・・・・・・筈だった。

到着した木山は警備員の警告に従い、車を降りた。

木山を逮捕するために、ゆっくりと警備員が進んでいくが・・・・・・

「ぎゃッ」

「ぐっ」

突然警備員の一人が仲間を発砲した。

「な!?どういうことよ?」

「御坂さん。あれ!!」

初春さんが指さした先は警備員ではなく、木山　晴美。

木山はみ位手を前に出す。その手には風が渦巻いている。

渦巻いた風が警備員に放出さし、吹き飛ばす。

それから、水や火の放出。車を浮かせてぶつける等を行い、警備員達を倒していく。

「嘘。学生でもないのに、能力を使っている?」

と言うことは、木山は能力開発を受けていた？でも、基本、能力者が使用できる能力は一つの筈、どうして・・・・・・『ガコン』!!
思考している途中に身体が揺れる感覚。これは、私達が乗っている車が揺れている。
「まずっ、初春さん!!」
「は、はひっ!!」
初春さんを抱えて、ドアを蹴破って外へと出て着地し、初春さんを降ろす。
その直後に案の定、車が衝撃で爆発し、轟音が鳴り響く。
「っ～!!本当にどうなってんのよ!?」
木山の方を見ると、そこにはもう立っている警備員（アンチスキル）は居なかった。
「ほう・・・次は君かい？超電磁砲（レールガン）」
「・・・」
初春さんを庇うように立ち、構える。
「本当に能力が使えるみたいね。けれど、複数の能力がを使用できるのはどういうことかしら？」
「幻想御手（レベルアッパー）は人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ・・・・・・だが同時に使用者に面白い副産物を齎す物でもあるのだよ」
「・・・・・!!嘘。まさか!?」
なにかに気付いた私にフフフと笑う。
「さて、超電磁砲（レールガン）。君に一万の脳を統べる私を止められるかな？」
言葉と共に真空刃が私に襲い掛かった。
私は真空刃を躱し電撃を放つが、木山の周囲で遮蔽されるように弾かれた。どうやら、能力でさえぎられた様だ。
電撃の消失と同時にレーザーが出される。
「一万人のそれぞれの能力を使えるなんて、どんなチート・・・よ」
私は身体を傾け、再び電撃を放つ。レーザーを出している途中に防ぐことは出来ないだろう。
そう考えての行動だったが・・・・・・

電撃は遮蔽され、電撃を道路上へと流された。
「!?」
「どうした?複数の能力を同時に使う事はできないと踏んでいたのかね?」
木山の正面に高速道路に巨大な炎が出現し、衝撃波を発生させた。
それによって、道路に大きなヒビが入り、道路が陥没して私と木山は下へと落下する。
私はすぐさま能力で足先に磁力を展開し、鉄橋に張り付いた。
木山を確認すると、先程と何の変りもなく地に立っている。
「拍子抜けだな超能力者というのは。この程度のものなのか。
「まさか!電撃を攻略したくらいで勝ったと思うなっ!!」
御坂は鉄橋から一枚の鉄板を取り出して木山へと磁力の反発力で木山へ飛ばした。
「ふむ」
木山は腕から赤い色味を帯びた光を放つレーザーを伸ばし、投げ付けられた鉄板をはたき落とした。
「アリ?」
そして、レーザーを放出すると御坂が立っている鉄橋の支柱を下部を焼き尽くした。
一瞬で物体が消失し、御坂の立っている鉄橋から鉄板が剥がれて地面へと落下していく。
「あだっ」
急な落下だったので、何の対応も出来ずに腰から地面に落下してしまった。
クッソー。あいつ~。
身体を起こし、行動しようとしたが・・・・
「もう止めにしないか?」
「はぁ?」
急に何を言い出すんだこいつは?
「私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する。誰も犠牲にはしない……」

「ふざけんじゃないわよっ!!」
私は大きな声で言った。
能力がない事で悩んでいた佐天さんを持ち上げて、突き落とす真似をしておいて！
「誰も犠牲にはしない？アンタの身勝手な目的にあれだけの人間を巻き込んでおいて人の心を弄んで……　こんな事をしないと成り立たない研究なんてロクなもんじゃない!!そんなモノ見過ごせるわけないでしょうがっ!!!」
「はぁ、やれやれ、レベル5とはいえ所詮は世間知らずのお嬢様か」
木山の言葉にますます怒りが募る。
言っては何だが、私は他の常盤台の子達と比べれば一応世間の方には詳しい筈だ。
・・・まあ、その行動のせいで黒子によくガミガミ言われるんだけど・・・・・・て、違う!!
今は！
「学園都市で君達が受けている『能力開発』、アレが安全で人道的なものだと君は思っているのか？」
「!?」
「学園都市は『能力』に関する重大な何かを我々から隠している。学園都市の教師達はそれを知らずに一八〇万人にも及ぶ学生達の脳を日々開発しているんだ。それがどんなに危険な事かわかるだろう？」
「……　なかなか面白そうな話じゃない。アンタを捕まえた後でゆっくりと調べさせてもらうわっ!!」
御坂が地中にある砂鉄を集めて、鋭利に尖らせると一斉に木山へと攻撃した。
木山は微動だにせず、念力で瓦礫を持ち上げて鋭利になった砂鉄を受け止めていく。
「調べる……　か。それもいいだろうぅぐっ!!」
喋っている途中に、木山の様子に変化が表れた。
「はぁ、はぁ。これは・・・・・何かあったのか？ランサー」
地面に膝をつけて苦しみだした。

ランサー・・・・・・槍使い？何の事？
私の攻撃を槍と判断した？何か槍にトラウマでもあったのかしら？
そう考えている間に能力が解除され、瓦礫も地面に倒れた。
「はぁ、はぁ。これは、どういうことだ？体から力が・・・・・・」
瓦礫の奥に居た木山は地に倒れ、苦しそうにしていた。
槍によるトラウマによって、能力が使えなくなった？
「よく分かんないけど、木山。これで、あんたの野望は終わりよ。とっとと佐天さん達を解放してもらうんだから」
「う、ぐうぅぅ」
私の言葉が聞こえているのか、いないのか？
苦しみながらも、力を振り絞って体を起こし、立ち上がった。だが、もうそれが限界で息絶え寸前の様だ。
「ちょっと、これ以上無理すんじゃないわよ。このままじゃ死んじゃうかもしれないわよ」
「私は・・・・・・」
私の言葉を聞かず。木山は喋りだした。
「私はあの子たちを救うために!!止まるわけにはいかないんだぁぁぁぁ!!」
「!?」
私は、木山の必死な狂気の声に表情を強張らせた。
そして・・・・・・・
「え？」
木山が叫んだ直後、どこからかやってきた黒い何か。
それが木山の正面に立ち止まった。
『あんたの願い。俺が手伝ってやんよ』
黒い何かは、その一言を言った後、木山を包み込み・・・・・・・
巨大な化物へと変わった。
『子供達を救いたい。そう願うのは、子供達が意識不明で他の人間に比べて不幸だから。だったら・・・・・・全ての人間を殺して、あの子達よりも幸せな人間が居なければ良いよなぁぁぁぁ!!!』

黒い化物は世界を震わせる叫びを挙げた。

ｓｉｄｅ　ｃｈａｎｇｅ

御坂　美雪ｓｉｄｅ

「・・・・・・・・・」

『第一から第六までの条件を満たしました。これより偽りの自分（フェイカー）を発動します』

地面に倒れている御坂　美雪。

その体からパキパキと何かが剥がれていった。